

---

# 東方機械大鳥

茄子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方機械大鳥

### 【Nコード】

N5707I

### 【作者名】

茄子

### 【あらすじ】

幻想郷は現実世界で幻になった物が行き着くという場所。

そこにはある日から過去の忘物とされた兵器と乗員が一緒に漂着するようになった。

あらゆる時代のあらゆる陣営、国を問わず集まってくる兵器達。

時代と共に消えた悲しき戦道具とそれに命を乗せる兵士達。

いつ帰るか分からぬ故郷を想い、夢幻の兵は誰をかばって戦うか。

この小説には東方projectの二次創作です。中には多数の二

次設定や無理やり設定、 オリキャラや予備知識が無いと分からない内容等がひしめいておりますのでそのような事が苦手な方は今の内に退却して下さい><

13000PV突破感謝します!!!!!!

こんな駄文小説に毎日足を運んで頂いた皆様のおかげです!!!!!!

本当に有り難う御座います。

近況

年内二十話は無理でしたが

今年は出来る限り更新していこう

と思っていますので応援宜しく

お願い致します!!

第一話「模擬戦 護衛のち幻想入り」(前書き)

処女話なんて見にくい箇所あり

## 第一話「模擬戦 護衛のち幻想入り」

第一部「模擬戦 護衛のち幻想入り」

二千？年三月某日 米国 フロリダ半島近空。

今日は米空軍の新人パイロット教習試験の最終科目

「教導教官との一騎打ち」が行われる。

今日も一機のアメリカ空軍所属のF-16と二機のアメリカ海軍より提供された退役済みのF-14がドッグファイトの準備をするために同海軍より貸与されたニミッツ級空母「クリステイ」甲板上に姿を現し、その冷たい全身を朝日の曙光に晒していた。

船内のブリーフィング室で今日の訓練課題が説明される

「離陸は午前十一時から始め十一時三十分には実習として空軍のAC-130Hを護衛する、そこを教官機が襲うので守りきれば合格と言つ手筈だ。」

ビールっ腹の頭が禿げた士官からの説明なんて聞くものは誰もいない。

何にせよ、今日飛ぶのは教習生が二人、教導教官一名のみ、他の教習生は既にこの課題をクリアし、船内の居住区で飲めや歌えや

のパラダイスと化しているだろう。

「ったくよお、テキサン教習機はスクーターの如く乗り回したのにいざ戦闘機となればこの様だもんなあ……」

少しヒヨロヒヨロした教習生がぼやく

「元はと言えばお前のニアミスのせいでこんな結果になったんだからな？ 訓練終わったらコーラー一本じゃたりねえからな。」

金髪で尚且つ「いかつい」と言う言葉が似合う青年が小さな声で返す。

「あ？ コーラなんて飲みモンじゃねえよ」

教習生の片割れの頭に士官の指示棒の鉄槌が頭に直撃した。彼は頭を押さえながら唸っている。

「人の話ぐらい真面目に聞きやがれジェフリー一等兵！  
そして隣で「助かった」って顔するなジャック一等兵！  
さっさと甲板行ってトムキャットに乗れ！ 教官がお待ちだぞ！」

二人は手持ちの腕時計を見、十時五十分である（実は五分ずれている）の確認し、機内に持ち込む食料をスーツに詰め込んだりしたため搭乗完了時刻が十一時になってしまった。

整備員がキャノピーを閉め、親指を上げる

これは「幸運を祈る」なんて意味ではない。  
整備員はガラス越しに「折角整備した機体をお釈迦にしたら今度こそタダじゃすまねえからな？」と言っていた。

「へいへい、わかったわかった、帰ってきたらビールでも

奢ってやるよ。」 ジャックが呆れ気味に整備員に言う。

まずはジェフリー機がカタパルトに移動、車止めを掛けられ、エンジンを加熱させる。そして射出、全長二十メートル程もある「雄猫」は 大西洋の海に鈍く光る灰色の体毛を光らせ上空に飛び立つ。それを追うように二機目が飛び立った。

すかさず一番機であるジェフリー機に通信が入る

「こちらはAC-130の機長、マッキンリー大尉だ、まさかパトロール帰りに射的の景品になるとはな、ペイント弾なんかで俺達の機体を汚すなよ？」

「そ、そんなことはありませんよ大尉殿（やっべ、階級たけえめんどくせえ……）。

教習生のお祭りにお付き合いただき感謝しております！」

本当は今日限りの小さな出会いだった。

しかしその訓練が彼らを異世界に招待するための切符だったと言っことはまだ誰も知らないのである。

第一話「模擬戦 護衛のち幻想入り」(後書き)

感想とかはお気軽に。



第二話「模擬戦 護衛のち幻想入り・後」(前書き)

第一部の後編です。

## 第二話「模擬戦 護衛のち幻想入り・後」

アメリカ、フロリダ近海を飛ぶ二機のF-14は  
予定より三分早くAC-130Hと合流していた。

AC-130の右後方にジェフリー機である「ルーキー1」  
左後方にジャック機である「ルーキー2」が飛行していた。

「こちらクリスティー艦橋、聞こえるかルーキー1 ルーキー2。  
聞こえていたら返答せよ、オーバー。」

両機の無線に通信が入る。用件を聞くため返答の準備をする

「こちらルーキー1、聞こえています」「ルーキー2、音声明瞭」

「今の内は明瞭なのだ、良かった。今回の演習領域は

丁度バミューダトライアングルの一端で行う予定だ。

少々レーダー及び通信機器に不具合が発生する可能性があるが  
昔のように飛行機が消えたりなんかはしないから安心しろ。

通信機器が使えない状況もまた良い訓練になるからな、  
もしも異常があればすぐに帰って来い。オーバー・・・」

「こちらルーキー2、了解しました。異常があればすぐにでも  
飛んで帰りますよ、まあ今は飛んでるんですけどね。」

艦橋には一般回線で無線が流れており、通信士がどっと沸いてい  
た。

三機はバミューダトライアングルの境界を越え、演習空域に到達した。

### バミューダトライアングル

それは「魔の大三角」と呼ばれ、そこを通る飛行機や船舶が相次いで行方不明になるという地帯だ。

現在ではその原因として磁場による計器の破損、自然的なジャミング波が原因として見られている。

対処法としては迷わず元来た空域を目指せば帰れると言われている。

「スペクターよりルーキー1、2 これより左側面武装に模擬弾の装填を開始する、間違っても俺たちの左側には出るなよ？

君たちは我機の右側面、上下方を守って欲しい、オーバー」

「こちらルーキー2、これより左後方の護衛より上方の護衛に移る。貴機の上方より20m上で待機する、オーバー」

ジェフリーのルーキー1は引き続き右後方を守る。

いつ教官機が来ても良い様に辺りを見回す、しかし教官のそれと言える影すら見当たらない。

不振に思ったジェフリーはクリステイに通信を入れる。

「ルーキー1よりクリステイへ、ダディ1（教官機）の姿がありません。」

そちらより位置情報を送信されたし。オーバー」

「こ……ら……ク……ステイ……位置……報……信……  
認め……ら……て……いない……しかし……こちらから  
も……掴めな……」

ノイズが激しく全て聞こえない、空域の影響か又は雲かなにかだ  
う。

ジェフリーはもう一度無線のスイッチを入れる。

「こちらルーキー1 音声不明瞭！ もう一度位置情報を……あれ？  
」

ジェフリーの広域無線機は電源が入っていない、バッテリーが  
上がったのかと思ったがそうではない。バッテリーはさっき見た地点  
で

電池の数は三だった。何故だ？

とりあえずジャックに直通回線で通信を入れる。

「ジャック、そちらの広域無線機は使えるか？ 俺のはだめに  
なっちまった。」

「奇遇だなジェフリー、俺の広域無線もおじゃんになっちまった。  
こちらルーキー2よりスペクターへ、両機共に無線が使えない状況  
な  
のでそちらから教官機の……な、なんじゃこりゃあ！！」

三機の上方に巨大な裂け目が生まれていた。そしてスペクターは  
既に下降を開始していた。

「ルーキー1、2！ まずいぞ！ 上の雲は多分電子雲だ、すぐに逃げる！」大尉が叫ぶ、かなりパニックだと聞いて取れる。

そう言いながらスペクターは裂け目に下から持ち上げられるように

優しくだが垂直に上昇していった。そして裂け目の中へ消えた。

「おいジャック！ お前も早く下降しろ 急げ！」

ジャックのF-14は裂け目に真っ向から対抗するように後ろを向けて

最後の抵抗を見せていた。

「ジェフリー！ もう駄目かもわからん！ ちょっと天国に散歩行って来るよ、ハハハ！」

ジャックのF-14はその場でインメルマントーンするが如く向きを

正反対に変えそのまま裂け目に消えた。

そしてジェフリーは見た。裂け目に入っても二機が見える、そして空中分解も起こしていないのだ。

「変だな……電子雲だとしても……ん？……うわっ！」

彼がいきなり大声を上げたのも無理はない。

ジェフリーのF-14は裂け目に向けて横から引っ張られていたのだ。

必死にエンジンを吹かし抜け出そうもするも引っ張られるGと機体の推進力によるGが彼を襲い、彼は気絶してしまった。

彼は意識を取り戻す前に少し夢を見ていた、それも自分たちが助かる夢だった。しかし助かった矢先、羽を生やした人間達に囲まれあるうことが自分達が落とされると言う結末つきだった。

緑の山に自分の機体が突っ込み、体中を炎が包む所まで夢を見てしまった。

そこまで夢を見たジェフリーは目を覚ました。辺りを見ると周囲は真っ暗だが前方に大きな影と小さな影が併走していた小さいほうの影からは排気炎が見える、自分の目が正しければその機影はF-14とAC-130で間違いは無い筈。

しかし彼は自分の右側に新しい影を見つけた。かなり大きい。彼の目が暗闇に慣れた途端、その影の主が分かった。

「B-25ミツチエル!? 第二次の飛行機が何で!!!」

彼が見た飛行機はB-25ミツチエル、第二次世界大戦中にアメリカの空軍が一九四一年に使用を開始した中型双発爆撃機だ。乗員六名 全長十五メートルを超え 翼面積五十二平方メートル。彼がここまで知っているのは大戦中、彼の祖父がB-25の機長であり、ラバウルで撃墜されているからだ。

太平洋戦争では日本を初めて爆撃した「ドーリトル隊」の使用機体でもある。退役までに一万機が生産された。見た事があるのは博物館ぐらいであるが

いまジェフリーの目の前で飛んでいる。

彼は尾翼の識別番号を見た、見える限りでは陸軍所属の機体であるのが分かった。

大戦中の飛行機が失踪するのはこの海域では何度も聞いたことがある。  
しかしまだ飛んでいるとは……

B - 25の機長と目が合う、あちらはこちらの機体を見てかなり仰天していたが、米空軍のマークを見るや笑顔で手を振ってきた。

そこに前方を飛ぶスペクターより通信が入る。

「スペクターよりルーキー両機へ、前方の光が見えるか？ もしかしたら出られるかも知れない。判断を任せる、オーバー」

「こちらルーキー2、その判断は正しい。一気に突っ込みましょう、オーバー」

「こちらルーキー1、賛成……」

三機は前方の光に向かい全速力で飛行する。  
それを追いながらB - 25も光に向かう。

四機が出た所は陸地が広がっていた、眼下は森があり、そして山が所々にあり右手には巨大な山があった。

「なんてクレイジーな……俺達は海上にいたんだぞ……？」  
スペクターの射撃手が呟く。

「ここは幻想郷。異世界でもなく異次元でもない在り来りの東国の  
辺境」

幻想郷の外れに位置する妖怪の山、  
九天の滝の裏側。

ここでは山への侵入者を監視する為、木の葉天狗（白狼天狗）  
が多く詰めていた。いつもは薪を売ったりしながら  
天狗族の金策をしている等かなりの下っ端である。

その中でも山の哨戒を務める白狼天狗「犬走 椀」はこれと言っ  
た  
仕事も無く、河童や同僚と大将棋をして暇を潰していた。

「はあくあ、何か丁度いい侵入者でも現れたりしないもんかなあく。  
今日で何回目かなあ、私が詰まれるの」

「そりゃあ椀ちゃんが弱いからだよあ、でもなんかさつきから  
あたしの耳がゴウンゴウン五月蠅いんだけど……」

「それって滝の音なんじゃない？ 私は慣れてるけどアンタ文さん  
の  
詰め所からここに回されてきてはっかりだからだよ。」

そんな時一人の天狗が叫ぶ

「侵入者！！ とびつきりでっかい奴が四つよ！！ この詰め所が  
手柄を

取らなきゃ！！！！」



椛にとっては絶好の機会だ。ここで手柄を挙げれば警備役から金策役に昇格、あの射命丸さんと肩を並べる事ができる。

「いよっし！ 行くわよ！！！」自分の武器である山太刀、盾を持ち、紅い頭巾（多角形の帽子）を被り勢い良く滝を飛び出した。

までは良いがその侵入者はとてつもなく大きな鳥だった……

「え……これを追い返せて……？」椛は直感で無理だと分かった。

しかしここで下がる訳にはいかない、話せばわかる鳥かも知れない。

白狼天狗達は近くを飛ぶ小鳥より親鳥に近づいた。

「そのの鳥よ、速やかにここから立ち去れ！ 我々は妖怪の山警備白狼天狗集である！」

### 第三話「フライング・ヒューマノイド」

妖怪の山に出現した巨大な鉄の怪鳥は

外界の文化を知らない木の葉天狗達を驚愕させていた。

それと同時にその怪鳥の中の人間達も

おとぎ話でしか聞いたことのない人間のような者に  
心底驚いていた。

「機長！ 如何致します!？」

「う、うるたえるな！ た、たかが人間が空を飛んでるような  
ものだろうが！ それにルーキー1、2は既にこの空域から  
逃がしたんだろうな！」

「はい。ここより北西五キロ地点に光点二つ、確認しました。」

「ち、畜生。逃げやがってえ。」

この機長は何を言っているのか副機長のパメル少尉には  
理解ができなかった。

天狗達はスペクター後部でも確認できた。

「ああ？ なんだこいつら、NINJAか何かかあ？」  
スペクターに搭載されている二門の二十ミリバルカン砲射手であ  
る

ミゲル伍長と四十ミリ機関砲と百五ミリ榴弾砲射手のハロルド  
上等兵が備え付けのガンカメラで天狗たちを見つめる。

どうやら攻撃の意思は無いらしい。

しかしB - 25に関しては天狗に向かって機銃を向け、いつでも撃てる準備だけはしていた。

その頃、機外の天狗達は爆音を出しながら飛び続ける鳥と併走していた。

小鳥の方は速度が速く逃げられてしまった（既に空域から脱している）

が親と見られる二機は動きが鈍く追いつくには容易であった。

「椀いゝ鳥の中から声がするよおゝ怖いよおゝ」

耳の良い天狗が椀に話しかける。

「中に人がいるみたいね。人間が動かしてるみたい 風車が二つの方は黒い筒みたいのを向けてきてるわね。」

「それって鳥じゃないわ。「ひこうき」って言う外の世界の人間が空を飛ぶのに使う道具のことよ。」

椀の隣には黒髪の鴉天狗「射命丸 文」が飛んでいた。

「全く、大天狗様に滝の自警隊から緊急伝達があったから来てみたものの、こんなんじゃ特大スクープにもならないわ。里の人間でも知らない人がいそうだけどね。でもまあ本物のひこうき見たのは初めてだわ、後で取材に行こうつと。そうだ、椀もついて来てね。」

「ええっ！ 私もですかあ!？」

彼女らが空域からの離脱ルートを示し

妖怪の山の麓にある森の開けた平地に二機は着陸した。

スペクターの乗員（全七名）は外に出るといきなり

二人の女性が怒った顔でこちらを見ていた、そして寄って来た。

「ちよつと！あなた達が降りた所、畑なんですけど。」

「折角作付けした芋が……豊穰の神様に対してなんて事を……！」

一方、ジャックとジェフリーは既に山を抜け出しどこまで続くか分からない森の上を飛行していた。

二機のF-14の上を飛んでいる黒い塊は二機の轟音に気づくそして黒い塊は消滅し、中から赤いリボンをつけた少女がいた。

「わはー、あの中の人間って食べれる人間？」

第三話「フライング・ヒューマンノイド」 (後書き)

感想とかはご自由にどうぞ

#### 第四話「宵闇の妖怪」（前書き）

妖怪の山の麓に着陸したスペクターとB - 25。

未だに着陸地点を見つけれられない二機のF - 14。

そして彼らが見失った教官のF - 16。

それぞれはどの道を歩むのか……

土着の道か 戦いの道か。

## 第四話「宵闇の妖怪」

「おいジェフリー、十一時の方向に開けた地帯があるな。一時の方向にはかなり遠いが建築物が見える。」

「村の近くに着陸しても悪いな、その開けた土地に F - 14 を降ろすぞ。」

その開けた土地は二機の F - 14 を着陸させるには十分すぎるスペースがあり、十九メートルもある巨体な戦闘機を隠すにはもってこいの茂みさえあった。

しかし、彼らは自分達の上空にある黒い球状の物体を知らなかった。本来 F - 14 は二人乗りで前席が操縦、戦闘を受け持ち、

後席がレーダー官及び見張りをするように出来ている。

だがこの F - 14 は練習用に後部座席をオミット（少しいじれば搭乗

可能）されており、一人乗りとなっている。勿論、レーダー役がない

今、索敵は目視が主となってしまう。

4 それと広域無線の故障が仇になり、黒い球体がジャックの F - 1

「ルーキー2」の上方ぎりぎりに近づくまでジェフリーはその存在に気づかなかった。しかしジャックは未だに気づいていないようだ。

「ジャック！ まだ着陸はするな！！ 上だ！ 上！」

「えー？ 何だって！ 上？ おわあ！！！」

黒い球体に気づいたルーキー2は既に着陸態勢に入っており。あろう事かランディングギア（脚）まで出していた。

「そのままじゃ頭から突っ込むぞ！ 機首を上げる！！」

ジェフリーの呼びかけに応じ、ジャックの機体は地上に脚を着けながら徐々に機首を上げていく、何とも危険なタッチ・アンド・ゴーだ。しかし黒い球体もそれを追うように上から付いて離れない。

「ジェフリー！ なんとかしてくれ！！ 俺からじゃどうにも出来無い！ 模擬弾でいいから俺の機体上面を撃ってくれ！！」

要望に答える為、ジェフリーのルーキー1はルーキー2に近づく、

丁度機体の後方に取り付き、照準を定める。

模擬弾（ペイント弾）としても殺傷力は高い、エンジンにでも当たれば大爆発を起こす、それを危惧したジェフリーは

球体に照準を合わさず、気持ち上方を狙い、操縦桿に付いてるレバーを

「AAM」から「GUN」に換える。そしてトリガーを引く。

M61A1二十ミリガトリング砲から閃光を帯びた弾丸が射出される、

それは見事に黒い球体に命中する。しかし黒い球体には色の一つも付かない、色が付いているのはその周り、



ルーキー2の水平尾翼、垂直尾翼辺りのみだった。

「コイツ、攻撃が効かないだと!?!」

「どういうことだ! ジェフリー!! それって無いだろ!!」

「詳しくは分からん、とりあえずそいつを振り払え!」

ルーキー2は左にロール 丁度機体上面が地上と平行となるように  
飛行する(背面飛行)。未だに上面がそのままであると思ひ込んで  
いる  
らしい球体は地表側に廻る。

「俺の頭の上に乗るからだ! 覚悟しやがれ!!」

ルーキー2はそのまま地上ギリギリまで背面飛行を続ける。  
球体も地面にくっつきそうなくらいに飛行する。

その時、ルーキー2は煽るように機首を上げる、勿論  
黒い球体は圧迫されるように地面に接触する、そして  
物凄い砂煙をあげ速度が落ちていく。

ルーキー2は機首を下げ、今度は右にロールし体制を戻す。

「どうだ! 教習生をなめるなよお!!」

彼らが黒い球体を振り払った時には陽が沈み、月が出ていた。  
これからは夜間飛行となるが二人は初めての撃墜戦果に興奮してい  
た。

しかし、これが黒い球体の中の者を完全に怒らせてしまったのは  
まだ知らなかった……

## 第五話「東のポテトと漫画狂」(前書き)

時を少し遡り、妖怪の山の麓に二機的大型機が着陸した所から開始します(大尉ルート)

## 第五話「東のポテトと漫画狂」

彼には彼女達が何て言っているのかは分からなかった。何故なら話す言語が根本から違ったからである。

いくら彼女達が「ここは畑だ」と言っても通じない、この時ばかりは

大尉自身もハイスクールで外国語を勉強していればと思った。

言葉が通じないのは彼女達にも深刻だった。早くこの巨大な飛ぶための道具をどかさないと折角作付けた芋が台無しになってしまう。

何とかしてでもどかさように示さない。

「いいから 早くどかしなさい 次の里の収穫祭で配るのに必要なの！」

「穰子、この人達の目を見なさい、髪も。 今まで言葉が通じた外来人と訳が違う。」

それは穰子の姉、静葉の言うとおりだった。 目の前の外来人は髪こそ真っ黒だが

瞳の色は碧く、肌も白い。 そして何より身長が高かった。

彼の後ろの外来人は髪が金色だったり、禿げていたりした。

「それもそうだわ、今までの外来人とは何かが違う。」

二人が何やら喋っているのを見てマツキンリー大尉は気づいた

(これは、日本語か!?)

そう感じた大尉はすぐに機内に戻り、着陸してから延々と無線を  
弄り続ける無線士の

レーガン一等兵をコックピットから引きずり出す。

「な、何なんです大尉！」 「いいから！お前大学で日本語学専攻  
だったろー！」

「え、ええ まあ………」 「ちょっと相手をしてもらいた  
い奴らがいる。」

そう言うと彼はレーガンをタラップから押し出し、地面に立たせ  
る。随分座っていたのか

足がおぼつかなさそうだ。彼女達を見るやレーガンは話を始めた。

「そ、それで何のごよけんでしょか？」

「何よ、言葉が話せるじゃない。最初っからそうしてくれれば  
いいのよー！」

「あ、いや……言葉はなせる、自分だけ……そう、自分だけ。  
」

「まあいいわ。 あんた、この人にコイツをどかしてもらおうよう  
に言ってくれない？」

彼は彼女からここをどかないと芋が作れない、それは収穫祭に迷  
惑する、第一こんなところに  
不釣合いだ。 等々全うな理由を聞かされた。

「わかりますいた」 始めて日本旅行に来た外国人並の片言の日

本語である。

そして彼はスペクターのタラップへ戻り。

大尉に「ここは畑だ、飛行機を移動しろ、さもなくば芋が云々・  
」と伝えた。

「なるほど、そいつあ悪いことをしてるな。あのB・25にも  
伝えろ、次に良好な地点を捜し次第。

ここを離れる。」レーガンは向こうに着陸しているB・25に走  
っていった。

「しかし、少尉殿。ここは一体どこなんです？」

スキットル（水筒）に入れたウイスキーをちびちび飲みながら射  
手のハロルド上等兵が  
質問する。

「それは俺にもわからん。おいミゲル伍長、お前はどっ思う？」

「まあ・・・ハロルドのウイスキーをくれたら教えてやってもい  
いが？」

ハロルドはこれ程度で教えてくれるならとミゲル伍長にスキット  
ルを渡す。

「つまりな？」伍長がスキットルの蓋を開けながら話を続ける。

「俺達はマーベルコミックの世界に入っちゃったんだよ。」

伍長はスキットルに入っている満タンのウイスキーを半分ぐらい  
まで飲み干し

上等兵に渡す。その軽さと発言にハロルドは面食らっていた。そして少尉は

(コイツ、頭が狂ってやがる)と思っていた。

「さっきのNINJAを見たろ?? あんなのNASAの全技術を持ってしても無理だ。」

「しかし・・・あれはNINJAじゃないと思いますが・・・」

「そこだよ！ これまでとは全く違うNINJAだよ!! 恐らく新刊だ!!」

「(駄目だコイツ・・・) まあ・・・伍長、少し落ち着いたらどうだ?」

彼らが他愛も無い空論を交わしている目の前に二人の天狗が現れる。

(彼らの言うNINJA) 射命丸文と犬走椀だ。

「こんにちは〜! 清く正しい射命丸です!」 「い、犬走・・・椀です。」

音も無く現れた二人に三人は言葉を失っていた。その静寂を破るように

ミゲルが口を開く。

「NI・・・NINJA・・・?」

「へ、へえ?(この声の抑揚、もしかして英語??)」

「こんにちは〜！ 清く正しい射命丸です！ いきなりですが文。新聞の取材を・・・（英語）」

彼女が全てを言い切らないうちに誰かの腕が自分の首にまとわりつくのを感じた。

彼女に腕を回しているのは酒に弱いくせにウイスキーをがぶ飲みしたミゲルだ。

「こいつ・・・英語を話せるNINJAだ！！！」

「え！？・・・文さん??」

椀が顔を真つ赤にして文を見ている。

「か・・・勘違いするな椀！！」 文も顔が真つ赤になっている。

そのままミゲルに引きずられるように文は大尉の所に持ってかれる。

「大尉殿！ この人は英語を話せませ！！！」

大尉はミゲルのとんでもない行動に驚いていたが彼が引きずっている

女性が先ほどの誘導指示をしてくれた方だとわかると彼を引き離し、話し始めた。

「これは私の部下がとんでもない事をしてしまいました・・・  
・申し訳ない。」

「いえいえ、私も不注意の結果ですし・・・」

不注意なのか・・・と思ったが彼は話を続ける。

「できればお願いしたいのですが・・・この場所から移動してこの場所と同じぐらいの

広場ってあったりしますか？ それとそこまでの護衛も頼みたい、

私達の護衛は

どこかに消えてしまつてね。 大丈夫ですかな??？」



第六話「Big Bard Take off」(前書き)

年月日不明 時刻一五時三〇分頃。

妖怪の山麓 制手農業地帯。

## 第六話「Big Bard Take off」

「あやや。この付近でまたあの飛行機を降ろせる場所なんてありましたっけなあ……」

射命丸はちょうどサラリーマンが考え事をする姿勢

(腕組みをして上側になった方の手の親指で顎を支える)を取り、思考に入る。

「目の前にある大型の飛行機は素人の目から見てもかなりの着陸距離を要する事がわかる。

この農地の端から真ん中まで走ったのだから農地の半分以上は距離があるだろう。博麗神社の参道は？ 駄目だ、あの霊夢が黙っている筈じゃない、同じ理由で風見の花畑も駄目か。まずあそこはここから遠すぎる。白玉楼まで飛んでもらうのも無理だな、だとすれば……」

「ちょっと待つてください、もうすぐで答えが出ます。」  
文が口を開いた。考え始めて口を開くまで三秒、大尉は何が起きているのか分からなかった。

「あ、いや……そこまで考えなくてもいいのだが……」

大尉はスペクターの機体に手を当て

「コイツは百メートルでもあれば何とかなる」と言う。

次に右後方に着陸しているB-25を指差し。

「あつちの小さいのは五十メートルあれば大丈夫だから、な？」  
大尉が文の険しい表情を見て心配し、説明する。しかしそれは文の耳には届いていないのが分かると大尉は肩を落とした。

それから二分程後にミゲル伍長とパメル少尉を連れた椀が戻ってくる。

「文さん：やっぱり言葉が伝わりません：ここは一度天狗で解決せず」

八雲家に何とかさせたほうが：いいと思います。」

文は椀の言葉を聞き、閃いた。「そうだ、八雲家の右手にある広場なら降ろせるかもしれない!？」

「マツキンリーさん、ここから北西に十里ほど言ったところに「八雲家」と言うところではそれなりに大きい屋敷があります。その右手側に」

広場がありますのでそこに着陸させてください。そして八雲家に「また新しい外来人です、紫様に会わせて下さい」って玄関に出てきた狐みたいの人に言ってください。分かりましたね？」

「ちやつかり自己紹介を済ませている大尉は立て続けに質問する

「すまんが十里とは何メートルだ？ それはどうでも良いがまず北西に飛べばいいのだな？それは分かった、感謝する。」

「大尉いゝ伝えてきました」レーガンも戻ってきた。

全員揃ったのを確認して大尉は周囲にいるクルーに大声で伝える。

「いいか。これよりこの場を離れ北西に飛ぶぞ、とんだ先に広場があるらしい。各員離陸準備を始めろ！ そしてレーガン、もう一度B・25のクルーに伝えてこい！」そしてレーガンはまた走って行く。

レーガンを除く全員（十三名）が搭乗を完了したのを確認すると文は搭乗口のドアを開け、コクピットに聞こえるぐらいの大声で話し出す。

「では道案内に椀を付けますね」文が椀の首根っこを掴んでスペクターに放り込む。ドサツと言う音と同時に椀が機内の床に尻餅を突く。

「え！？文さん！ そんなの聞いてないですよー！！」

椀が当惑しているのを見て文が話す。

「元来白狼天狗は山で迷った人を助けたりするのが仕事でしょ？ いまがそのときじゃないの？」

「でもここ山より離れているじ」全てを言い切る前に搭乗口が閉められる。文は後で椀に体験談を聞いて新聞のネタにでもするのだろうか。

大尉が機体の電気系統を確認しエンジンを作動させ、スペクターの四つあるプロペラが回転を開始する。しかし未だに貨物用の搬入口は開けられている。それは後ろから走ってくるレーガンの為だった。

ハイスクールで陸上競技選手だったレーガンにとっては五十メートルなど取るに足りない距離だ。

プロペラが最大回転数に達する前には搬入ゲートをくぐっていたがその時にレーガンの後ろを透明な何かが付いていたのはまだ誰も知らなかった。

一方椀はと言うと離陸直前まで通路に立っていたので

乗員に座らせられシートベルトまで着けさせられた。

もう逃げ出さないと権は思っていた。

第七話「ウイング・リリアット」(前書き)

月日不明

午後十八時

魔法の森上空

## 第七話「ウイング・リアット」

「どうだジャック。塊は動いたか？」

「いや、まだだ。アレが地面にキスしちまってからは動きといった動きは何も無い。」

密林とも樹海とも取れるぐらい大きな森に開けている縦長な空き地、その上空には二機のF-14が右に円を描き、地面には黒い塊が墜落とも、形式上によればは着陸にも見える体勢を取って沈黙していた。

「もうすぐ完全に日が暮れる。すぐにもここに降りないと機体は持つても俺達が「もたない」ぞ？」

F-14の最大航続距離は三二二〇キロメートルであり。今回のフライトではまだ三〇〇キロも飛んでなく、しかも両機には丁寧にも増槽が取り付けられており燃料も当分尽きることは無い。なのでここで言う「もたない」は彼らの腹の虫である。

「全く、ジャックは臆病なんだかそうじゃないのだから検討がつかねえな。だからこそその飛行服に忍ばせたスニッカーズだろ？」

「わりいな、俺はあのピーナツクリームは口にあわねえんだ。」

「俺はそんな事を聞いたわけじゃないって……そんな事よりあの

塊を見てくれないか？ 俺の位置の角度じゃ見えないんだが。」

「見てやるから少し待ってる。」

そう言つとジャックのルーキー2は機体を左に傾け、地表の様子を見る。陽はすっかり消えてしまい、光といえば地平線に

僅かな紫色と藍色のグラデーションが広がっていたただけだったがそれよりも暗い黒色の塊は見る事が出来た。

「まだ動かない、気味が悪いな……」

「あれが有る限りここへの着陸は無理そうだな。 他を当たるか？」

「いや、ここ以外に同じような場所があるかも分からない。 もう少し見させてくれ。」

ジャックがそう言った時だった。 地表から六条のビームが放たれ、

それは低速ながらもルーキー2を狙っていたが既にジャック自身もそのビームには気づいていたらしく、行っていた左ロールにピッチアップを加えそれまでの針路から機体を九 度角に急激に移転させた

為弾道は大きくルーキー2の後上方に反れた。

攻撃目的を失ったビームは次第に細くなり、消滅した。

「ジェフリー！！な、何だよあれ！ 現代兵器であそこまで危険な兵器があつたか！？」



「とりあえず落ち着け！…で…もしかして黒い塊は動いてないよな？」

ジャックは左ロールをまた九 度増やし、高空での背面飛行に入る。

操縦桿で体勢を保ちながら彼は機体の真上を覗く、頭上には空き地そして森が広がる…がしかし肝心の塊の姿は無かった。

「無い、無いぞ！ 塊、黒い塊が！！」

実際はここでジェフリーは驚くべきだがその思考が吹っ飛んでいるため返答は冷静そのものだった

「じゃあさっきのレーザーはあの塊が撃ってたって事が。探せ！このままじゃ撃たれつぱなしだ！」

ジャックは右ロール一八〇度をかけ機体を地面と平行に、頭上には

空が広がるようにした。（背面飛行すると地底人みたいな気分になるんだよなあ…）こっちもこっちで戦闘的思考が遅れていた。

先に塊を見つけたのはジェフリーだった。しかしそれは塊ではなく 一人の少女だった。 敢えて特異な点を挙げるならばそれはその少女自身が塊の正体と言う点でなく、見つけた地点が彼の機体の左翼にしがみついていたと言う点だろう。

「い、この野郎！（少なくとも野郎と呼ぶのはおかしい）離れる！」

彼は主翼の後退角を二〇度から七〇度まで後退させる、持ち所が斜めになった翼から小さな手が離れ、少女は空中に浮遊する体勢をとった。

彼女の手から黄色や緑の光を曳く銃弾にも見える物が飛んでくる。幸いそれには誘導能力が無いらしく回避にはそれほど気を使わないが如何せん射出量が多い、少しでも気を抜けば被弾は確実だろう。しかも相手は空中で静止することも可能なようであり、半ば高性能なジャマー機雷のようにも見えた。無論、彼らはジャマー機雷の撃墜方法も教習してはいるが実戦など初めてであり、まさか自分達が狙われた立場（教習時は二人とも他機が狙われている内に撃墜して合格したため、回避方法の訓練は完全に出来てはいない。）なんてのは初めてだった。

「さつきも空を飛ぶ人間を見たが、やっぱり目に慣れないな。人間を、しかも女を撃つとなると……お？」

ジェフリーは先ほど少女が掴んでいた左翼を見る。  
一見は何も起きていないが翼端が手形状にひしゃげている。

「なんて馬鹿力だ！ 俺の機体にハリウッドスターじみた行為しやがって！もう怒ったぞ！ジャック、もう正当防衛は有効なはずだ！」 ジェフリーは操縦桿の武装スイッチを「GUN」から「AAM」に切り替える。本来教習機にはミサイルは積まないが今回は

演習地区が演習地区だっただけに四発のAIM-9J  
「通称：サイドワインダー」を搭載している。全長三メートル、射程は

一八キロメートルを超える空対空ミサイルだ。

赤外線誘導な為に相手にロックオン出来るかは分からないが計器は

ロックオン可能の表示を出しており、一か八か試してみた。

ジャックのルーキー2に夢中になっており後方から近づいてくるルーキー1には気づいてないようだった。

「ジャック、そいつの注意を引いておけよ？ ようし、ルーキー1 トップ4!!」

ルーキー1の左翼最端のミサイルに点火を

促した、はずだった。ルーキー1の計器には「不発」の文字が浮かび上がる、恐らく翼端のひしゃげが電気系統に支障をきたしたのだろう。ルーキー1は少女の右手側を抜けるが、その際に

とても鈍い音（壁にボールを当てた音を重くした感じ）がしたが、彼はそれには気づかなかった、代わりにジャックがジェフリーのルーキー1が左翼を使い少女にリアットを喰らわせていたのを目撃していた。少女は気を失ったのか、きりもみしながら森へ急降下を始めだした。そして彼女は暗い森の中に消えていった。

「おい！ジャック！！ あいつあ何処だ！！何処にいる！！」

「やられたよ。お前が落とした……俺達って魔女狩りでもやっているのだろうか……」

「……そうか、んじゃあ空き地に機を降ろすぞ。」

二人はやつと空き地にF-14を降ろすことが出来た。

獣避けのために焚き火を焚き、手ごろな石と枝を使い枕を作り、言葉を交わしていた。

「とりあえず今日は寝て明日の朝に機体を隠そう。そして森を抜けて

北東の村に行くんだ、ここが何処か位かは言ってくれらるだろう。」

「まあ…アメリカじゃない事だけは確実だな。」

「そりゃそうだな、ハハハ…」

第八話「夜明けの救急バッグ」(前書き)

月日不明、午前五時

魔法の森内

## 第八話「夜明けの救急バッグ」

太陽が地平線から半分ほど顔を出したとき、  
彼らは時計のアラームも無しに眠りから覚めた。

長い間定時起床を強いられてきた賜物なのだろうか  
定かではないが彼らは後部座席のパラシュートと落ち葉を使い  
簡単な偽装網を作り、それをF-14に被せた。

ぱつと見では完璧な茂みだが、よく見るとその茂みには翼があり、  
車輪があり、風防が見えた。

「取り敢えず村まで行ってみるか。 ジャック、拳銃はどうする？」

「昨晚の女の子みたいなのがウジャウジャいたら困るな。 一応  
持って行くこうか。」

ジェフリーとジャックはF-14のコックピットに戻り、鞆の中  
からホルスターに入ったベレッタM92Fを取り出し、銃把からマ  
ガジンを

引き抜き、銃弾の数を確認する。 M92Fのマガジンに入る弾丸  
数は十五発、予め薬室に装填しておけば合計十六発の弾丸を撃ち出  
すことが

出来る。 ジャックは村人との交渉用にハーシーズの固形チョコレ  
ート

とその他食料品を服のポケットに入れたが、ジェフリーは食料と共  
に

ファーストエイド（簡易医療箱）を鞆に入れていた。

ジェフリーが鞆ごと持って降りてきたのを見てジャックは驚いた。

たかがそこまで歩くぐらいだろう、何故そこまで持って歩くんだ？

と思いを聞いたが、その答えもとんでもないものだった。

「あの少女を助けるだって！？ あいつ俺達を落とそうとしたんだぞ！？」

「昨日の敵は今日の友」って諺を知らないのか？ もしかしたらあの子自身が防衛の為にやったことじゃないかと思うんだ…」

「でもあのレーザーを出した女の子なんだぞ？何をしてくれるかわかんないって……」

ジャックが怖がっているのを尻目にジェフリーは既に森の中へ入っていた。それを追うようにジャックも中に消える。

森はとても暗く、寒かった。とてもアメリカンな雰囲気も無く、見たこともない生物が周辺を飛んでいた。

「駄目だ……足が動かない…腕も…」

森の少し開けた所にうつ伏せに倒れていた妖怪「ルーミア」は昨日の戦闘で首を痛めており、四肢が麻痺を起こしていた。

スペルカードを使用した決闘では首を痛める程度ではすまないが今回の戦闘は体自体に衝撃が直接来たため、今までの弾幕を受け止める

防御姿勢が通用せず、このような結果になった。

「うう…助けて…チルノちゃん…大ちゃん…」

今頃彼女を探しにチルノと大妖精が周辺を飛び回っているだろう。

彼女達に見つけてもらおうのが先か、天狗か何かに襲撃されてしまうのが先か、彼女には分からなかった。

チルノや大妖精の声が聞こえない点から前者より後者の場合の方が  
少なからず確立としては大きいだろうと彼女は思った。

「おい…本当に手当てするのかよ…」

「見つけなければしらないと思っていたが…見つけちゃったからなあ…」

昨夜墜落してからの時間は数えていないが最低でも六時間は経っている、もう死んでいるのではないかと  
ピクリとも動かない少女をジェフリーとジャックの二人は茂みの中から覗いていた。

その間の距離およそ八メートル、ジェフリーは拳銃をホルスタ  
ーに  
戻し、鞆を持ちながら少女に近づく。

ジャックは拳銃を左手に持ちながら彼女が骨折している場合の  
添え木を探し始めた。

「おお、これ良いんじゃないの？」

拾い上げたのは長さ八十センチ、幅十センチ程の木片だった。  
看板の破片だろうか？と思っていたが違った。

それは機関部が無くなっていた小銃のストックだった、  
（何処かの猟師が気まぐれに落としたんだろう？）と感じ、そのま  
ま

ジェフリーの元に行こうとしたが、その時彼の後ろから木の棒が



飛んできたがそれは彼の背中から大きく外れ、地面に音も無く落ちた。最終的に彼が気づかなかつたのはその木の棒の存在だけではない。

彼が拾った銃床の刻印に「謹製三八式歩兵銃」と書いてあった点。

その近くに散らばっていたポルト、照準、弾層や捻じ曲がった銃身、

そしてその奥の黄色い布に覆われた頭蓋骨ぐらいだった…

第九話「Lost my language」(前書き)

月日不明

推定午後十五時、

八雲家倉庫郡跡地

## 第九話「Lost my language」

F-14の二人がまだ空き地の上空を飛んでいる時、AC-130  
スペクター機長の

マッキンリー大尉以下十五名（椀含む）とB-25乗員の三名は既に  
「八雲家」なる屋敷の空き地に駐機していた。

「所々に建物の残骸が見えるな、何かの跡地だろうか？」大尉が呟く。

彼らの周囲にはほぼ壁しかない倉庫のような建造物がちらほらと建っていた。

入り口しか無い物、屋根が無い物、正面の壁が無くなっている物など様々だ。

「ここはこの世界に流れてきた現世の物品を保管しておく倉庫の敷地だったようです。」

レーガンが一足先に椀に聞いてきたようだ。

（ん？・・・さてよ？ この世界？ 現世？まあ今はそれより移動が先だな。）

「取り敢えず屋敷に上がらせてもらうぞ、パメルとハロルドとレーガンとウェイン、付いて来い。」

了解、の声と共に四人が立ち上がる。ウェイン一等兵はレーガンほどではないがある一定の日本語が話せることが移動中に分かった為、交渉用に連れて行くことになった。

跡地から屋敷までは三分と掛からなかった、しかも道も草を刈る

程度には整備されており

つい最近まで倉庫はあつたようだ。

屋敷は豪華絢爛に奢るでもなく、大尉が子供のときに見たテレビで見た古い日本家屋だった。

レーガンは日本に留学していたこともあり瓦葺きの門や「八雲」の表札に興奮していた。

しかしいざ屋敷に来客を知らせようとしても現代みたいにブザーなんてものはない。

それに引き戸を引いたら鍵が開いておりもつとどうしていいのかわからなくなってしまった。

「大尉殿、引き戸の隣にある鈴を鳴らせば中から誰か出てくると思いますか……」

一番後ろにいるレーガンが状況も見ずに大尉に進言する。

「参った……そんな鈴なんて無いんだよ、この場合日本だとしたらどうすればいいんだ？」

ウェイン一等兵。「

「ええと……それは普通にノックすれば良いのでは……？」後ろから二番めのウェインが言う。

「そんな事したら開けた瞬間に矢が飛んでくるぞ？」ハロルドが冗談を飛ばした時。

「うあ！ いつてえ！ いつてえ！」レーガンが右の太ももを押さえて倒れこむ。

レーガンの後ろには赤い服を着、白い帽子から猫に見える耳を出した少女が立っていた。

「ちよつと、どいてどいて。」倒れたレーガンを踏み越え拳動不審な三人の大人を避けながら

躊躇も無く引き戸を開け、靴を脱ぎ、土間に座った。

恐らくこの少女が一番拳動不審だったレーガンの太ももを蹴飛ば

したのでろつ。

「あなた達、がいらいじん？」少女が尋ねる。

「わたしたち、他の世界から来た、紫様に話を聞きたい」ウェインが流暢な日本語で答える。

その日本語はレーガン以上に上手で大尉を驚かせた。

「ふうん、紫様なら夕飯のために起きてくると思うからちよつと待ってて。」少女が奥に消える。

「藍様、外来人だよ外来人。紫様に会いたいつて。」

「わかったよわかった橙、いま火を止めるからその方達を客間にあげといてくれな。」

「うん、わかった」その声と共にまた橙と言う少女が玄関に出て上がれと言う。

四人は促されるまま玄関でブーツを脱ぎ、客間に案内された。客間は畳と卓袱台が置かれ、縁側の方角は障子が張られていた。ハロルドとパメルはあくらをかいたり寝転がる等自由奔放だったがレーガン、ウェイン、マッキンリーはうる覚えだが正座の姿勢を崩さなかった。

しばらくすると襖が開き、橙が言う「八雲 藍」が出てきた。身長は彼らと互角であり

金髪碧眼と外国人に近かったが、服装はかなり日本よりだった。

彼女は彼らを一目見るなり、話し始めた。

「あなた達か、新参の外来人と言うのは。最近じゃあなた達みたいなのがゴロゴロ来るなあ。」

藍は溜息混じりに話を続ける。

「それにしても丁寧にここまで挨拶に来るなんて何も知らない外来人にしては珍しい。

誰が此処に行けと言ったのだ？」

「あ、ああ・・・確か・・・「TENGU」って言っていましたよな・・・？」ウェインが質問に答える。

「天狗？ ああ、多分あの新聞記者か。 まあいい、今から紫様をお呼びするから待っていてくれ。」

藍が立ち上がりそして後ろを振り向く、襖を開け廊下に出た所で襖を閉める。

藍が紫と言う人を連れてくるその間に大尉は部屋中を見回した。

時計こそ読めない（十二支刻を使用した時計）が壁に掛けてある日めくりだけはアラビア文字

だったので読めることが出来た。

「三月十六日？これって今日じゃないか！？」大尉は自分の腕時計を見る。

時刻は午後十八時を回る頃だ（八雲家の玄関で一時間は悶着していた）、そして外は

そろそろ日が暮れる。 間違いない、時間軸に乱れはない。

そんな事を五人で話し合っていると障子の方から紫なる人物が顔を出した。

「ふう〜ん、あなた達が新参さんねえ。 この五人の中の一番偉い人は私について来て。 少しぐらい落ち着いた人じゃないと酷な現状に驚いちゃうからね。」

第十話「Ofukuro's taste」(前書き)

三月十八日

午後一七時

八雲家客間

## 第十話「Ofukuro's taste」

八雲家に着き、天狗等に言われたとおり紫に会いに来た

大尉以下一四名、その内の四人は大尉と共に客間に案内されていた。

「大尉殿、あの方が貴官に此方に来て欲しいと言っております。  
一対一で話すと言っているのです何か重大な事かと…」  
ウェインが大尉に通訳する。

大尉は無言で立ち上がり、紫の後ろを付いていった。

二人が消えた後、客間には四人が残った。

「通訳も無しにお話が出るか？」ハロルドが卓袱台に置いてあつた

茶を飲みながら残った三人に話しかける。

「あの人が英語を話せれば簡単な話だな」パメルが十二支時計をしかめつ面で見ながら答える。

「少尉殿、残念ながらあの方は英語を話せないかと。現にこの部屋

に来たときに使った言葉は日本語ですから。」レーガンも答えた

「自分もレーガン先任と同意見です」ウェインも続く。

「まあ…だつたら何か他の方法があると考えるか…」

パメルが縁側に目をやる、外は完全に暗くなっていた、塀の向こうからは光が漏れておりスペクターのクルーが野営の準備を始めているのが一目でわかった。



「んじゃあ、手短に話すわね」

紫は大尉を居間に案内し、座布団に座らていた。

「え？何か言わないの？」「お願いします」とかは？」

紫はこの無礼極まりない外来人をすぐにでもスキマに

落としてやろうと思ったがさつきまでこの外来人は自分の言葉を

他の人間を通して聞いていた事、外来してくる人間としては

珍しい人種である事に気づき、スキマ送りにだけはしないでおいた。

この人種の手がかりを探そうと彼女は大尉の胸章に目をやった

「なにか手掛りは…あつた…えくと US NAVY?? ああ、英語か、先に言ってよね」そう言うとなんか彼女は何処か遠くを見るように

人差し指で横一文字に空をゆっくり切る。

「これで大丈夫ね、少し幻想郷の言語と英語の境界を弄らせて貰ったわ。これなら元のまま話しても相手側には変換されて聞けると思っから。」

「あ、有難う御座います…あ、あれっ!? 何したんだ!? 日本語が話せるぞ!!」

大尉は自分が日本語を理解した事より英語を話す感覚で日本語が口から出てくる事に驚いていた。

「だからさつきそう言ったじゃない…。じゃあ、話すわよ?」

紫は居間の筆笥から一冊の古い本を取り出した。漢字の題名だったが

この方は識字の境界も弄ったようで、大尉には「外來人対応之手始」と

読めた。多分これは外来人への対応を綴った物なのだろう。

「ええ〜つと、あなた達は何時から此処に来たの？」紫が質問する。

「それは…多分今日の十二時には来ていたかと…」

「十二時？ ああ牛の正刻ね？ じゃあ…もう帰れないわよ??」

「はあ!!?!? どういうことだよ!どゆことどゆこと!!!」

大尉には今日の前にいるバブ…少女の口から放たれた言葉を鵜呑みにすることは出来なかった。

「だって此れに書いてあるもの、外来人はこつちの空気を完全に体内に取り込む一辰刻（二時間）以内に博麗大結界をこじ開けて

外の世界へ繋ぐ新しい即席結界を張らないといけないわけ。

要するに現在時刻はもう酉の正刻（十八時）よ、もう二辰刻も経ってるし、第一あの巫女がそんな面倒なことをしたくないでしょうから、無理ね。」

大尉には話の半分もさっぱりだったが、帰る事は不可能とだけは飲み込むことは出来た。

「では…我々にはどうしろと…？　かなり不便しそうなのですが…」

大尉は紫に尋ねる。

「普通に暮らしていれば不便なんてないわよ？　最近は電気もあるし

地下の発電所や採掘所から引かれてきた天然ガスや燃料の御蔭で「焔炉」って物も使えるようになって藍も料理がはかどるって

かなり喜んでいたわよ」

他にも彼女は倉庫の所蔵品に有った箱に燃料を入れたら温風が出てきた事や最近自分達と同じような飛行機が良く飛んでいる事等を延々と話していた。

「…とまあこんな所ね。　もうかれこれ半刻（一時間）は過ぎちゃったわ、それにしても夕飯はまだ出来ないのかしら…？」

彼女がそう言いながら立ち上がり、台所に向かう。大尉もそれに着いて行った。

台所に着いた時、そこには藍と意外にもレーガンが立っていた。

「留学中に習った日本の象徴的な物があるじゃないですか！　鍋に入れちゃいますよ！入れちゃいますよ！！」

レーガンが左手に木ヘラを持ち、右手にカレーの固形ルウを持ちながら怒鳴る。

「いいから大声出すな！！手伝えと言ったら折角の肉じゃがにそれを

見つけるなり炒めてる最中の鍋に水なんか張っちゃって！！！」

左手にお玉を持ち、右手に醤油の土瓶を持った藍も怒鳴る

「うるせえ！肉じゃがは確かに美味しいがコレも美味しいんだよ！」

「おい…一等兵、この米は後何分見れば良いのだ？」

パメルが床に置かれた電気炊飯器の前で炊き上がりを体育座りで見張っている。

「ああ、それはそこにあるタイマーの数字を見てください。それがゼロになったら炊き上がりです。」

ウエインが床板の下にある味噌の状態を調べている。

「おいウエイン、カレーにミソスープは無いと思う、いや…止めてくれ、ここは漬物でも探そう」ハロルドが床下の収納を探し出す。

「漬物もいりませんよ上等兵殿、カレーには何も要らないのです。」

レーガンがそう言いながらルウを溶かした鍋をかき回す。

「まあ…言われてみれば、良い香りだな…」この誰もが懐かしい気分になれる匂いに藍も納得している。

「ほら、あなた達の部下は随分と溶け込んでいるじゃない。」

「……まあ、こいつ等は元々こんなだったし。適応力は凄い物だな。」

第十話「Ofukuro's taste」(後書き)

一応ここでストックが尽きていますので  
更新は週並みになると思います。

携帯だと読み辛い、改行を改善したほうが良い  
等のご意見ご感想があれば  
遠慮なくお送り下さい。  
出来るだけ全レスします。

第十一話「Move」(前書き)

三月十八日

午後十九時

八雲家玄関

## 第十一話「Move」

「じゃあ彼等に事情を伝えてきますよ。」

「頼んだぞ、一等兵」

台所で煮込んでいるカレーの火加減を監に任せたレーガンは土間でブーツを履き、野営をしているスペクターのクルーに現状を伝えようとしていた。

彼等は既に大尉から戻れない事を聞いていたがその最中に紫が「戻れる可能性」を話したので、最終的な結論をクルーに話に行こうとしているのだ。

「やっぱり俺が行こうか？一等？」マツキンリーはレーガンを心配する。

「いえ、機長殿がこんな寒い外にでる必要は在りませんよ。事情と一緒に」

機内からコートを持ってくるので夕飯の後に戻りましょう。」

「何と、気が利いてるな、伝えたら直ぐに戻って来い。」大尉はコマで人が出来ている新米に驚きだった。もしも階級制度が人徳勘定だったら彼は間違いない。

尉官クラスにまで造作も無く昇格するだろう。

「了解しました」レーガンが引き戸を開け外に出ようとした時、土間に橙が降りてきた

「レーガンさん、これ使って！ 夜道は暗いよ！！」そういつて渡してきたのは古臭い懐中電灯だった。機内にペンライトを置いてきた彼にとってはかなり役に立つだろう。

「ありがとうな、お嬢ちゃん。」左手で橙の頭に生える栗色の髪を撫でながら

右手で電球が点くか確認する、LED程でも無いが温かみのある光が投光される。

「では大尉、行って来ます。」引き戸を開け、レーガンが外に飛び出していく。

彼が門を出た所で懐中電灯を点けた時まで大尉は見ていた。

「さあ、居間に戻ってお皿の準備をしようか橙ちゃん。あのお兄ちゃんか帰って来たら

温かいカレーを食わしてやろうじゃないか。」

大尉は橙を居間に戻るように促してから彼女の背中を押してやった。

## 八雲家倉庫郡跡地

「あゝもうクソ！ なんでこんな不味いレーションを食べないかんのよー！」

一人のクルーが悪態を漏らす。

「我慢しろよそれくらい。ほら見てみる、あそこのお方は大層美味しそうに



食べなさるってもんだ」そのクルーの隣で誰かが話す。

「あとはココに水を入れてですね……ほら、葡萄汁の完成です……って、聞いてます?」

ミゲル伍長が自分の分の戦闘糧食を作っていたが、彼が食べる訳ではない。

これはヤコブ中尉の命令で「お客様」である椋にお持て成ししていたのだった。

「こんな美味しいの今まで食べた事がありませんよ。あ、これ飲み物ですか?

貰っておきます、ほんと感謝しますよぉ」天狗族の中でかなりの下っ端でも

食いつぱぐれはしていなかったが配給される食事も冷や飯等の最低限な物が続いており

ましてや小魚すら食えない日があったりもしていた。

そんな彼女にとってこの暖くて美味しく、何よりいつから食べていないのか

分からない「肉」を食べる事が出来た。

「連いてって正解ですね! あぁ美味しい!」アルミのコップに入った葡萄ジュースを

がぶ飲みしながらミゲルに感謝の言葉を掛ける。

「感謝してくれればそれで結構なのですが……私達いつから言葉が通じているのです?」

「さあ、分からないですねえ……」椋がプラスチック製のスプーンを置いて考える。

「あ、探しましたよ伍長殿、早速ですがヤコブ中尉は何処にいますかねえ……？」

ミゲルに声をかけたのは会談に随伴していたレーガンであり彼はヤコブ中尉を探していた。

「ああ、中尉ならあそこの輪の中にいると思うぜ？　んで、現状はどうだった？」

「は、現状としては現実に帰れる確率は八十パーセントだそうです。こつちの世界に干渉している率がまだ高くないので明日の内には帰還できそうだと聞きました。

では自分は中尉の所へ行つてきますので。」　レーガンはスペクタ―の近くで暖を取っている十人ほどの中に走って行った。

第十二話「明治止まりの機械技師・前」(前書き)

三月十八日

午後十九時十分

八雲家倉庫郡跡地

## 第十二話「明治止まりの機械技師・前」

スペクターの元に戻ったレーガンは臨時でこの機体の責任を負っている

ヤコブ中尉（八〇一空挺師団第八小隊長。乗員の半分はこの小隊の所属であり

任地から本国基地に帰る途中にこの出来事が起きた）に会談の結果を伝えに来ていた。

「中尉殿、会談のまとめを紙に書いてきましたので目を通して頂ければと。

それに自分は機長のコートを取ってからまたあの屋敷に戻りますので、

詳しい事は大尉が自ら話すと思います。では自分はこれで」

レーガンは夕飯を食べている中尉の膝にノートの切れ端を置き、スペクターの

タラップを上がり、機内に入っていった。

「……んで？ どれどれ？」中尉は一通り主食のステーキを胃に流し込み、同時に

粉末コーヒーを飲んでから深呼吸をし、切れ端を読む。

「ええ〜と？ 結界？ 干渉？？ はああ？？？」

彼含む小隊員七名は未だに犬耳を生やした女性しか見ておらずこの世界が

何であるかの理解も出来ていなかった。

「どうしたんです？中尉殿？」小隊のメンバーが険しい顔をして紙

片を読む

彼を心配していた。

「あ、いや別に何でもねえさ。機長さんが戻ってくれば

分かりやすく話してくれるんだろうな。気長に待ってようぜ。」

中尉が紙片を隣の小隊付き曹長に回す。

「まあ…そうですが…自分自身は早く国に戻りたいですし…第一ここは

何処なんですかね…？」紙片を回された曹長が中尉に質問する。

「それも機長さんが今聞いている」中尉は再度コーヒーに口をつける。

そのまま顔を上に挙げ、空を見るように少しずつ飲み続ける、

少なくともコーヒーが無くなるまでこの体勢を取っていればある程度の部下の質問を無視できると思ったのだ。

現に中尉のこの体勢は後にコートを持って出てくる十分も続いたという。

「機長のコートは…あ、これかの？」レーガンはスペクターのコックピットで大尉のコートを捜していた。

しかし微妙に狭く、それに真つ暗な（機内ライト用の電力は野営用に廻されている）機内での物探しは容易ではなかった。

現に先ほど彼が見つけたコートも大尉の物ではなく自分のであった。

「全く、これじゃあ何のために名前の刺繍が有るのか分からなくなるよ……」

いつもの彼の癖でつい一人言が出てしまう、どうにもならない状況に

彼は溜息をついた時、ベルトの懐中電灯の存在を思い出す。

身近に持っていないがらすっかり忘れていた自分にまた溜息をつき、再度コートの搜索に戻った。

明かりさえ有れば機内が狭くとも物探しは格段に効率上がり、大尉のコートも

簡単に探し出す事が出来た。

「後は…俺のバッグでも持っていくかな。」レーガンは無線機の近くに帰り

自分のバッグを持ち上げた。

「あれ？ 軽い??」そのバッグは彼が機を降りたときより確実に軽くなっていた。

まさか泥棒でもいる筈が無いし第一、一等兵如きの私物をどうこうしようなぞ

思いもしない筈である。彼はバッグの中身を照らしてみた。

「……無い、ペプシのキュウリ味が無い!!」これは彼の異常な執着なのだろうか？

コーラフレーバーの一種である「アイスキューカンバー」味。これは数年前にペプシコーラ社がフレーバーの一種として発売した物である。彼は発売当初からこの飲料の虜にされており、現に他人からバレない様にこっそり機内に持ち込んでいた。

「参ったな…アレが無いと落ち着いて夜も寝れないって……」もしも誰かに飲まれてる

のなら相手が上官だろうがぶん殴りたい、そう心に決めた時である。

「……！？ ボトルが宙に浮いてる！！」

彼が無くした筈のペプシのキュウリ味に使われる特徴的なボトルが  
兵員室と火器部分の境界を行ったり来たりしていた。

第十二話「明治止まりの機械技師・前」(後書き)

いやはや、眠いです…

多分朝起きたら自分で読み返して

「なんじゃこりゃ!?!」って

なりますね W W W W W



第十三話「明治止まりの機械技師・後」(前書き)

三月十八日

午後十九時十五分

八雲家倉庫郡跡地

AC-130Hスペクター機内

### 第十三話「明治止まりの機械技師・後」

「おいこら！ 待てよ俺のペプシよお！！！！」

こここの所不可思議な事ばかりが続いていたので彼は浮遊するペットボトルに関しては驚かなかった。

「あ！、この！！ 逃げてんじゃねえぞ！」

彼がどう手を出そうとボトルは宙を舞い、まるでからかうようにフェイントも仕掛けてきた。

「（待てよ…？何でこのボトルは手で持つてる様に浮いてるんだ？しかも足音は二人分…まさか？）」

彼は人がボトルを手に持ってその手を前に突き出している状態を想定し、一発だけ脇腹あたりに蹴りを入れると手応えがあった。

蹴りを入れた空間は少し空気が歪んでおり、少しながら人型とも見て取れる陽炎にも見えた。

その陽炎は蹴りの衝撃で近くにあつた弾薬箱にぶつかり、動かなくなつた。

同時にその陽炎は電気を帯び始め、表皮が剥がれ落ちるようになり中から一人の少女が現れた。彼女はポケットだらけの服を着、帽子、リュックサックといった風貌であり尚且つ髪色も蒼い。

「……痛ててて、ばれちゃつたかあ…光学迷彩スーツも壊れちゃつたし

珍しい緑色の水も取られちゃつたしなあ……」

この期に及んでも身の危険より潜入で得られた収穫の方を心配している時点でかなりの傲慢さである

「光学迷彩って……えええ!!!」レーガンは目の前の少女が言っていることに理解出来なかった。

光学迷彩が現代科学で完全な開発も出来ていないのにこの世界では年端もいかない少女が身に着けている物なのかと。

「なんだよ人間、このスーツがそんなに珍しいのか??? まあそんな目しても

絶対にやらないけどな。」少女はいやしそうな目でレーガンを見る。そして少女はいきなり自己紹介を始めた。

「あたしは谷河童の河城にとり っていうんだ。 河童族の中では機械工学専門で使い方がわかる外の世界の漂着物を量産したり改造して性能の向上とかをやっているんだ。 お前のその服装は外の世界の「ツナギ」ってのに似てるし、お前も機械エンジニア技師だろ?」

この河童と言う奴は何でもずけずけ物を言うようで、彼もそれに釣られて

「俺はアラバマ生まれのアラバマ育ちのレーガン・グレインだ、アメリカ空軍の一等兵だ。 まあこの機の中では無線士をやらしてもらっている

身で、まだ何回か訓練を済ませば無線のライセンスを貰えるんだ。」

「……無線? なんだそれ??」にとりは彼の出生や所属には興味は無く

彼の言う「無線」に興味を持った。

「まあ機械の一種でな、構造までは知らんが簡単に言えば周波数と周波数を合わせて

遠くの人と話せる物だよ。「レーガンは講習の教官が言っていたとおりにおりに  
そのままにとりに説明する。

「それは興味深い、少し見せてみるよ。」にとりがペプシのボトルを開け、

中身を飲みながらレーガンに案内を求める。

レーガンは既にペプシを飲まれた事については諦め、にとりをコックピットに

案内する。

「その椅子には座るなよ？ 機長の特等席なんだからな。んで、

これが無線機だ。

今は動かないがな。」

彼は巨大な鉄の箱を叩きながらこれが無線機であると説明する。

「なんだ、意外と簡単そうな機械だな。少し弄っていいか？」にとりが好奇心に駆られ、

無線機の電源を点ける。意外と英語の理解は出来ているようで彼

が操作を

教える手順はすっぱ抜けてしまった。

「弄りすぎて壊すなよ？ 壊したら減俸モノなんだからな。」レー

ガンは

バッグの中を確認しながらにとりに注意を促していたその時。

「……こちら谷河童のにとり……本部資材室に誰かいれば応答せよ

…鉄箱の正体が

分かった……」彼女が弄った結果、河童の所であるが無線が繋がったのだ。

「こんな簡単な機械も直せないなんて人間も駄目だなあ、へへ……  
え？」

にとりは自慢げな目で後ろを振り返るが、そこにレーガンの姿は  
無かった。

第十三話「明治止まりの機械技師・後」(後書き)

もう眠いです…助けてください…

設定上次の日(三月十九日)になるまで  
戦闘と言つ戦闘はありません。

第十四話「半径十メートル未満の大事件」(前書き)

三月十八日

午後十九時二十分

八雲家倉庫郡跡地

スペクター付近野営地

## 第十四話「半径十メートル未満の大事件」

「な……なんでビクともしなかった無線が一発で直るんだよ……  
あんなの相手にしてられないって……」

コックピットでの信じられない出来事に動転したレーガンは  
大尉のコートと自分のバッグを持って機外に飛び出していた。

「おい！ どうした一等兵！ ちょっと待て、大尉に言いたい事が……  
おいちよっとでいいから待て！！！」ヤコブ中尉が怒鳴ってもレー  
ガンは振り返りもしない。

「まあ後で機長は戻ってくるのでしよう。黙っていたと思ったら急に怒鳴るなんて……」

いつもの隊長らしくありませんよ？」隊付き曹長が呆れながら言う。

「いつもだと？ この状況で平静が保てるか！！ 俺達はここに来るまでに海を

飛んでいたんだぞ？ なのにここは海の匂いも一切しない。まるで内陸国だと思わないか？」

「確かにそうですが、我が隊の隊員は隊長を除き大声を上げた者は一人もいません。

海の件ですが此処に来るまで何個か山があったようですね。その山達が

匂いを遮っている場合も有ります。」

「後者の件は正論だな。しかし前者は傷ついたよ……」



「申し訳有りません。つい本当の事を言ってしまった。」

「もういい。わかった……」

彼はまだ隊長の任に着き始めて若干十日余り、多少の陰口は覚悟していたが

ここまで真つ向から、しかも悪意無く言葉の下克上をされてしまい完全に滅入ってしまった。

その時、ミゲルと椀の所にもう一人の人影があった

「おつす椀。なんでこんな所にいるんだ？」

青い光学迷彩スーツのほつれを直しながら歩いてきたにとりが椀の隣に座り込む。

「ああ！にとりちゃん。貴方こそなんで山を降りてきてるの!？」

ミゲルの分の筈であったチョコバーまで奪っていた椀がいつもは山から降りない

大将棋仲間であるにとりが此処に居る事に驚いていた。

「いやあ、珍しい機械を川泳ぎ中に見かけたんで光学迷彩の潜入性試験も兼ねてね。

少し乗らせてもらったんだよ。んで？ もみちゃんはどうかんだ？」

「あ…私は一応ここまでこの「ひこうき」を道案内するってんで、その……え」と

「射命丸だったけか？ 取材の代わりに無理矢理させられたんだろ？」

「確かに無理矢理ですけど。面白かったですよ？ あんなでかい鉄の塊が空を飛ぶなんてね。」

「あれほどでつかない飛行機は見たことが無いな。河童でも一応ああいっつのは作っていたけどこれまでの生産分は流し雛軍団にテスト代わりに給与したし。」

第一私達を作ったあれは飛行機とは一味違ったしね。」

「駄目だ……話がさっぱり……しかも腹減ったぜ……」  
完全に蚊帳の外にされたミゲルもまた、森のほうに黄昏に行った。

#### 八雲家客間

「大尉！ まずいで〜す！！緊急事態で〜す！」

ハロルドが丁度いいサイズの皿を探しながら声を上げる

「どうした、言ってみろ上等？ よし、ここを折れば完成だな」  
大尉は客間で橙のお守りに紙飛行機を折りながら応答する。

「それが……この食器棚にはスプーンがありません」

「ほお……そうかそうか……ッ！」  
大尉は危機感を覚えた。もしもこのままスプーンが無ければフォークか何かでカレーを食べる事になる、それに最悪の場合は箸になっってしまうだろう。何としてでも最悪の事態だけは避けたかった。

「なんでそれをもっと早く言わなかったんだ！ ウェイン一等、ちよつと藍様に

聞いて来い。」カレーを見続けているウェインに指示を出す。

「それがですね大尉殿。 さっき聞いたのですが現実世界では未だに金属スプーンは

現役らしいので幻想入りの量は少ないようです。 木のスプーンはあつたようですが

先日の倉庫爆発のせいで全部吹っ飛んだようです……」

「何……だと……？」もう駄目だ、これは抵抗の余地も無い。 潔くチャップステイックカレーを受け入れようと思った時だった。

「ああゝあつたあつた。 先割れスプーンならあるぞ」藍が古びた箱を持ちながら

家内の物置から出てくる。

少なくとも箸カレーだけは凌げそうだ。 大尉は安堵を漏らした

第十四話「半径十メートル未満の大事件」(後書き)

もつそろそろ戦闘があるかも知れません><

第十五話「半人前な辻斬り」(前書き)

三月十八日 午後十九時四五分 八雲家付近森林内

## 第十五話「半人前な辻斬り」

スペクター機内から急いで帰宅したレーガンがやっとの事でカレーに有り付いた時、夕飯を食い損ねたミゲルは何か食べれそうな果実でも無いかと近くの森を散策していた。

「やっぱり寒いな…。それにこの季節じゃあ木の実一個も見つからん。」

彼の言うとおり、今は三月の中旬であり未だに肌寒い気候も相まって

そう簡単には食べれそうな物は見つからなかった。

途中にキノコを見つけたが生憎にも凶鑑を持ち合わせてなく、訓練で

学んだ可食種も忘れてしまっていた。

どれほど歩いたのだろう。彼は今まで歩いてきた道を振り返り、距離を確かめる。

まだ野営の明かりが見えるので迷う必要は無いだろうな、そう安心しきった

時だった。右の茂みの奥から甲高い鉄と鉄がぶつかり合う音とそれに重なり人の痛みを訴える声が、そしてまた鉄がぶつかる音が聞こえる。

「なんだなんだ!? まるで剣と剣とがぶつかる音じゃないか!」  
ミゲルは腰のホルスターのベレッタM9に手を掛けながら音のする方向へと

走る。彼が現場に着くまでも甲高い音は既に三回、合計五回は鳴っていた。

そして現場に彼が着いたとき、彼の予想は的中していた。森の開けた場所

で長い刀を持った人間がもう二人の人間を襲っている。

「どうしたどうした！ その様な細い短刀で何が出来ようか！」

一人は長刀の人間に対して銃剣を使って応戦している、もう一人は銃剣を

落としたのだろう、信号銃を脅し程度に構えている。二人の装備から見て

B・25のクルーがこの森に入り、食料でも探していた所なのだろう。

そして二人の近くにはもう一人が胸から血を流し倒れこんでいた。

「その二人！！ こつちだ！」 ミゲルは腰のM9を引き抜き、安全装置をリリース

させる、スライドを一度だけ引き、薬室に弾丸を送り込み、空中に向かい

二発を発砲する。腰から引き抜き発砲するまでの秒間は五秒と無かっただろう、

刀を持った人間がミゲルの存在に気づき、彼を睨む。

「なんだ、邪魔をするつもりか人間が、この楼観剣の切れ味を試すには三人ぐらいで

十分だ、早々に此処を去れ。」

その声は野太い中年の男の声でもなく、飄々とした青年の声でもない。

まだ幼さが残る女の声だった。

「今なら見逃しておいてやる。此方とて貴様等にイクサを仕掛ける気は毛頭な……」

彼女がそう言いかけた刹那、ミゲルはもう一発を彼女に向かって発砲する。その

弾丸は本人に当たりはしなかったものの体勢だけは崩すことが出来た、  
彼女が片膝をついた時、信号銃を持つクルーが空に向かって引き金を引く。

弾頭につけられたマグネシウムの燃焼により空き地の上に小さな太陽が現れた。

これで野営も気づくだろう ミゲルは未だに体勢を崩したままの彼女を思い切り蹴り飛ばし、倒れているB-25のクルーを肩に担ぎ、野営地に向かい走り出した。

それを見た二人も自分達の機体へと走る、一人は落とした銃剣とコルト自動拳銃を拾い上げ、もう一人は持っていた銃剣を鞘に納めミゲル達を追った。

「何だ！ あの照明弾は！？」

「さっきの発砲音もだ！！ 誰かが襲われたな！？」

「ぜ、全員戦闘配置！！ 初陣を飾るぞ！」

「こんなのカレー食っている場合じゃないぞ！ 機を守らねば！！！」

「ちよ、ちよつと大尉殿、自分はまだ全然食べてません！！！」

「カレーと飛行機のどっちが大事なんだ一等兵！」

「もちろん、カレ……そ、その質問はさすがに卑怯ですよ！！！」

照明弾が空に放たれた時、八雲家でも野営地でも異常を確認し、それぞれが戦闘準備を



始めていた。

第十五話「半人前な辻斬り」(後書き)

いつもより短い上に陸戦過ぎてすいません>< そして妖夢登場で  
す

第十六話「後日(時?)談」(前書き)

三月一八日

午後二十一時一五分

八雲家居間

## 第十六話「後日(時?)談」

「この傷は切創だな、刺創だったらこんな家じゃ応急処置も出来なかつたな。」

スペクターの備品である圧迫包帯を負傷したB・25のクルーに巻きつけながら

藍がそれを取り巻く人達に怪我の程度を話す。

「あれは男なんかじゃ無かつたんです。紛れも無くあれは少女でした……」

ミゲル伍長がマツキンリー大尉に現場の状況を説明する。

「私が悪かつたんです……私が早く奴を撃ち殺していれば……ロバートがこんな事になることは無かつたのに……」

クルーの言うことでは負傷したクルーの名前はロバートと言うらしい。

そしてそのクルーは話を続ける。

「ロブが斬られてから私達は完全に動揺していました。副機長のブレンが

拳銃を抜いたのですが奴の横払いで彼の手からコルトがすっぽ抜けました。

彼にはまだ銃剣が有りましたがあの長刀に対してはリーチがあり過ぎたんです。

抵抗手段が無くなった彼を見下した目で一蔑した後には奴は私の方へ来ました。

その動きはあまりに素早く、拳銃を抜く暇さえ有りませんでした。

とっさに銃剣を鞘から抜き、長刀に対して銃剣を横に向けて太刀打ちしました、

しかし奴は両手で持っていた長刀から右手を離して腰に差していた短刀を抜き、私の銃剣に引っ掛けて下に引き下げてきました。多分ですが私の銃剣をずらそうとしてきたのです。そこまでしてまで長刀の攻撃を優先したかったのでしょうか……」

話の中に副機長の名前がある事から彼自身は機長なのだろう。

「普通に抜いた短刀で刺しちゃえば良かったのに、頭が硬い奴だな」  
手当てを終えた藍が供述を聞いて考察する。

「そこに彼、ミゲルさんが来てくれました。あの時発砲していませんければ」

私の銃剣は折れていた筈です。それにロブも運んで頂いて。感謝の言葉も見つかりません……」

彼は卓袱台に半分まで切込みが入った銃剣を置く、それは大戦中に旧日本軍が使用していた銃剣に対抗するために製造された物で剛性、耐久性共に高水準な得物だったのだがそれが半分まで切断されている。

この銃剣がどれだけ相手の得物が凄まじい切れ味かを物語っていた。

「そんな…伍長なんぞに敬語を使わないで下さいよ、少佐殿……当然の行為をしたまでなんですよ……」

ミゲルは機長が少佐だと知れたのは今までこれといった変化が無かった

米軍階級章の御蔭だろう。

「これだけ硬い短剣がここまで切れるなんてな、そんな凄い刀を持つていても」

この人にはちよつとした傷しか負わせられなかった。」

藍が銃剣を持ちながら刀身の強度を確かめている。

「あくまで正攻法を貫いている点とか、とつさの機転が利かない点や長刀に固執している

点から未熟者なんだろうな」

大尉が簡単に言いくるめる。

「もしかして……ねえ、その娘の周りに半透明な何かを取り巻いてなかった？」

先ほどから縁側に座り月を眺めていた紫が質問する。

「半透明な物？ いや…見てはいないので…」

「あ、自分が照明弾を撃つ寸前に奴の周りでそんなのを見た気がします…」

発光後は光のせいで全然見えなくなりましたが。」

副機長のブレンが会話に割って入る。

「そう……」

紫が縁側から立ち上がり、本棚から一部の新聞を取り出す。そこには大見出しと  
共にカラー写真が付いていた。

「これは天狗の報道部で発行している新聞なんだけど。 こういう娘だった？」

そこには「幻想郷でのあの世か！？ 冥界への扉一般開放へ」の見出しと共に

青い服を着た淡赤の女性と緑のワンピースを着て背中に一振り腰に

一振り、  
合計二振りの刀を差した少女が恥ずかしそうに写っていた。

「この二人は中途半端なあの世に住んでいるの。この青い服の人が西行寺幽々子、  
完全な幽霊ね。そして隣の少女が彼女の従者の庭師、魂魄妖夢。  
この子は半人半霊って言って、近くに自分の半分である幽霊を連れてくるのよ。  
だから半透明な物体の有無を聞いたわけ。」

「ではこの子が切り裂き魔だと……」  
大尉は彼女の種族が特異であるのと身の丈ある長刀を振り回している  
姿を想像し、背筋に悪寒が走った。自分の習った格闘術にはナイフの  
対処法しかない、もし素手で出くわしたら即死だっただろう。

「こいつです、間違いありません!!」  
少佐が写真に指をさしながら大声を上げる。

彼等が対策法をああでもないこうでもないと繰り返す内に  
八雲家にヤコブ中尉以下七名の小隊が戻ってきた。

「大尉殿、その切り裂き魔とやらはここ近辺を探しても見つかりません。  
多分逃げられたかと思えます、しかし自分の推測ですが明日にでも  
また現れるかも

しれません。 通り魔と言うのはそういう者だとキンダーガーデン  
(幼稚園)  
で習いました。」

「ご苦労様です中尉殿。 いやはや…随分と凄い装備をしていますね。」

それが二十一世紀のアメリカ軍なのですね。」「少佐が彼に労いの言葉を掛ける。」

「は…はあ…所で大尉殿、この方の官姓名は何でしょうか?」「中尉は無礼極まりない言動をしているが仕方が無い部分もある。」

「そういえば私も聞いていませんな。 姓名をお教えください、少佐殿。」

少佐と聞いておどおどする中尉を尻目に少佐は話し始めた

「ああ…私の名前はアレキサンドリア・フィブスター空軍少佐、どうぞ」

アレックスでおよび下さい。」

「フィブスター…!? まさか!!!」

大尉は自分の鞆に入っている飛行予定目録を取り出す、そして演習参加についての項目に目を通す、その演習生の名前を読むとそこには「尚、この演習に参加する演習生はジャック・ハフマン(19)、ジェフリー・フィブスター(19)以上であり教官名はウィルバー・トンプソン(37)である。」と英文で書かれていた。

「まさか…そのまさかかもな…」



第十六話「後日(時?)談」(後書き)

都合が良すぎる展開ですいません><

第十七話「Special Tank No. 3・前編」(前書き)

三月一九日

午前七時二十八分

八雲家敷地内倉庫郡跡地

第十七話「Special Tank No. 3・前編」

八雲紫の屋敷を後にした大尉達は野営地に戻りヤコブ中尉以下七名が交代制で見張りに就く事で他のクルー達は眠ることが出来た。

一方の椋、にとり達は文が迎えに来たので既にこの広場にはいない。

「全く、昨日は散々な一日でしたな中尉、良く眠れたか？」

出発準備を始めたスペクターの搭乗口で大尉が

見張りを終えた中尉に話しかける。

「良く眠れたと言うならそれは嘘になりますね、見張り番が五分交代だったんですよ？」

眠れる訳が無いじゃないですか……」

そう言うヤコブ中尉の目はかなり眠気を訴えていた。

「取り敢えずここから東に進んだ所に大きな畑があるからその近くにでも降りてみたらどうだ？」

大尉の隣で荷揚げの風景を見物している藍が

大尉に話し掛ける。

機体後部の搬入口にテントやタープ、寝袋やライト等が深緑に染められたキャンバス地の袋に詰められたのを

「丁寧」に投げ入れる様は彼女達にとつて普通に生活しているだけでは到底見られない光景だった。

その藍の隣には紫がスキマの間から日傘を右手に持ち顔を出しながら藍と同じくその様子を眺めていた。

「我々はそこから此処にやってきたのですよ、

戻ったりなんてしたら確実に半殺しですな、ハッハッハ」

野営テントを畳むクルーの一人が声高に答える。

「紫殿、何とかありませんかね？ 他に降りれる場所を探したいのですが…出来ればこんな飛行機が有りそうな

場所が…」

大尉は飛行場みたいな場所さえあれば何処でもいい。他の飛行機乗りにもさえ出会えればこの状況が大分楽になる、そう考えていた。

「だったら、命蓮寺の裏に貴方達と同じような方が最近になって集合してきているわ、此処から南進して人里に向かいなさいね。やっぱり人間は人間の近くにいたほうが無難よ。」

実は命蓮寺に飛行機が集まっているのには理由がある、ここ最近になって六十数年前に現世で起きた大戦争の余波（戦時中の日米両軍が幻想郷でも戦闘をしようとする）が人里にまで及んだ時、一人の妖怪と一人の魔法使い（語尾に「ぜ」が付かない方）が

「里で人間同士が殺しあつてはいけない」と両軍を見境無しにボコボコにした拳句、「これからは仲良くこの寺の敷地で暮らしなさい」と無理矢理に彼等を詰め込んだ。結果、飛行機や車両が命蓮寺に集まっている事は黙っておいた。

「成程、南進すれば良いのですね、紹介に感謝します紫殿。お？ どうしたパメル。」

二人が話している所に副機長のパメル少尉が走ってくる。

「お話の途中ですみませんが実はクルー共がしつかりテントを畳まなかったので折畳み式のテーブルが仕舞いきれません。それとレーガン一等兵の寝袋が何者かに盗まれた…って言いますか…」

「ん？ レーガンは昨日寝るときは機内で毛布被っていたから寝袋は使っていないはずだぞ？

それはどうでも良いとしてテールは小さいから

B - 25に入れてもらえるかなあ…おうい、少佐殿！ちょっと来て下さいな。」

彼等が何やら話し合っているのを見たアレキサンドリア空軍少佐は既にプロペラを回転させタキシングを始めたB - 25にブレーキを掛け、機から降りて手を振る大尉に向かってにこやかな顔をしながら走ってきた。

事情を聞いた少佐は口を開き、

「我々はラバウルを通過する日本の輸送艦隊を威力偵察する目的で離陸したときにここに巻き込まれたのだ。

機銃弾は満載しているが爆装はしていない、爆弾倉に入る範囲内なら何でも入れて構わない。」

「ちょっと少佐殿、あそこにはロバートが入るはずじゃ…？」

少佐についてきたブレン副操縦士が割って入る。

「お前、爆弾倉にあいつ入れて偶然装って扉を開くつもりだろ！？許さんからな！アイツは廊下に括り付ける、作戦変更だ。」

ハアと溜息を付いたブレン少尉は嫌々ながらも機に戻り、搭乗口の扉を開け、機内に戻った。

副機長だけを乗せたB - 25はタキシングを再開。駐機状態にあつた機体は命を吹き込まれたように動き始め、滑走路に見立てた倉庫跡の端から飛び立てるように移動を開始する。

その傍らで方向指示も荷揚げもせずにメモ帳と向き合う二人の姿があった。

「周波数はこれで良いのですね？ 良かった、これで光信号を使わなくて済みますよ。」

「ああ…しかし時代が違う無線機で…どうにかなるのか…？」

にとりに直してもらった（勝手に直された）無線機とB-25の無線機の周波数の打ち合わせを担架に乗ったロバートとその隣にはレーガンがいた。

「昨夜にとある人が我々の無線機を弄った時は我々の無線機より

かなり昔の無線に繋がってたって言っていましたから、多分大丈夫ですよ。」

「そいつあ良かった…お前って凄い奴なんだな…」

「いえ、だから私が直したわけじゃ…」

「ほらほら、全員乗り込め！ こんな所に置いて行かれないなら残ってもいいがな！！！」

全ての荷揚げを完了させたスペクターのコックピットから大尉の怒号が飛ぶ。それに合わせて中尉以下の小隊とスペクターのクルー達が小走りで搭乗を始める。

「「こんな所」って…紫様が妖怪を近づけない為に微弱な結界を張っていたって言うのに…心外だな…」

「いいのよ藍、どうせ普通の人間には見えないぐらい弱くしたんだし礼も言われない筈よ。」

自分の主人にお礼の一言も無い事に少し苛立っている藍とその事に関しては気にも留めない紫の二人。先程までは荷揚げの光景を見物していたのだが今度は同じような服を着た人間達が行儀良く二列になり、それを乱す事無く乗り込む様を見物していた。これも礼儀に疎い幻想郷では中々目にする事は無い光景だった。

「紫殿、藍殿。 ちょっと離れて貰えますか？ 流石にプロペラの下は危ないですって」

タラップに足を掛けて最後尾にいたレーガンが移動を促す。そのクルーが言うように彼女達がいたのはスペクターの右翼第四エンジンが回す四枚プロペラの真下だった。これが回転すれば幻想郷で一、二の力を争う妖怪とそれに従属する式神でも致命傷は避けられない。

「じゃあ離れましょうか、藍は走って離れてね。」  
そう言うつと紫はスキマを閉じてその場から消え、そしてスキマはスペクターの上空に開かれた。今度は空から見物しようとしているらしい、その様子はコックピットでも見ることが出来た。紫はスキマの中から「一方通行」の標識を出して大尉と少尉をからかっている。

「一体何がしたいんでしょうかね…大尉殿。」

「俺には理解出来ない高等なジョーク  
なんだろうな…よし、出すぞ!!」

座席に着き全四エンジンを起動させた時、大尉は  
今まで忘れていた二人のエビエーター  
(空軍練習パイロット)と一人の教官パイロット(空軍)  
の事を思い出したが「子供じゃないし何とか  
なるでしょう」と考える事にした。

「そんな走って逃げろって言われても  
こんな音の中じゃ頭が…痛て」

既にB-25は離陸滑走を始めていたが完全に  
離陸する前ならタキシング程度この広場は可能なので  
この倉庫跡地には全開状態のエンジンが二基、  
慣らし運転中のエンジンが四基と結構な爆音が  
轟いており、スペクターから走って離れていた  
藍は突き出た狐耳を両手で押さえていた。

「B-25、離陸しました。我々も続きましょう。」

大尉の隣に座るパメルが倉庫郡の中から貰った  
単眼鏡を覗き込みB-25の動きを観察する。

「最低でもあと二百メートルは機体同士を  
離す必要性がありそうだな。第一此方のほうが  
機速が速そうだからな。」

「こちら輸送区、離陸準備は完了した。いつ出しても



文句は言いませんよ。」

「クルーも全員座席に座らせました。それに側面武装には火蓋を被せていますので万が一会敵しても応戦は出来ません。」

ヤコブ中尉の小隊とクルー代表で報告したウェイソ一等兵の声が機内で木霊する、木霊するぐらいの音量で言わないと轟音を出すエンジンに負けてしまうからだ。

「了解した。これより離陸滑走を開始する！  
しっかり掴まれよ！！」

タキシングを完了させたスペクターは既に広場の隅に移動していた、此処からならギリギリで離陸させる事が可能だろう。

大尉と少尉はそれぞれ機内油圧や電気系統、エンジンの出力等を確認してから操縦桿を握る、それは今まで普通にこなしてきた動作だったのだが一日の時間が空いただけでここまで懐かしい感覚に浸ったのは二人とも初めてだった。

大尉が機体の車止めを収納させ、加速を開始する前の時だった。

レーガン一等兵が弄り続けていた無線機に通信が入る。すかさずレーガンが応答し、二、三度相槌を打った後、二人に向けてとんでもない一言を振ってきた。

「機長！！離陸進路直上を通るB - 25より通信！  
上空に出現した謎の飛行物体が

B - 25の真横をすれ違った模様！！！！

こちらに近づいている様です!!」

「何だと!? 続ける!!」

滑走に必死な機長の代わりにパメル少尉（副機長）がレーガンに続きの報告を促す。

「はい！それがグライダーみたいだったと

喚いておりまして、何か「ミートボール」が書いてあったとか云々……」

「はあ？ミート……ん？ なんだありゃあ!？」

正面上空に見え始めた黒点は左右に揺れながらだが確実に大きくなっている、少尉は再度単眼鏡を覗き

黒点の形状を確認する。そのレンズには信じ難い物体が映し出されていた。

「機長!!! 直ぐに離陸を中止してください!!!!!!  
戦車が!!! 古い戦車がこっちに飛んできます!!!!!!  
しかも日の丸が塗装されています!!!!!!」

第十七話「Special Tank No.3・前編」(後書き)

リハビリ話です、話がよく分からないかもです

題名は軍事に詳しい人には

もうネタバレに近いですね(笑)

十二月二六日追記

前編と中編を連結してみました。

第十八話「Special Tank No. 3 中篇」(前書き)

三月一九日

午前七時四十八分

八雲家敷地内倉庫郡跡地

## 第十八話「Special Tank No.3 中篇」

倉庫跡地の上空に現れた一台の旧日本軍のものと見られる戦車がスペクターの右側十五メートルほどの地点に滑り込むように着陸してから既に五分は経過していた。

戦車は正面をスペクターに向けて停車していたのだが両側に装着されていた筈の主翼の右片方が無くなっていった。

時空系列を辿れば右翼は未だに戦車の右側にくっ付いていたのだが肝心の右翼は着陸する際スペクターの右翼に思い切りぶつけてしまい、木管帆布張りのグライダー翼は跡形も無くバラバラに砕け、米兵達に与えた奇想天外な格好による精神ダメージはその主翼の脆さから来る驚愕によってほぼ0となっていた。

「真横から着陸しても履帯が千切れていないですね。それにしてもあの車種は一体何なのですかね？」

自分としては戦車自体は昔の記録映画で見たことがあるのですが・・・確か、ええ〜と・・・「Ti-Ha」でしたっけ？」

まさか鼻たれ坊主の頃に興味半分で見っていた白黒映像が役に立つときが来るとは思ってもみなかったパメルであったがこの答えには自分自身も信用が置けずどうせだったらもっと詳しく見直しておけば良かった等と想いを巡らせていた。

「「たっけ？」って……俺に聞いてどうすんだ？パメル。まあ機種はそれでいいからもっと詳しく聞かせてくれ。」

「ですが機長殿。残念ながら自分はこの手の珍妙な兵器マニアじゃありませんので…わかりませんが…何かしらの本さえ有れば話は別なのですが。」

「大尉殿、上からこんなもの落ちてきました。」

B - 25に戦車と起こした衝突事故の旨を報告し終わり、彼らの談義に割り込んできたレーガンの片手には一冊の本が握られていた。

表紙には「太平洋戦争兵器全集3 / 2・日本陸軍編」と書かれており、とても都合が良すぎると言っても可笑く無いほどのグッドタイミングである。

勿論、基地から離陸する際にこの様な冊子は持ち込んでいない（持ち込んでいたとしても何に使うのか？）ので

これは紫の仕業であると大尉は確信した。何枚かページを繰り日本語が理解できるのを確認し冊子をパメルに返しページを

探させた、その間を使い八雲家を風防からチラリとだけ覗くと

藍が慌てながら藁葺の屋根に「中立」と書かれた横断幕を張ると今度は持ち前の早足で地面に円と幾重にも重なる線を家がギリギリ入るぐらいに書き入れていた。

前者は幻想郷最強クラスを誇る妖獣としてはかなり見つとも無い対応だが

後者の方はさすが式神と  
思わせる行動だ。

「中立と謳っておきながらこっち側に  
肩入れしているじゃねえかよ、訳が  
わからんな。」

「多分アレは特殊作戦機か空挺戦車…  
…ああ、あつた。有りましたよ機長殿」

パメルは該当ページを開いた状態で大尉に冊子を手渡し所々を指  
差しながら  
説明を開始した。

「やっぱり空挺戦車の一種でした。  
名前は「特三号戦車<sup>クワ</sup>」、  
九五式八号軽戦車をベースとして  
滑空用に装甲厚を一ミリほど  
削ってあり最大装甲厚も  
十一ミリが限界。そして履帯には  
ソリを装着してTYPE-97（九七式重爆撃機）や  
Betty（一式陸上攻撃機）等の曳航機が  
出す離着陸速度に耐え得るそうですね。  
敵の飛行場に曳航機ごと強行着陸し、  
自分達が死ぬまで破壊活動を繰り返す  
コンセプトらしいのですが  
以前にグライダー格納型が存在していたり  
曳航機の方が先に落とされる場合を  
想定してしまつて怖気づいたり  
そもそも正面装甲が十一ミリな戦車が数台で

敵の飛行場を制圧できるのか。

等の問題が山積みになってしまい

最後は企画倒れを起こして

いるようで実機があるか不明だそうです。」

「誰がチ八車って言いやがったんだ？ 思いつきり  
違うじゃねえか。何だよ八号って……ん？

そついや、さつきお前あの戦車のコンセプトは  
何て言ったんだ？」

「ああはい、「着陸後は自分達が死ぬまで戦闘を行う」と  
言いましたが……どうかいたしましたか？」

「少尉、今の我々の状況を言ってみる？」

「それは、まああの戦車が着陸してきて此方に  
砲を向けるような形で停車して……」

「この機のマークはなんだ少尉？」

「勿論、US AIR FORCE……げえ！！  
機長！！この状況はマズくありませんか！？」

「今更気づいたのか！！取り敢えずリバーサルピッチ！！  
ここから少しでも離れるぞ！あんな砲なら少し  
離れれば何とかなる！！」

マッキンリーは機長席の操縦桿を握り直し、  
プロペラ角をマイナスに設定し、  
アイドリング状態にしていたアリソン社製の



ターボプロップエンジンの出力を  
最大まで上げ、少しずつ後退を開始した。

「不明戦車、左翼とソリを炸薬パージしました！  
移動を開始すると予想されます！！」

「了解しました中尉殿。これから少し無理な  
機動をするので座席のベルトだけはしっかり締めて  
おくように、そして万が一に備えて

一応ですが小銃の準備だけはしておいてください！」

「あの戦車はそれだけ危険って事か！？

まあ昨日の件もあるし、久しぶりに訓練以外  
でぶっ放せる口実だなあ！！いやあ！

ナムを思い出すぜ！」

「わかりました、わかりましたから操縦席で

立たないで下さい！！興奮しないで！落ち着いて  
下さいって！それに貴官はベトナム戦に至っては  
従軍もしていないと思うのですが！？」

誰がどう見ても二十代後半の彼が六十年代に起きた

ベトナム戦争に従軍したようには見えないのだが

彼が何故その様な事を言うのかはまた別の話。

彼等が未だに之が本当の戦争だと言う自覚も無い  
ような会話を続けている時でも特三号戦車の方は  
後退を続けているスペクターを追っていた。

「車長！！速度が早すぎですぜ！これじゃ照準器が  
ぶっ飛んじまう！！」

「ここは多分だが滑走路なんだぞ！地面は比較的  
なだらかなのだから偏差射撃だけ頭に入れておくぜ！！」

「草丈技術大尉！あんたあ何も分かつちやいない！！  
旧式の照準器にやあ上下運動に対応した制動装置  
なんてついちやいねえんだ！それに訓練でそんなに  
跳ばすんじゃないねえ！！！！あんたのお陰で機体の右翼  
まで粉々にしちまって、ほんといい加減に  
して下さいよ？」

「わくってる、わくってるって黒谷軍曹、東雲軍曹。  
こんだけ演習で思い通りに走り回せるってのが  
初めてで興奮しちまってさあ！！！！」

三号戦車こと九五式軽戦車の内部でも大声の  
張り合いが起きていた。

どうやら彼等は演習開始前の滑空試験時に  
此方の結界にめり込んでしまったようである。

しかも目の前にあるスペクターを  
「米空軍マークが付いた動いてくれて凄く  
手の込んだ標的機」としか見ておらず、  
射撃する気は満々であった。

口の悪い操縦士の黒谷軍曹と車体機銃手の東雲軍曹は  
まだマシな部類に思えるほど、この草丈中尉はとんでもなく  
軍人失格な野郎だった。

第十八話「Special Tank No.3 中篇」(後書き)

日本軍戦車兵の名字は

クロタニ

黒谷

シノノメ

東雲

クサタケ

草丈

と読みます。

元ネタなんてありません(笑)

第十九話「Special Tank No. 3・後編」(前書き)

三月一九日

午前八時一分

八雲家敷地内倉庫郡跡地

## 第十九話「Special Tank No.3・後編」

「ようし！！進路を左十度に変更！！」

三間（約六メートル）進行後

右十度をかけヨソソ口、標的の真正面を  
砲撃する！！」

「こちら操縦士、了解！！」

スペクターの始動に併せて行動を開始した  
特三号戦車は少し右よりだった進路を左に修正、  
斜め移動をした後、今度は進路を左に戻す。

これにより距離は離れたものの特三号戦車は  
後退し続けるスペクターの真正面へと  
移動することが出来た。

「機長！あいつら相当本気ですよ！？

これじゃあコックピットが吹き飛ぶのも  
時間の問題です！」

「流石にまずい状況だな……おいハロルド！

ウェイーン！ミゲル！砲の方は使えるか？

威嚇ぐらいにはなるだろう。」

「一応使用は可能ですが外に出て火蓋を

外さない場合二度と武装に火蓋を

装着できません！！」

射手席のベルトを目いっぱい締め、赤外線

ガンカメラを使い外の状況を確認する  
ハロルド上等兵が機長の質問に答える。

「火蓋を壊せば砲が高空で凍りつく…二度と  
砲を付けて高空に上がれない、それに誰かが  
火蓋を外しに外に出るのも危険すぎる。」

「では反撃の法は無いのですか!?それは  
いくらなんでも有り得ませんよ!!何か有効な  
手段でもあるはずです!？」

「おお…あつたあつた、丁度良い手段が  
一つだけあるぞ?」

大尉は少尉を馬鹿にするような声でたった  
一つの抵抗手段について知っていることを  
思わせるような素振りを見せた。

「本当ですか!!じゃあいまからそれを……」

コックピットの副操縦士席で折り曲げられた  
少尉の膝に小さな光るものが落ちる、  
はて?と思つて少尉がそれを掴み上げると  
そこには銀で出来た小さくも神々しい  
十字架に磔にされたキリストの  
ネックレスだった。

「ほんとに、「たった一つの冴えたやり方」  
ですねぇ……」

その頃、特三号戦車の中でも一時は収まった喧嘩がまた再燃していた。

「だからもつと速度を上げろ！！これじゃあ追いつけない！！」

「航空機相手に零距离射撃せんでも良かるうに、少しでも距離を取らんと初速が低いこんな砲じゃまともに攻撃も喰らわせられん。」

草丈技術中尉のわがままを論理的に打ち負かすのは車体機銃手の東雲軍曹である、しかしいくら彼が中尉を論破しようとする車体の速度が下がることは無い。何故なら蛇輪を握るのは東雲でなく黒谷だからだ。

「おい黒谷！早く速度を下げろ！！じゃなきや履帯が千切れ飛ぶぞ！！」

「分かってますよ東雲先任、でも履帯の音を聞いてください。もうそろそろ寿命ですなあ……」

黒谷軍曹の言う通り、戦車の履帯が発する音は駆動開始時の軽快な金属音が今では直ぐにでも弾けてしまいそんな悲鳴を上げていた。

この戦車自体、これまで幾多の戦場を渡り歩いてきた年寄りだが試験に当たって老朽化された機器だけは新品に付け替えたと整備兵が言っていたのだがその新品と言えど大戦後期の敗色が出てきた頃の日本は人手と資材不足の為に

国家総動員法や国民勤労報国協力令による  
国民労働の義務化、それに伴い勤労報国隊が学校  
ごとに結成され、軍需工場に動員されていた。  
資材の方はと言うと度重なる破壊と消耗による  
負の連鎖は島国な日の本の国にとって大打撃を  
被る事となる。

その為資材の不足を補う為に日本中のありと  
あらゆる鉄や銅、その他諸々の鉄材が供出される  
事になった、お釜やらだるまストープ、  
寺社の鐘楼等は格好の標的だったと言う。

そんな訳で大戦末期の日本軍兵器の部品精度  
は滅茶苦茶な物であった、現に彼等が乗る  
軽戦車の履帯が三キロメートルも走っていない  
のに千切れそうなのである。

作ったのが現在（スペクター組の時代）の年齢  
と言う女子高生や中学生、まして材料が鍋や  
お釜な兵器に乗って、しかも部品不良で  
死ぬなどと言う事は、どうしても軍曹二人は  
避けたかったのだがそれ以前に演習である、  
しかも地上演習で事故死するなんて故郷の  
家族に顔も合わせられない

（当然の事であるが）

「こんな不良品掴まされて……なぜ試験車  
の状態が不調なのに試験を続けるの  
ですかねえ……」

「はっはっは、そろそろ日本も  
御終いよお。こんなトンデモ兵器を実用化  
しないで試験だけはするんだからなあ……」



…そろそろ千切れるぞ…」

東雲軍曹の予測どおりにスペクターを追跡中の特三号戦車の履帯は気持ちの悪い音を発しながら誘導輪から徐々にながすが確実にブチブチと千切れて行く。

その音は戦車内に、姿はスペクターのコックピットから伺う事が出来た。

特三号戦車の窮屈な砲塔の中で草文中尉はその異音に二人と比べ遅れて気がついた。

「なんだこの音は！？黒谷、お前何をした！！」

「全ては中尉の命令の産物です！！もう動けません！」

一方、スペクターのコックピットでは。

「なんだアレは！？パメル、お前はと思うー！！」

「キヤタピラが両方同時に千切れましたね…もう変形（トランスフォーム）でもすれば良いのに、日本軍脅威のメカニズム…ってやつですか？」

「ではパメル少尉、変形したと仮定しても次に待っている事は何だね？」

大尉は敷地の端まで下がった事を確認しプロペラ角を元に、エンジンをアイドリング状態に戻し機体の後進を中止させパメルに話しかける。

「変形しないとしても多分、いや絶対に撃つてきますね。それに抵抗手段も神頼みだけ。」

大尉の一昔前のコメディ番組司会者張りの声に顔の前でキリストのネックレスを片手でぶら下げながらやる気無く答える。

「でも「逃げる」って手段があるな」

「何処にですか？」

パメル少尉が答えた後、二人が逃走経路を思考する間、束の間の静寂が訪れる。

「後ろだな。」「後ろですね。」

「そうしよう」「ああみっとも無い」

逃走経路と発言時刻が見事に

一致した二人は急いでシートベルトを外し、マウンテンバイクに使いそうな形状をしているエアクルヘルメットをそれぞれ被る。

マツキンリー大尉は自分の鞆を、パメル少尉は自分の鞆と無線士席に座るレーガンの襟を引っ張り、急ぎ足で機体後部へと逃げ込んだ。

「標的の動きが止まったぞ！  
九四式徹甲弾装填！！」

「こつちの方が先に止まってますよ中尉殿……」

特三号戦車の中では草丈車長が据え付けられた三七ミリ戦車砲の安全装置と砲尾の閉鎖器を開放し弾薬庫から一発の徹甲弾を取り出し装填する。

「目標、標的機の操縦席、狙いよし！  
斉射！！！！！！」

中尉は照準器で標的のコックピットを狙い、引き金を思い切り引いた。ポンと言う軽い音と共に砲身の動きと相対するように徹甲弾が

撃ち出される、それは照準器の狂い  
さえ無ければ確実にスペクターの  
コックピットを貫通していた、  
のだが砲弾は奇しくも射出直後に  
空中で極端な弧を描き右に反れながら  
バウンド、スペクターの後方に  
生えていた大きな杉の木に 着弾した。  
履帯が千切れるほどの暴走による  
照準器の故障か、はたまた素人が  
製造した粗悪な砲弾だったのか、  
操縦士と車体銃手の軍曹二名には  
判別出来なかった。

「中尉、目標外しました！次弾  
装填して下さい！！」

銃手の東雲が着弾報告をする、  
しかし中尉からの返事は無い。

「中尉殿、次弾装填です！！  
中尉！？」

操縦士の黒谷が言おうと返答が  
無い、それに先ほどからやけに  
ハンドルが明るい、それに頭には  
健康的な光が当たっている。

不審に感じた黒谷は車長が居る  
はずの砲塔を見るため振り返る、  
しかし車長である草文中尉の足は何処にも  
見当たらない、それどころか

砲塔の中がかなり明るい事に  
黒谷は気がついた。

「ハッチが開いてる！！外に  
出たのかあの人！？」

「俺が確認する！エンジン  
切ってる！！」

エンジン停止に手間取る黒谷に代わり  
東雲が七、七ミリ機銃から手を離し  
砲塔に上がる。彼が砲塔に上がると  
ハッチのロックが外れているのが  
目に付いた。そして後方機銃の薬莖受けには  
戦車兵の命とも言える眼鏡（防塵ゴーグル）  
が掛かっており砲塔内には硝煙が  
充満している。

まさかと思いハッチに手を伸ばし  
周囲が見える範囲まで頭を上げる。  
砲塔は車体の左寄りに設置されているので  
落ちるなら多分左側面だろうと  
東雲は左側の地面を向く。

彼が左を向くとそこには案の定  
両手で顔面を抑え、仰向けになりながら  
足をばたつかせる中尉の姿があった。

「おい東雲え……水筒だ、水筒を  
取ってくれえ……」

「なんだ、見えているじゃないですか

中尉。硝煙が目に入ると結構大変  
なんですよ?」

両目失明をしていれば大事だったが  
自分の姿を認識してくれた事に彼は安堵した、  
がそれ以上に排煙機能もままならない、それに  
窮屈極まりない砲塔内でゴーグルもせずに  
砲弾をぶっ放すとんでもない車長に  
心底あきれ返っていた。

第十九話「Special Tank No.3・後編」(後書き)

年内二十話はいけそうにありません。  
本当に申し訳ありませんです。

評価、感想等はお気軽にどうぞ。

第二十話「突然な真実」(前書き)

三月一九日

午前八時十五分

八雲家敷地内倉庫郡跡地



## 第二十話「突然な真実」

倉庫跡地で繰り広げられた二十分弱に及ぶ緊迫の追走劇は特三号戦車の車長が硝煙を目に入れ、車内から飛び降りると言う何ともあっけない最後で飾った。

その後、スペクターに添乗する空軍小隊は戦車内にいる残り二名の乗員が車長を抱え込みに車外へ飛び出した時を狙い、誰も傷つけずに（正確には一名負傷）三名を拘束する事に成功していた。

「くそおおおおお！！離せえええ！！鬼畜米兵に捕まるなんて、俺としたことがあああああ！！」

両手両足をスペクターの機内備品箱に入っていた短いオリブ色の繫留ロープで縛られた東雲軍曹がまるでこの世の終わりが来たような程の声でわめき散らす。

両手と両足を一箇所で縛られ、そしてとてつもないわめき声を上げて暴れる姿はそれを吊るす木の棒と輸送用の人間二名を両端に置けば

近所ぐるみで行われる週末バーベキューに使うメインデッシュ（丸焼きの何か）の出来上がりである。

「残念だったな、日本語は今の俺達にとっちゃ得意分野の何物でも無いんだよ。「鬼畜米兵」なんて言われたからにやあこの縄を解く訳にもいかねえな。もう少しおとなしくなれば足の縄ぐらい解いてやるのに」

「まあそんな事はどうでも良いが貴官の官姓名生年月日を言ってください。嫌なら

兵士手帳の開示でも構いません。」

捕虜への軽い尋問を任された小隊付き  
軍曹のホイトとミゲル伍長の二人は訓練生活  
でも兵士生活でも現代では滅多に体験する  
事の無い未知の現場に、しかもそれが  
場にいる二種類の人間の内でも有利な方  
(不利な方をやるのは誰でも願い下げだろう)  
を演じる事が出来て若干興奮気味であるのが  
一名と農家生まれに背高のつばがプラスされた  
「アメリカ農夫の方程式」特有の鈍い喋り声と  
なぜか的を得た発言をする事が特徴の  
冷静な軍曹一名がいた。

「手帳は胸ポケットだ、好きに取り出せ。  
しかし何で俺だけを縛るんだ!?あの  
二人はどうして縛らない!!」

「ああ……その事ね……ええ」と……  
シノノメヤスタカ……一九二〇年の四月  
六日ねえ……それは貴方がぶん投げた  
スパナ二本の内、一本のスパナ  
がウチの小隊長の鼻ど真ん中に命中して  
その人が思いつ切り仰向けにぶっ倒れたんだよ。  
見てなかったかい?それはその反省だよ。  
しかし、良いフォームだったよ!俺も見てた!」

小隊七名全員と旧(?)日本海軍陸戦隊戦車兵  
三名(一名だけ使い物にならず)が真つ向から  
ぶつかり合った捕り物劇は自動小銃を持つ

米軍側と偶々ベルトに付いていた工具類  
を武器に立ち回った日本兵では攻撃力も雲泥の差  
のままで終わったものの彼、東雲軍曹が投げた  
スパナがヤコブ中尉の鼻に命中したという  
僅かばかりの抵抗もあつたのだ。

今回、ホイトが手に入れた話の種は彼の投球  
フォームがとても綺麗だった事とヤコブ中尉  
の鼻がより一層低くなったのと大漁だった。

「お？俺の投げ方が！？やっぱり出ちゃうかあ！  
やっぱりアンタも野球が趣味か！！

俺は国民学校の野球組で投手やっていたん  
だぜ？そりやもうマウンド立てば良い球  
三本三死交代なんてザラなんだぜ？  
アンタは野球をやっているのか？」

彼の目は話題が野球関連の事になった  
途端に死んだ魚のような目が瞬時にして  
光を取り戻した。

「ああ、俺もハイスクールまではやって  
いたよ。ポジションはキャッチャーだった、  
それに：あそこにいる貴官の連れと  
話しているジゼルって奴も経験者だったな。  
ほら、さっきのアレで貴官が投げたもう  
一本のスパナをキャッチして「一塁！！」って  
叫びながら変な方向に投げた奴だよ。  
あいつは確か野手だっけか：そんな事を  
言っていたな」

「ほお…あの方もそうですか…あと何人が  
集まれば野球組を作れますな。」

「今でもキャッチボールぐらいは出来ますよ。」

「またもやミゲルが仲間外れになった時、  
特三号戦車の隣で煙草をふかしたマツキンリー  
機長が近くにあった井戸で汲んだ水で顔を  
洗う草文中尉に対し説得を行っていた。」

「……と言う事は…ここは日本でもなくて  
アメリカでもない…日本だけど外国だと？  
しかも今は我々が生きていた時代から  
六十数年も後だと？」

「さつきからそれを八回言っています。  
そろそろ状況を飲み込んでください中尉。」

「どうにも頭の歯車に使う潤滑油が切れた  
人間に状況を説明することには骨を折る。  
マツキンリー大尉はこのヴァカな中尉を  
説得させるのに一番大切な事柄が伝わっていない  
事に半ば苛つきさえ覚えていた。」

「だって後ろに日本家屋があるでは  
ないですか？だったら此処は日本なんだよ！」

「じゃあアンタ等が演習していたって言う  
場所はどこなんだ！！」

「富士山だ！」ってそれを七回って……あゝ」

「なにが「あゝ」ですか、ようやく分かりましたね？つまりはそう言うことなのです。

飲み込めたでしょうか？」

八回も同じことを繰り返せば人間誰でも

物事を理解するものだ。もしもそれ以上

繰り返しても理解しないようなら腰の拳銃で

車長の頭部を撃ち抜き「離陸時にはその様な

物体とは遭遇しなかった」とアレックス少佐に

でも伝えようと考えていたがその必要は

無いようだ。それに今ここで銃弾を消費したら

この先いつ補充出来るかも分からない。

人里の命蓮寺に行けば同志に会えると聞いたが

彼等の銃弾が現代の規格に適合するかも分からない。

「理解はしましたが：貴官達はあの屋敷の人達に

教えてもらったのですよね？私達も現地に会いたい

もんですよ。」

「此処から少し移動した所に人が住む里があるそうだ。

そこに貴方達と同じ時代の人があるかもしれ……来たわあ……」

戦車を留めている倉庫跡地から伸びている一本の細道から

二台の自動車が見える、一台はフォードのGPW、

俗に言う「ジープ」だ。一九四一年にお目見えしたこの

車両は高い機動走破性から偵察や物資輸送、果ては

M2ブローニング機銃等に乗せた武装型が登場するまでの

大ヒット軍用車両である。その特徴的な直角フォルム

は二五メートル先からでも確認は容易なのだが問題はもう一台の方だ、大尉から見ればその外見はやけにボロ臭い。レトロと言えればそれで終わりなのだがその車はやけに音が五月蠅く、レトロな雰囲気をも完璧に阻害していた。

「おお、アレはくるがね四起じゃねえか!!  
間違いない!!」

草丈中尉が顔を真っ赤にしてはしゃぐ

「この本には九五式小型乗用車と書いてありますね。日本陸軍で正式採用された小型車で我々のジープ、ドイツのバケツ車キューベルワーゲンに当たる位置づけだそうです。二車と違って陸軍の機械化が遅延したおかげで大々的な運用も見送られ、総生産数は四八〇〇台で終わったそうです。カタログスペックではV字二気筒の空冷エンジンで……」

パメル少尉の一人兵器図鑑朗読会を遮るように二台の軽車両は大尉達の目の前で停車する。

ジープは一人の海兵隊員が運転しており、奥のくるがね四起は図鑑の写真と違い幌を畳んでいた。ので操縦者が日本兵であるのが見えた。

「あなたがここの最高責任者のジョン・マッキンリー大尉ですね？アレックス少佐から報告を承ったので現在の状況を説明に来ました、自分の名前はボブ・キーナンであります。」

「了解した。しかし何だ、なんで階級章を外しているんだ？」

ボブと言う海兵隊員の階級が付いていない戦闘服を見た大尉はまず最初に特殊任務中に迷い込んだものだと思っていたのだが回答は少時的を逸れていた。

「あ、その件は今からお話します。」

その海兵隊員は今から話すとは言わなかった。それぐらいの事なら直ぐにでも言えるのに、何故に理由を洩るのだろうか？

彼はジープの中から一つのメガホンを取り出しその場に居るクルー達に向けて話始めた。

「えゝそのおゝ人里から来た者で御座いますが。誠に言い憎い事実を伝えねばなりません。」

彼のメガホン声にクルー達が振り向く皆それぞれに顔を合わせ（なんだ？なんだ？）とジープを凝視する。

「えゝと」

ボブはジープの助手席から一冊にファイリングされた書類を取り出し中身を確認する。

「5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . .」

今度はいきなりカウントダウンを開始すること成す事が意味不明だ。

「 . . . 0 ! ! えゝ現在時刻を持って、ここにいる現行米空軍の

皆さんのご実家には殉職届けが配られました」

「……な、なんだってー！！！！」

クルー達は海兵隊員が叫んだ全員の死亡通知宣告に

一瞬は戸惑ったがある程度は理解が出来た。

俺達は死んだ事にされたのか…

実際は「神隠し」以外の何物でも無いのだが海上での失踪は大体が墜落だと見られるだろう。まして破片すら発見されなければ捜索隊も直ぐに諦める、その二点を基にすれば軍部に残る仕事はただ一つ「死亡扱い」それだけだった。



第二十話「突然な真実」(後書き)

またしてもリハビリになりそうな話ですorz・・・  
かなり見にくいかもしれませぬ。

感想等はお気軽にどうぞ><

第二十一話「小さな一歩と大きな一歩」(前書き)

三月一九日

午前八時二五分

八雲家敷地内倉庫郡跡地

オリ設だらけに注意してください

## 第二十一話「小さな一歩と大きな一歩」

「俺達が戦死（殉死）扱いだと！？ふざけんな！！」

「アンタの目の前でこんなに元気になっているんだぞ！！」

「何かの間違いだ！！証拠を見せる！！！！」

「あんまり呆けた事を抜かすなよ海兵隊員、幾ら同じ米兵でも今すぐに撃つちまいそつだ。」

フォードジープの座席に立つキーナン海兵隊員にクルー達が怒声を上げてジープに詰め寄る。十四近い人数が一気にジープを囲み込み、纏わり付く人々が大声を上げる光景は太平洋戦争終戦時にドサクサ紛れに日本を奪おうとしたソ連を押しつけ悠々と日本へ来た米進駐軍のジープにひもじい子供達がチョコレートを貰おうとせがむ

「ギブミーチョコレート」を髣髴とさせた。

しかしジープに立つ海兵は怪訝そうな顔で胸ポケットからチョコレートではなく丁寧に折り曲げられた一枚のポロ紙を取り出す、そしてその紙を勢い良く大尉の目の前に見せ付けた。

「自分でもねえ、こんな事は信じたく無いんですよ大尉。

まさかここに来る前に自分の戦死届けの複製コピーが届いているだなんて……現実では私がいなくなったことになっても実際には自分の体と魂にも何も変化も無い。之を日本では「神隠し」だなんて言うそつです」

そう言いながら海兵は大尉にポロ紙を読むよう勧める為に

ベラベラと紙を前後に揺らす。

そのまま見ても大尉にはタイプ文字が陽気なダンスを  
しているようにしか見えないので紙を破かないように  
タイピングよくひったくり、数秒の黙読。

虫食い穴だらけの紙に書かれた文字を読むのは  
下手な文法試験よりも手ごわいもので、大学での文法成績が  
Aマイナスだった大尉でも半分以下しか読むことが出来なかったが  
この紙がどんな物か、何の用途の物かぐらいは馬鹿でも判断できる。

「……なんか、色々と自分の部下が口汚い言葉を掛けて  
しまったようで申し訳ない…まさか貴方があの硫黄島で戦死  
と書かれているだなんて…。」

大尉が見た書類は目の前にいる海兵が一九四五年二月一九日の  
IWO JIMAでMIA（戦闘中死亡）だと身内にとってはとて  
も痛ましい  
文字が打ち込まれていた。

「あの時は相当びっくりしましたよ。上陸したときは何にも抵抗が  
無かったから皆でピクニックをしている感覚だったのですが…  
いきなり自分の真上に砲弾が落ちてきたと思ったら人里の外れ道に  
軽装の日本兵と仲良くぶっ倒れていたって皆は言っんですよ。  
それにその日本兵は「わしゃ内地の在郷軍人だべ」としか言わなく  
て…」

「まさか…地獄の硫黄島かよ…まさか現役の本物に会えるなんて凄  
いな。」

クルー達は目前にいる海兵隊員が硫黄島から飛ばされたと聞いた

途端に目の色を変え、口々に先の無礼を謝罪し始めた。

「私なんて一度も戦闘には参加できてないですよ。見たのは艦砲射撃で

島の形が変わるのだけでしたし。まあこんな事を話しても暗くなるだけですからね、移動しましょうか。人里の米軍居留地には自分みたいのがもっと思いますよ?」

「そう言えばそうだったな。総員再度搭乗開始、直ぐにでも飛ばすぞ。

それとそのジープはこちらで格納しましょう、貴官も我々の機にお乗り下さい。あと日本兵の件ですが如何なさるのですかね?」

大尉は先ほどから蚊帳の外で話し合う戦車兵三名とくるがね四起を駆ってきた兵士一名が話し合っているのを見ていたがどうにも今後が気になってしまつようだ。

「彼等は日本軍の作業機を要請したそうなので後々日本軍居留地に来るから心配は要りませぬね。出発するなら早い内がいいです、これから風が強くなりますよ?」

「そういえば昨日も寒かったですね。陽が出ている内に飛ばしますよ」

海兵の助言に反論することなく従い、大尉は機体の搭乗口へと

向かった。

ここで舞台はガラリと変わり、妖怪の山へと移すことにする。

昨日、射命丸文に無理矢理させられた人間達への密着取材を終えた犬走椛は九天の滝の裏側にある白狼天狗らの詰め所に一台しか設置されていない仮眠ベッドを占領しきってガアガアといびきをたてて寝込んでいた。

「うゝそれは違いますゝ 鞘じゃないですゝ 尻尾ですうゝ引つ張つたちやゝだめえゝゝ うぎい！痛てててて！！！！」

倉庫跡地に降りる際に座席のシートベルトに尻尾をはさんだ痛みが今更になつて椛に夢と言う媒体を通し襲いかかる。

そのズキズキと痛む尻尾を引つ張られる夢を見ている途中で目を覚ました椛は上体を器用に起こし、近くにある壁掛けの鏡を見て頭髮の乱れを確認する。

やはり鏡は便利だ、右と左が逆になる以外は嘘偽り無くありのままを見せてくれる。寝癖を一通り直した後は刀掛けに掛けている自分の太刀の鞘から本身を抜く。

その刀掛けにも十振り近い刀が掛けられるのだが現在は椛の常備刀と予備の刀身を合わせても四ゝ五振りしかない。

山の産業革命以来から河童達の工業レベルが各段に向上し、手作り重視のマニファクチュア生産方式からベルト生産レベルまでに

進化しており。手作りの為に高価で木っ端天狗では買えなかったり十人隊長に昇進しても受領される事は無に等しかった

ウィンチェスターレバーアクションライフルの廉価販売が始まった途端に遠距離戦闘を好む白狼天狗達がこぞつて

買ったので白狼「刀」と言う方程式は脆くも崩れ去っている。

その中でも椋の太刀は白狼天狗の使う武器の中でもかなり古臭い域に入るのだが今でも隣の銃架にはレバーアクションライフルの中に数挺の銃身全体が錆びた元折水平二連の散弾銃等が掛かっている

がそれは椋が非常用に買っておいたりサイクル品である。

犬走家は幻想郷に来る以前から天狗族の剣術師範役を輩出する家系だったのだがこの所数百年、生まれてくる子が全員女子だったが為に

師範跡継ぎを担う者がいなくなり墮落してしまつた一族である。

その剣術が「走」が付く家の特色から「どんな角度でもいいから敵を翻弄し突き刺せ」と言う概念と術の確立が平安初期だった為に伝わる刀は鋒両刃様式である小烏造の太刀である。

ハバキ元から中腹までは普通の片刃の太刀だがそこから

先の物打ち付近から切先までは両刃の刀となっている。

先端が両刃なので敵と対峙する際はどの角でも突き刺す事が可能なのだが突き刺したその後の事は何も考えておらず。

剣術としても酷評を受けたのも衰退の一因だった。

自分の痩せ太刀もこの鏡のように輝いてくれれば良いのにと太刀をまじまじと眺める。

彼女の太刀は前四代から受け継がれており（それまで折れなかつた）

自衛隊出征の際に貰い受けた太刀「冥土」（現世の小烏丸「天国」

の裏打ち）であり、名刀の派生なのだが度重なる（四百年以上に渡る）

酷使により刀身は曇りを帯び、幾ら磨いても光を取り戻すことは無いのだった。

「ういお？手紙??」

詰め所のタイムカードで非番である（それ以前に元から全員の名札が無い）のを

確認し机に置かれていた自分宛の手紙を手にとった。

まさかこの時に届いていた手紙が椋の人（？）生を変える大きな  
一歩

だったと言う事はまだ本人すら気づいていなかったのだった。



第二十二話「心の轍」(前書き)

三月一九日

午前九時二十三分

九天滝裏詰所事務室内

オリキャラ、二次設定多数。

## 第二十二話「心の轍」

「キヤアーーーーなにこれえー！！！！」

九天の滝裏詰所の事務机にある郵便受けに置かれていた  
椀宛の手紙は彼女を絶叫させる内容だった。

「……何だ！？椀班長！！何があつた！！！！！！」

隣部屋の給湯室で談話していた非番の白狼天狗達が  
椀の叫びを聞きつけ、椀の居る事務室兼仮眠室に駆けつける。

駆けつけた白狼天狗はそれぞれ身近にあつた武器になるような  
物を持って「事務所」と書かれた表札のある扉を

丁寧に（後で直すのは自分達だから）開ける。

全体で四人が駆けつけ、先頭の犬走班副長の

コマサキ スミレ  
粕崎董は事務机に突っ伏したまま動かない

椀を確認し、ホルスタから引き抜いた右手のペッパー・ボックス拳  
銃を

後続に持たせるや直ぐに椀の上体を引き起こす。

董が見た椀の顔は放心状態であり、手には一通の手紙が握られて  
いた。

「これが班長の平常心を揺さぶった根源か？？えーつと？？

「大天狗人事会」？何だ、班の詰所異動って事ですね？？」

手紙が入っていた封筒を見た董は送り主名が「大天狗人事会」と  
書かれている事に気づいた、班長はこの送り主さえ見ていれば  
ここまで驚く事は無かった筈なのに。班長は少し抜けている部分があるから副班長の私が頑張らなきゃいけないのに

その私には異動宣告の手紙すら来ないのね、と呆れていた。

「……んで？異動部署は何処ですかね？？……エエー！！！！  
そんな事があつて良いのかい？良いのかい？？」

董が見た物は只の詰所移動ではなく、まず天狗社会では有り得ない「人事異動」だったのだ。

「どうしたのですか副長！？そんな大声を出すまで  
凄い件なのですか？？」

未だに部署移動の事だと信じていた残りの三名も  
董の驚きに同調し声が動揺している。

「だ……だだだ……読んでみなよアンタ達……もうびっくりだよ  
……」

驚きを包み隠さない董が三人に差し出す手紙を持つ手は  
上下左右を小刻みに動かしていた。それを例えるなら  
冬の夜に外を薄着で歩いた時に来る手の震えにも似ているだろう。

「え……じゃあ読みますよ??」

「異動辞令・以下四名ノ警備隊員、印刷士ヲ機動報道部二等記士ヘノ  
昇格ヲ認メル。

壹・大蝦蟇池警備詰所十五人隊長、ヒキメ暮目。

貳・天狗里総本部印刷士長、ツマクロ妻黒。

参・河童工場出張印刷所二等印刷士長、マキハヤ槇葉矢。

四・九天滝裏警備隊五人隊長、イヌハシリ犬走。デアル、以上。」  
「……え……これって???ましかか!??」

難しい文字を読みすぎて最後辺りの言葉の呂律が回らなくなった一人が

董に手紙の意味を問う。実際は彼女自身も意味はそれなりに分かってはいたが

やはり誰かに説明して貰わなければ飲み込む事は出来ないのである。

「わかるでしょ……??ここで放心してるこの椀班長が鴉天狗達と同じ

仕事に就くって事だよ!!!」

董の声は忽ち詰所中に伝わり、意味を把握した警備当直だがサボタージユ三昧

の天狗たちは暇つぶしに食べていた饅頭や団子を喉に詰まらせた者や

飲んでいた茶を気管に入れてしまいむせた者もいた。

間接的な被害者達が事務所に顔を出した時には椀も意識を取り戻し、改めて

手紙の内容を他者からの口頭で説明を受けていた。

「やっぱりこの話を蹴ることは出来ないのですか??」

椀にとってはこの出世チャンスを棒に振り、詰所のこのずっと平凡な毎日を

送っていたのが本音であった。第一、文さんみたいな仕事をこなす

人間にはなれないと彼女は金輪際思っていたわけで…

「あんだ馬鹿あ???こんな出世話なんて聞いた事ないわよ!??」

「他の白狼はむさい男共だが椛は女子だからの、人事異動するケースは  
無きに等しいしな。それに此処から出世天狗を輩出するなんて  
我々の誇りだぞー!!どうせならその異動チャンス  
俺にくれってんだ!!ガハハ。」

椛の先輩である男の白狼天狗、ボコケ戊國詰所長は天狗社会創世期に  
九天滝裏への詰所設営を天魔に進言した程の有力者だったのだが  
白狼ごときが調子にのるなど大天狗、鼻高天狗、閣僚鴉天狗達が  
天魔に彼の虚偽の噂を流し、天魔近衛官から今の位まで降格されて  
いる。

しかし九天の滝裏側にある詰所は「来るべき現代戦」の方法を持  
つ  
やたらめたらに針や札を高速で投げつける巫女や魔法使いが通るル  
ートを  
予想していたと言う評価を貰っている(しかし戦闘ルールを理解し  
ている  
者が新し物好きな椛しか熟知しておらず、直ぐに突破されている)。

「しかし戊國所長?、自分がこんな出世をしたら後で「ああ妬まし  
い…」とか  
言われませんか??大丈夫ですかね??」

どうやら椛は自分の出世で有能な人物の出世を妨げてしまうかも  
知れないと恐縮していたのである。

「あのなあ椛：俺達がお前にそんな嫉妬心を抱くと思つのか?  
俺はお前をガキの頃から知っている。無理矢理大天狗達に家族から  
引き離されたお前が来たのが降格真つ最中の俺が教官の訓練所だつ

た。

あん時からお前は誰よりももう泣き虫で泣き虫で…最初の数週は宿舎からお前の泣き声が止んだ日なんか無かったもんな、でも元剣術師範の家系だけに剣術の成績だけは良かったのも覚えてい

る。  
練習試合で大天狗の子をお前が負かした時なんか親の奴等が来て大変だったんだからな…。俺を父親の様に慕ってくれたお前には剣術を

続けると言いたかったがお前はいつの間にか競技決闘の道にはまりだしたのを止めなかつたんだぞ？覚えてるよな。

アレはお前が生きる道の邪魔をしたくなかつたんだよ、身寄りの無い俺を家族同然に受け入れてくれた詰所の皆も全てお前が纏めてくれたも同然、椀には天狗たちには無い人を惹き付けさせる何かがあるんだ。だから大丈夫、俺が保障するk」

その時、彼が全てを言い終わらない内に詰所の裏口から鴉天狗一名が  
づかづかと事務所の中まで入ってくる。

「お〜い、椀い〜、迎えに来たぞ〜。アンタは私の部下にあたる機動報道部第四支部三等記士になるんだ〜」

白狼達の椀を励ます言葉の途中に意図的としか言えない横槍を突いてきたのは射命丸 文である。

「あ、迎えが来ましたね…椀さん、準備しましょう。」

「う………うん…！」

戊國の話を聞いた椀は異動の話を受け入れた様だったが、彼女の

宿舎に戻る時に所長から見た椛の横顔は何処か物悲しげな顔をして  
いた。

今日、また一人の子が家族から引き離される事になるのだった。

第二十二話「心の轍」(後書き)

なんかggggggです>>>

眠いです>>>



第二十三話「Private space and White isosceles

Private space 個人的空間

---

White isosceles right triangle

白、直角二等邊三角形

十八日の夜間の内に大天狗人事会から突如届けられた人事異動要請に応え、椛は宿舎に置かれている自分用の荷物を纏めていた。

「えっと…文さん、一応の荷物は袋に入れてみたのですが、どうやらもう少し小さい袋の方が良いかもしれません…。」

椛が背中に背負っている雑嚢は容量的には炊事用の釜を二つ入れても余裕が残る程の大きさなので元から荷物が少ない彼女にとって は内容物より雑嚢の方が負担の掛かりそうな荷物に見えた。

「そうね、袋が大きすぎたら中の物に擦過傷とか付いちゃうからね。でも、その中には何が入ってるの?？」

「はい、まず替えの水干と袴が二着と足袋が三対、手拭いが五枚に 驚甲櫛が一つ。矢立と唐墨…。あとは雑物だらけですね。あ、それと…。これです。」

荷物の中に手を突っ込み、一つの直方体の形状をした箱を取り出す、取り出したそれは銃架に掛けてある水平二連散弾銃用の真鍮製三十番（三十ゲージ）が二十発収納している紙製弾箱だった。

「…え？、お土産にでも持っていく気なの?？」

「いや…一応必要なあ…だと思ったのですが…やっぱり要りませんよね?？」

「当たり前よ、椛はこれから報道部に入るのにどうして武器が必要

なのよ。」

「そ、そうですね！……でも、なんで私が報道なんかにも異動なのですか??。」

彼女はお迎えに来たこれから直属の上司となる射命丸 文に今回の異動の真相を尋ねる。白狼達で憶測するより当人達に聞いたほうが早いと言う事に今更ながら気づいたようだ。

「ああ、言つてなかったわね。今回の異動は天狗社会では頻繁な「降格」では無く全く逆の「昇格」なのよ。私の新聞に書いてなかった??向上した河童工業力に対して天狗経済の停滞期を危惧したのか大天狗と鼻高天狗達が其々の種族に欠如している点を補い合うように仕官制度を施行しました、つて。読んでないの!？」

「え!?!?そうだったんですか!?!じゃあ今回の異動が第一号、もとい第一陣ですか??(まずい…文々。新聞の号外は戊國所長が読まずに薪の火付けに使っているなんて絶対に言えない。)」

文の言うとおり、此処最近の天狗経済は河童達に比べると停滞期に入っていた。職務を首にされるとまではいかないものの、各々の仕事に対する士気は前例を見ない落ち度を記録している、その中でも九天の滝詰所への鼻高天狗達の事業仕分けによる哨戒任務の廃止(有事の際の出動のみ)は白狼達の生活を墮落させる結果となった。山伏天狗達も仕分けによる印刷部数の制限により暇を持て余す者が後を絶たなかった。鴉天狗も発行物が篩いにかけられ、天狗新聞の幾つかは廃刊となっている。

そのように混乱した経済を立ち直らせるべく試験的に他の種族から数人を引き抜き、他の職場で働かせると言う実験が開始されたのだった。

「もつと言えば大蝦蟇池詰所の蟄目も私の部署だから仲良くしてや  
つてね。アイツは確か…この方策の原型を提案した奴らしいけど、  
年は椛と全然変わらならしいね。それに隣の第五支部には本部勤  
めの妻黒。あの人は印刷士長だからって感じが強いわね。あとは河  
童の里出張所から第二支部へ配属の二等印刷士、槇葉矢。活版印刷  
のプロでね、文々。新聞を印刷してもらう時に良く会うからちよっ  
と顔見知りだね。」

「はあ…それで、私は何で報道部に…。」

「椛は洩矢神社の騒動で大活躍してくれたじゃない、直ぐに突破さ  
れてたけどあそこで足止めした上に報告してくれなかったら私は滝  
に間に合わなかったし手加減もなしに紅白巫女をぶつ潰していると  
ころだったもんね!。」

「それだけで異動なんですか!？他の方々と差がありすぎますよ!  
?。」

「スペルカードール、やっぱりコレが一番の要因ね。他の妖怪達  
へ取材申し込みに行った場合に門前払いされるか、攻撃されたら元  
も子もないでしょ?。天狗の里以外で武器を使用したらスキマが黙  
つていないし。火薬の粉で空も汚れる。だから清く正しいこの射命  
丸文が鴉天狗きつての特派員をやってるんだけど、それでも里への  
取材には人手が足りないのよね。だから交渉用の戦闘が出来る天狗  
が必要だったの、それで大天狗達から椛に報道部への召喚要請が出  
されたってわけ。わかる??。」

「ああ…なるほどですね!?!?!。」

「分かった??じゃあ準備を再開しなさい。正午までには新しい部屋が用意されてると思うからそれまでには支部に着かなきゃいけないからね。」

「新しい部屋ですか!?個室!!やあつたあゝ!!生まれ初めて初めての個人的空間の確保ですよゝ。凄く嬉しいのですが!」

「はいはい、アンタの言う個室だから口より手を動かしなさい。研修用のあばら屋になっちゃうけどね。」

「……え?あばら屋?バラック??すきま風ビュービューですか???」

「ほら、手を動かしなさい??」

「は、はい……」

天狗の異動職務試験先遣隊の一人が先輩と荷造りを行っている時、魔法の森では二人の青年が一人の傷ついた妖怪少女の怪我を治療するため、少女を陽の当たる空き地から木陰に移動していた。

「やっぱり三角巾は肘後ろで結ぶんだよ!!それじゃあ腕が垂れちまうって!!」

「うるせえ!さっきから作業を見てばかりでお前は何もしてねえじゃねえか!!この結び方なら大丈夫だって、俺の曾祖母が言ってたもん!!」

「フィブスター家は俺が小さい頃から何か可笑しいと思ってたが此処まで来ると失笑の域だぞ??笑ってやろうか?笑ってやろうかい

「??」

「てめえ、フィブスター家を笑うと痛い目に会うぞ!!今に見てやがれ!!」

「ねえねえ……私の耳の前で大声出さないでくれ……?それに其処から動かれると日差しが眩しい……た……食べるよ?……」

吸血鬼ほどでは無いが日光に弱いルーミアの脅迫と要請は二人の低レベルな口喧嘩によって聞き入れてはもらえなかった。

「ね……ねえ……その頭を動かさないで……右足が焼けるように痛いんですが……」

「うるせえ!!黙ってる嬢ちゃん。ちよつと忙しいんだ!!」

「コイツが俺の家系を侮辱しやがって、たかが三角巾で折れた場所を固定しようとしただけだろ??」

「言つて置くがなあ、それは三角巾じゃねえ!腕を通さなきゃ白布のナプキンと同じだろうがよ!執りあえず作業が変われ。俺がやる。」

「お……おう……」米国空軍エンジニアのジェフリー・フィブスターは持っていた白布をルーミアの首から一旦解き、布を同空軍エンジニアのジャック・ハフマンへと渡す。彼は手馴れた手つきで三角巾をルーミアの首にかけ、肘裏の結び目と首の結び目の硬度を確認した後、ルーミアの上体を起こす。

「おはよう、お嬢ちゃん。ご機嫌いかが??」

「いや…さつきから私は起きてますけど？何？この…布、腕が動か  
せない。」

ルーミアは今までに見たことも無い真っ白な布とそれに染みしてい  
るアルコールのツンとした匂いに驚いていた。ましてその布に片腕  
の動きを制約されているとなればもつと驚くだろう。

「ああ、それは君の腕がおかしな方向に曲がってたから少し固定さ  
せてもらったよ。骨折かもしれないからね。」

「こっせつ？？…わたしたち妖怪にはそんな言葉はないよ〜？  
？」

「へえ？妖怪？何かは知らないけど見かけない服をしてるね。近世  
ヨーロッパみたいだ。」

「てめえ近世ヨーロッパなんて言ったこと無いのによく言っぜ、あ  
んなガキを口説いてもなにも始まらないって…始まるのは危険な  
愛か…いてっ！…！」

ジャックがルーミアに現在地の把握に利用した前座にケチを付け  
ていた木に寄りかかっていたジェフリーの頭に何かがぶつかった。  
彼が投擲物のそれを拾うと丁度いいサイズの小石でもなく、木の棒  
でもなく、それは一発の小銃弾だったのだ。

「おい…ジャック？小銃弾って薬莢ごと飛んでくるもんなのか？  
？」

「はあ？てめえカートウーンの見過ぎじゃねえの？そんな訳無かる

「うもん？」

ジェフリーが持っていた小銃弾は形状と劣化具合から見ても新品ではない。口径も凶りたかつたのだが手元には定規も杓子も無い。それでも大まかな企画だけは推測できる。

「こりや六・五ぐらいか七ミリだな。火薬も湿気てるから使い物にもならねえ。捨てても怒られないよな??」

ジェフリーは木の幹に寄りかかっていた時に左側頭部に当たったのだから左の茂みに返してやろうと背の低い若柊が生い茂った場所に銃弾を思い切り投げ込む。丁度茂みの中に銃弾がすうっと消えた時、

「いてえ!! すごい!!!!」 「え!? え!!!! うわああああん!!!!」

茂みの奥から誰かしらかの幼い二つの女性の声がした、ジェフリーが気づいた時には一人の声が泣き声に変わり、もう片方の声が聞こえなくなっていた。

まさか腹話術ではあるまいと思いつつも自分が投げた弾が頭部に命中して貫通でもしていたらどうしようとも感じながらジェフリーは急いで茂みを掻き分ける。

若柊の生まれたての棘が手のひらに僅かな抵抗を見せるも米空軍工ビーターに支給されるケブラー地手袋の前には成す術もなかった。

彼が茂みを掻き分け終わった時、そこには漫画のようなたんこぶを押さえた蒼の短髪で青いワンピースの少女とそれを見て大泣きしている碧髪のサイドポニーが良く似合う少女が座り込んでいた。

髪の色以外は世界中何処にでもありふれた風景なのだが今回彼が



鉢合わせた場面には季節が冬ではあるが暖かい今日が一瞬にして幼少期に旅行した真冬のモスクワにも勝るような寒さが追加された。

第二十三話「Private space and White issosco

改行に少し改良を加えました。故に全長が縮んでしまいました><

第二十四話「ヒトと妖精と妖怪と」(前書き)

三月一九日

午前十一時四十八分

魔法の森内部

## 第二十四話「ヒトと妖精と妖怪と」

「ああもう泣くなつてば、状況からして君には害も何も無かつたんじゃないか??そしてその隣の子は何故泣かないんだ??」

「うえ…だ、だ、だつてチルノちゃんがああ〜」

「いや、痛いんだけど、一身上の理由でえ…。」

雲ひとつ無い澄み渡った空気と暖かい日差しを提供していた空はいつの間にか

薄い雲に隠れてしまい、冬特有のする寒い曇り空が広がっていた。

幻想郷全体では

少し風が吹き始めた程度なのだが、とある場所のみは極寒日並みの気温を記録していた。

しかしその事を知るのは人間二名、妖怪一匹、大妖精二匹で終わったのだつた。

「どうしたどうした、なんでこんなに寒いんだ…って何だよこの二人は、まさか増えただと!?!」

極端に寒冷化した天候とジェフリーが消えた方向からの泣き声、そしてそれに続く彼のどよめき声と

三つの異常を感じたジャックがジェフリーの元へと歩く。彼の後ろには麻痺が完全に取れていない両足を小刻みに動かしてよちよち歩きをするルーミアの姿があつた。寒さに凍えた灰色のフライトスーツを纏うジャックの固い歩き姿と黒服を纏い彼の後ろをよちよち歩くルーミアの姿はさながら南極ペンギンの親子行進に繋がる物があつた。

「ば〜か、明らかに違うだろ。その子は金髪だが少し亜細亜系の顔立ちだしこっちの二人はあからさまに欧州系だ。それに何か知らんがこっちの二人は羽根みたいのがくっ付いて…る…まあ名前さえ聞けば何とかなるんじゃないやねえか？なあ嬢ちゃん達、お名前は何だい？」

「私はルーミア。夜行性の妖怪だよ。」

「わ、私は…ええ〜つと…何だっけ…」

「アタイはチルノだよ。幻想郷最強の妖精だよ！」

「妖精ピクシーだつて？でもルーミア、チルノ、後の一人は分からないが名前は欧州系だな。それに、チルノと言ったっけ？此処は「げんそうきょう」って言うのかい？」

二人にとっては聞いたことも無い地名だった。まず英語の発音にもこの様な地名は発音できない。

仮に西語、伊語、露語だとしても発音は見当たらない、近いものは亜細亜圏の言語だろう。

「なあジェフリー、俺はそんな国を聞いたこともないぞ？第一に考えてみる。俺達はあの機体ごと演習前にバミューダから消え失せ、此処の空に出た。そして一悶着あった後、今度はレーザーやらデカイ曳光弾を発する魔法少女。その子は自らを人間とは言わなかった。それに目の前の子は氷の羽根、昆虫みたいな羽根を付けている、彼女たちも自分達を妖精ピクシーと言っていた、お前が投げた銃弾もそうだ。あんなに粗悪な造りの七・七ミリ薬莖なんて今じゃ何処の国でも使っちゃいないぞ。いやまず女の子が空を飛ぶこと自体がおかしいっ

て……」

「空を飛ぶことなんかアタイ達妖精じゃ普遍的要素の何物でもないよ？逆に飛べなきゃ悪戯の時に逃げられないし、何より飛び回って遊ぶのは楽しいよ！！でも最近は何で飛ぶと網に捕まるって言うか……」

「夜の森を飛び回るってのも楽しいよね〜鳥とか眠っちゃうから出会い頭に衝突とかもないし。」

ジャックが今までの飛ばされる前の世界との確実な相違点を挙げている最中に妖精と妖怪の二人は空中浮遊はこの世界ではメジャーな行為だと教えてくれた、そして里の存在。聞けばどうやら此処から二キロ弱だと言うので

ルーミアの怪我を医師に診てもらうがてらに案内してもらおう事にした。

霧が出始めた細道を進む中、二人はこの森がかなり危険な物だと妖精達に聞かされた。何でもこの「魔法の森」は多種多様の化け草群生地であり、この時期は特に孢子のばら撒きが激しくなるそうだ。常人なら入森から数分で嫌な汗が滝のように出てしまい耐えられなくなる、しかし自分達は何十分（実際は森内で就寝もした）も体が持っているので森内の妖怪たちも簡単に手を出さないらしい（普通の人間なら確実に食べていたらしい）。

「それで、俺達を喰わなかったのはその為……って訳か。だろ？ルーミアちゃん。」

「いきなり「ちゃん」付けかまして来たわね。まあ筋肉質の人肉はやっぱ筋っばいし……焼くなり煮るなり

すれば食べれると思うんだけど何せ狩は月夜だからね。手元がよく

見えないのよ。一応目は良いんだけど夜の目だけ近視みたい。」

「じゃあ俺達は喰わないのか、そいつぁいいや。なあジャック？。ジャック??」

「いや……首、負ぶつてると首噛まれてる……俺……いやこれは冗談抜きで痛い、何？犬歯が刺さってる……！」

足が覚束無いルーミアを気遣ったジャックが彼女の足代わりに負ぶっていたのだがジェフリーが彼女に自分達は人食いの被害が無い事を確認した時にはもう既にジャックの首の付け根は彼女の甘噛みを受けていた。

「はへへはいほほはいふはへほ……ふあふあふいはひはいはへへ（食べれない事は無いんだけど……私は嫌いだけ）。」

食べようと思えば何時でも食べる事が出来ると言うのを知らしめた彼女はゆつくりとジャックの首から口を離す。彼の首にはくつきりと歯形が残っていた。

「でもそう言うお肉が好きな妖怪もいるから夕方から夜明けまでは森に近づかない方が良くもね。まああなた達みたいな人間は取って食べていい人間には入ってないし、人里から出なけりゃあんしんだよ。」

二人と一匹が地面を歩く中、妖精の二匹は森の木々の高さより上の高度を維持しながら里までの距離を確かめていた。

「その人間さん、あと数十メートルで里だから、そこで止まってください。」

チルノと言う妖精とは別の妖精が二人と一匹の前に降りてくる、そして彼等に長いボロ布を渡した。

「それでルーミアちゃんを包んで下さい。里の人間は「人喰い」の名残がある妖怪に畏怖します。大した怪我では無いのですが医者に軽く診てもらおう事を考えると隠密にならざるを得ません。」

二人の空軍エビエーターは里の目前でルーミアをボロ布の上に寝かせ、海苔巻の様にぐるぐる巻きにし、二人係りで両端を持ち、医者がいるところまで持ち運ぶ事にした。

「思ったより軽いな。こりゃ抱えて運べるかもしれん。気楽な仕事だな。」

ジェフリーが鼻歌を歌いながら里の入り口まで歩く、それに続くようにジャックがもう一端を持ち歩く。

「黙って運べよジェフリー。こつちが頭なんだから凄く重いんだぞ、急げ。」

人間が高いところから落ちる時、大抵は頭が下を向く。それは誰もが解るように頭の方が足よりも重たいからだ。二人が運ぶ「物体」が均等な重さをしていれば良いのだが中身は人間のような者なので然り。

「じゃあアタイは森で待つてる、先生の所には森へ続く地下道があるから待つてるだけでルーミアちゃんがやってくる。待ち伏せ出来るアタイってさいきよーね!」



「どんな事であれチルノちゃんはあるそこに入れないよ。入った瞬間に里の人々に追い掛け回されたんじゃない命があつても足りないつて。」

二匹が意味も無い会議（既に二人は里に入っている）をしている最中にも二人はとてつもない物を見ていた。

里の建物はヨーロッパ建築とばかり思っていたがその予想は百八十年代逸れ、全く違う建築方式の建物が並んでいた。

「おい、これって日本家屋とか言うのじゃ無いのか？しかも道路は土のままだけ？？人もいるが和服なんか着ちまってるあ。」

後ろを持つジャケットが前歩きながら見る景色は西洋とは確実に違う、例えるなら世界史の教科書に出てきた日本家屋にそっくりだった。建築方式は二階建ての鰻寝床造り、年代で言うならば江戸時代中期な方式だ。途中で里の人々が興味津々に見つめる。その彼等の服装も教科書で見た小袖等の古い日本の服装だ。

「悪い、後ろ歩きじゃ何もみえねえ……あと、一つ質問したいことがある。」

ルーミア袋の先端を持つジェフリーは何故か後ろ歩きを続けている。本来なら担架を使うように前を向けば済むものだろうが既に袋が動いてしまつては今更降ろして向きを替えることも出来ない。

しかし、前が確認出来ない代わりに彼は里の風景よりも遙かにとんでもない事が此方に迫っていることに気付く事ができたのだ。

「な……なんか……お前の後ろから明らかに軍用車つてのが来てるんだけど……アレだよ、キューベルだよ。それになんかナンバーも古い感じだし、乗ってる人も軍人っぽい。仮装パーティーの帰りじゃ

無いみたい……」

ジャックが自分の後ろを振り向くとジェフリーの言っていた事が嘘ではないと知った。此方に低速ながら日本家屋の通りに不似合いなドイツ軍軍用車「キューベルワゲン」は確実に近づいてきている。逃げようか逃げまいか談義する暇も無く二人はワーゲンに追いつかれてしまった。

二人の右を随行するようにドライバーが速度を調節し。助手席の独逸軍兵士が身を乗り出し彼等に話しかけようとする。階級章は付いていなかったが服装と制帽からして下士官レベルかそれ以上かだけは分かった。

その兵士が口から放った言葉は威嚇的なドスを利かした声でも無く、友好的な声で話しかけて来たのだ。何十年も前に本気で殺しあった仲なのにその微塵すら感じられないのに二人はぞつとした。

「やあやあ米軍兵さん。お急ぎなら後部座席に乗っても構わんぞ？ 困ったときはお互い様だからな。」

その独逸軍兵士は友好的な声以上にワーゲンに乗れと言って来た。これは何か裏が有りそうだと思った二人だがそろそろ腕が悲鳴を上げていたので無意識に頭を上下に振っていた。

第二十四話「ヒトと妖精と妖怪と」(後書き)

いつもの通りのGDDGDD具合で御座います……

第二十五話「バケツ車の里巡り」(前書き)

三月一九日

午後十二時三十四分

人間の里・魔法の森境界(西南方面)

## 第二十五話「バケツ車の里巡り」

「んで、その荷物は何処へ運ぶんです？赤札が無いから亜米利加館が英吉利館のどちらだとは思いますがあゝ。それとも紅魔館に食材を運んだ帰りですかね。自分が思うに途中でトラックから降ろされたんですね？」

車体後部の幌を目一杯に降ろし、路肩に止めたキューベルワーゲンの運転手である独逸兵の格好をした青年が奇妙な荷物を抱えた見慣れぬ空軍服を着た二人に尋ねる。

「え！？あ、いや……まあ。この荷物を医者の方に運べって言われて……言われましてね……医者の方を探していたのであります！！！」

ジェフリーが額に嫌な汗を掻きながら彼にその旨を話す。この人が只の仮装好きな人なら安心なのだがもしも本物の旧独逸軍士官ならタイムスリップの成立だ。今度こそ本当に異世界の住人の条件を合格してしまうと思うとどうにも顎が良く動いてくれない。

しどろもどろな回答に眉を顰めた士官はグレーに黒と白のラインを入れた制帽を取る。残念にも髑髏の紋章が入っていなかったもののドイツ人特有の純粹で美しい金色の髪をオールバックにした髪形と戦争映画でよく見る精悍な顔立ちをしており、隣のジャックの強面な顔とは大違いだ。もちろん自分の顔も全然及ばない。

「……まあ我々も今まで言葉が伝わらなくてな。伝わりだしたのは昨日の六時頃だったかな？アメリカ兵達に習ったカードゲームの「ポーカー」とやらをやっていたときに俺の仲間がいきなり日本語を喋りだしたんだ。続いて負け続きのアメリカ兵が喋りだして俺達は

大騒ぎさ。それでもって俺が勝っていた賭けも吹っ飛んでな、折角のファイブカードが台無しになったんだ。んで？医者といつたな？残念だがこの町に医者といえるのは大日本館の関永少佐セキナガしか知らないし、今は確か昨日の言語テロの確認に流し離軍団の設営地に向かっている。いや、その前に何を診てもらうんだ？」

話の中で軽く田舎のカジノをふっ飛ばしそうなポーカーの腕をさらしと言いつつ流した士官は遂に彼等の行動に対しての核心を突いてきた。先の通りに人間の医者が何処かしらに消えているのならもう言い逃れは出来ないだろう。いつその事全部を話してしまうのもアリかも知れないと思い、口を開こうとした時、ワーゲンはサイドブレーキを外し路肩から道へ戻り、走行を開始した。

「もうその中の娘を出してやれよ。すげえ暑そうだぞ？いや〜しかしまあ〜人食い妖怪娘を二人掛かりで里に持ち込むなんざ俺には考えらんねえな。その娘が怪我してるんだったら普通の医者でも関永少佐でも駄目だ。妖怪には妖怪の生態つてのが有る。慧音殿の寺子屋まで飛ばすぞ……ってあぶね！！！！」

流石にボロポケットが暴れだし、「ここからだせえ〜」と言ってしまったのはまずかった。それでバテてしまったのだが士官は憤慨もせず、しかも目標変更までしてくれた。どれだけ洞察力が人並み外れていようと後部座席を向いて街中を運転するのはいけなかった。通りの真ん中で立ち往生していた牛引き大八車に後ろから思い切り突っ込んでしまったのだ。二人は自動車教習所で受けた追突を喰らった時に来る衝撃訓練での模範生になった記憶が蘇った。

ちなみにルーミアはその衝撃で真ん中の席から前列座席の計器版に頭から突っ込んでいる。士官は車のドアを開け、逃げていく大八車に二〜三回怒鳴った後、キューベルワーゲンのフロントバンパーを確認する。彼がそれを確認した後、彼が肩を落としたその様子か

ら何かしらの異常があつたのかが確認できた。

家が中古自動車販売店のジャックが座席から降り、それに続いてジェフリーが頭を抱えているルーミアに車内で待つように伝えた後、車外へ飛び出した。

「あつちやゝなんでこうなるかなあゝゝ綺麗に凹んでるよゝゝ」

士官の言うとおりワーゲンの直線的なフロントバンパーは大八車の下に潜り込んだらしくUの字型に湾曲していた。その容姿は何やら不敵な笑みを浮かべる不気味な軍用車と言う風合いで、勿論修理用具も無い。

二人は修理が無理だと分かるや直ぐに車内へと戻る、続いて士官が運転席に戻り再度エンジンをふかし走行を始める。医者がいるという寺子屋（今で言う学校みたいな物らしい）までの直線道は人気も無く、有ったとしてもこの様なゴテゴテした軍用車を見れば忽ち逃げ出すだろう。

「工具さえ有れば自分が直せるんですがねえゝ士官殿ゝ、トランクとかに入ってますか??」

ジャックが呆れたように話しかける。

「もおゝ第一SSの人たちに見られたらボコボコも確実だなあゝこりゃあゝゝゝ」

士官が頭を掻きながらバンパーの凹みを無理矢理に直そうと考えている。そんな士官が言っていた言葉に少し引つ掛かったものがあるジェフリーが彼に質問した。

「あのおゝ第一SSって事は……ちょっと部隊章を持っていたら見

せてくれませんかね：それに官、姓名も：あ、自分はアメリカ空軍  
トップガン教習生のジェフリー・フィブスター一等兵であります。」

ジェフリーは先ほど士官が言った「第一SS」の言葉に引つ掛か  
っていた。もしもその言葉が本物なら彼はヒトラー親衛隊所属の士  
官と言う事になる、入隊許可年齢は十七歳からなので年齢は確実に  
それ以上なのは確かなのだが、只の仮装人だったら恥ずかしいと言  
うこともある。だが彼の頭には後者の考えは抜けていた。この環境  
なら必然的に前者を確かめるのが正解だろう。

「え？あ、はい…これですね。実際こんな飾りですよ？鍵の部隊  
章なんて要らないんであげますよ。それに自分はアリエルト・ラン  
ゲSS伍長です、それに年は確か去年ここに来たときは十七歳の時  
なので今年で十八歳ですかね？」

彼、SS下級士官のリベルト・ランゲ伍長は黒革のコートから一つ  
の部隊章を取り出す。それは盾形の右上が欠け、黒地の生地に白生  
地で鍵の刺繍がされている、それは武装親衛隊第一装甲師団初代指  
揮官「ヨーゼフ・ディートリッヒ」の名前に由来している。部隊章  
も階級章も剥がされ、制帽の髑髏もよく見れば無理矢理外したらし  
く髑髏があつた箇所が異様にほつれている。

「SS？やっぱり本物なのですか？でも何かし何故に階級章も髑髏  
も外しておられているのですか？どうにも自分は理解出来ないの  
ですが…」

「ああ、それは簡単だよ。我々の住処も寢床もその他諸々を与えて  
下さった聖「ヒジリ」殿の意向です。我々の階級などは指揮官と部  
下の違い程度を残すぐらいのレベルにする代わりに命蓮寺の敷地を



使つてよいと言われたのです。勿論、妖怪等の被害が怖かった自分達は今まで国同士で憎み合っていたのをいきなり止めたんです。その際にも寺子屋で教師をやっている慧音殿にも求職所を建ててもらおう等尽力してくれましてね……さあ着きましたよ。」

何もせずダラダラ時を過ごすより、何かをしながら時を過ごすのでは体感する時間が変化する。人はそれを特殊相対性理論と呼ぶがそのような事はどうでも良い。直線道を百数十メートル進んだ先にあつたその寺子屋は里の中央から少し南よりの場所に存在しており、二人が西南の森との境界から入つたのだから距離的にはそれほど遠くは無い。因みに命連寺は北寄りに存在するので二人は未だに寺の全容は確認できていない。

「多分今の時間帯は授業中です。幸い今週は授業参観OKな週なので静かに教室に入ってください。そして授業が終わるまでじっとしている事です。騒いだりなんかしたらあの方に頭突きを喰らうなんてザラですよ。今までに何人のイタリア兵が彼女の頭突きの餌食になつたのか検討もつかないぐらいです。」

キューベルワーゲンの後部ドアを開け左からジャックが、右からは再度ボロ袋を被せたルーミアを抱えたジェフリーが降りる。リベルトに此処で待つように伝えた二人はその建造物の玄関へと向かう。瓦葺と壁板が折り成す荘厳な雰囲気には不似合いな「寺小屋」と微妙に間違えた看板を掲げた家屋の引き戸に手を掛けたジャックはゆっくりと戸を開ける。開けたところにジェフリーとルーミアが土間に入つた所でジャックがピシヤリと戸を素早く閉めた。

三月一九日、日差しが一層強くなつた正午に起きた小さな小さな突撃作戦の幕開けだつた。

## 第二十五話「バケツ車の里巡り」(後書き)

当分戦闘が無くなってしまうのは仕様だそうです……  
評価感想はお気軽にどうぞお願いします。

第二十六話「パラディオン」(前書き)

三月一九日

午後十二時四十九分

人間の里南西区・寺子屋内部

## 第二十六話「パラディオン」

「それでもってその「あきれえ〜す」って言う人が死んじゃった後、この戦争はますますドロドロした感じになっちゃうんだ。ほら、繰り返して。あーきーれーすーっ！」

「『あ〜き〜れ〜す〜』!!!」「『』」

「ほら見る、やっぱり授業してる雰囲気じゃねえか。無駄に大声は出すなよ？それに色々な教育現場を見学するつても俺には必要だしな。しかもやってるのはギリシャ神話みたいだ。」

「授業中、静力二」の掛札がぶら下がる障子戸の中から教師と見られる女性の声が聞こえる。彼女の言った単語をオウム返しに声を出すのは声変わりもしていない子供の声だった。

「そう言えばお前、任期満了したら教師の資格取るんだよな？昔から小さい子の面倒見るとか大好きだったしな。このおかしな世界から戻ってこれればこの世界の本でも書いちゃえよ。」

その障子戸の向こう側で二人の青年が教室内の動きを伺っている。はたから見れば学校内に進入した不審者な二人の内の敵つい方は読まれた単語だけで授業内容を当てて見せた。

別に二人の子供が授業を受けている訳でもないので目標の教師が教室を出る授業終了まで廊下で待つことにした。その間にも彼女の授業は続いていく。

「それで、ギリシア勢はイリオス陥落速度に驚りを見せ始めたとき、「おでゅっせうーす」って人がでっかい木馬を作らせたんだ。イリ

オスを落す為には城の門の破壊と他のとある戦争への参加、それにイリオス内にある像を外に引きずり出す事が必要だったんだ。この時点でその戦争には参加していたからその「おでゅっせうーす」と「でいおめでーす」って人がその像を無理矢理持ち出したんだ。この里で言えば龍神の石像を持ち出すような感じかな？まあそんな事をしたら河童たちも皆怒っちゃうでしょう？同様にイリオスの人たちも怒ったんだ。三つの目標の内の二つが達成された後、自分達だけで国を陥落するのが不可能と思ったギリシア人は付喪神を使って国を落とすように仕向けたんだ。その時に使った神の容器が「トローイの木馬」って奴なんだ。はい繰り返して〜。」

「くくくく」とろ〜いの〜もくば〜!!!!!!」「くくく」

「なんだ？、所どころ可笑しいと場所があるけど結構解りやすく説明できてる先生じゃないか。だろ？ジェフリーって寝てやがる……講義の声はコイツの睡眠導入剤だったのを忘れてたぜ……」

教室とは反対側の廊下の壁にもたれかかったジェフリーは元々オリーブ色だったのが泥だらけで茶色になった飛行服をワックスを塗っていない木の床に同化させながら眠りに就いている。ジェフリーとはエレメンタリースクール（小学校）からハイスクール（高校）まで一緒だったが教室移動には間に合わないだの毎月一定の授業放棄だの昼食の際は「ポテトチップスはジャガイモから出来るんだろ？だったら野菜を食べてるのも一緒だ」が口癖だったのだから何時でも何処でもラグビー部の脳味噌筋肉野朗共に絡まれるのが日常だった。どんなに食べても一向に太らないジェフリーを守っていたら何故か自分だけ体力も腕っ節もあがってしまったのは何故だろう？と彼、ジャック・ハフマンは考えながら女教師の授業を聞いていた。ポロ袋の中身は既にモゾリとも動かず、廊下のと真ん中で横たわっていた。

「そしてギリシアの人たちは自分達の国に帰ったんだ。夜が明けたらイリノスの城壁の外にはギリシア人の姿も無くてそこには木馬がちよこんと立っていたんだ。戦いに勝ったと思っただイリノスの人々は城壁を壊してそれを持ち込んだんだ。戦いが終わったと思っただイリノスの人々が宴会を開いていた時……ええ〜と？確かその木馬が動き出すんだよ。それで木馬は所構わず目からビームや炎をだして走り回ったり飛び回ったりしたんだ。イリノス国は木馬の力によって一夜で崩落したんだ。確かこんな話だったよな??」

「先生え〜弥六の頭が弾けてしまいそうで〜す」

生徒の一人が隣の生徒が頭を抱えているのを見て先生に報告する。やはり難しい話は小さい子供の頭には負荷がかかりすぎたようだ。その中でも廊下にいる大きな子供は教師の講義内容の方に憤りを覚えていた。

どうやら木馬をどこかのイデンのような超合金最強メカのように考えている事が一番気に食わなかったようである。彼は丸刈りにした頭を真つ赤にさせながら障子戸を開ける。最早授業中だろうが関係ない、その致命的な間違いを正さなければ永遠に子供達の頭の中にトロイの木馬が最強メカと言う解釈をもってしまう。それだけは避けたかった。

「違う!!!トロイの木馬はそんな目からビームなんて出さない!!!木馬の中にはネオプロトモス、メネラオス、オデュッセウス、ディオメデス、ピロクテテス、小アイアスが入り込んでその下には中身がバレないようにシノーンがいたんだ!それに木馬の目的はイリノス軍に自ら城門を破壊させるように仕向けるための装置だったんだ!!!内部に入り込んだ後の夜中にその六人が内部から攻撃を行い、山陰に隠れていた潜伏部隊と共にイリノスを滅ぼしたんだ

！」

「ええっ！？貴方は誰え？？？命蓮の軍人！？でも軍人達はこれには詳しく無かったし……何者？？」

やはりいきなり授業に乱入するのは不味かつたとは誰もが直感で解つただろう。この取り返しの付かない事態をどうにかするのはかなり難易度が高かつたが彼は突然自己紹介を始めた。

「え！！！！やべ！？……ゲフンゲフン、自分は昨日付けで此処へ配属された通りすがりの歴史マニアです。上の命令で今日付けの臨時教師として回されてきた次第です。」

子供達は彼を見ても驚く事は無かつた。あの独逸兵が言っていたように最近の違時代各国兵士の増加による外国人への慣れが原因だろう。そして教壇に立つ銀髪の女教師から放たれた言葉は予想を上回った内容だつた。

「あら？意外と頼んでから早いじゃない？あのネズミ妖怪は探查能力のほかに人選能力まで持っているのか？待っていたぞ、今日からお前は私と交代で教壇に立つんだよな、いやいや嬉しい限りだ。」

彼女は教壇を降り、ジャックの目の前へつかつかと歩いていく。背丈が負けた事に少し唸っていたが顔は笑顔を保ち、ジャックの肩をポンポンと叩く。ネズミやら何やら意味不明な単語があつたがこの学校に予備役が来た事に嬉しいようである。

「いやあ〜皆な聞いたか？今日から私以外に先生が増えるんだ。これまで何人も同じような人が来たけど言葉が伝わらなくて駄目だったのに対してこの人は日本語ペラペラだあ。じゃあ早速自己紹介を

……」

教師がジャックを教壇に連れて行こうとした時、授業終了を知らせる半鐘の音が小屋中に響き渡る。それを合図に子供達は席を立ち帰宅の準備を始める。授業終了のチャイムほど子供達が喜ぶ物は無い、他に有るとすれば誕生日前夜か遠足前夜だろう。廊下に横たわるボロ袋と青年には目もくれず一目散に玄関へと走る子供達に教師は声をかける。

「こらこら、「せんせいさようなら」を忘れたのか？。それに先生の紹介は明日だね、みんなは宿題を忘れないように！忘れたら頭突きが待ってるわよ〜」

「はい」の声と共に玄関から全ての子供の影が消えていく。今頃入り口ではリベルトが押し寄せた子供達に動揺している事だろう、戸口からは車に群がる小さな物体が幾つも確認できた。

チャイムの音が一通り鳴った後で女教師はジャックの事について幾つかの質問を繰り返してきた。

「で、貴方の名前は何か？あとなんで貴方は此処の言葉を介する、それに何故それだけ神話に詳しいのか？もう一つだけ聞かああの廊下のボロ袋は何なんだ？」

「はい、自分の…あ、私の名前はジャック・ハフマンです。それと此処の言葉がわかるのは自分でも解りませんが、これは本当です。詳しい理由は私自身も将来教師を目指しているからです。廊下のボロ袋雑巾たちは単刀直入に言えばこの学校へ来た一番の目的ですね。此方からも質問します、失礼ですがまず貴女アナタの名前はなんですか？あとこの場所は一体何処なんですか？実は自分たち、昨日から此処へやってきました。」



無駄の無い質問の全てに少し不気味に思ったジャックだったがコは真面目に答えておこうと思ひ、嘘偽り無く応答した後、彼女に對して質問返しを行った。

「ああ、私の名前は上白沢・慧音。ここで里の守護と人間達の識字率の底上げや教養を学ばせる為の施設を開いてるんだ。この場所が一体何かと問いているのかい？ だったらその雑巾達を起こして私の部屋へ来い、今なら半鐘を鳴らしていた」とても珍しく古い人間も私の部屋でくつろいでいると思うぞ？ 連いてこい。」

そう言つと慧音は踵を返し廊下の奥へと歩き出す。ジャックは彼女から遅れないように廊下のジェフリーを起こし、ボロ袋を脇に抱えて廊下を小走りに走り始めた。

## 第二十六話「パラディオン」(後書き)

ギリシア神話は……嫌いです>><

第二十七話「ハロー、マイアンフェアレディ」(前書き)

三月一九日

午後十三時十四分

人間の里・寺子屋職員室内部

「hello」=こんにちは、今日は

「unfair」=不平等、汚らわしい

## 第二十七話「ハロー、マイアンフェアレディ」

慧音と言う銀髪の女教師に連れられ個室へと案内された空軍エビエーターのジェフリー・フィブスター、ジャック・ハフマンと「この世の住人である妖怪ルーミアは部屋内の椅子にそれぞれが座った寺子屋に後付けしてある無塗装コンクリート張りの室内には窓こそ無いものの天井にはぶち抜かれたような穴が空いているほか、換気扇や給湯器、流しに冷蔵庫や焔炉と言った外見に合わない程のかなり文明的な機材が置いてあり、硬そうなベッドやソファ兼作業机も有る事から彼女はいつもでは無さそうだが此処で寝泊りが可能な物を置いているのだろう。

床に散らばる藁半紙のプリントを拾いながら慧音はグシャグシャになっっているベッドのシーツを直す。

「すまん、少し部屋が散らかっているみたいだ。いや、これは私のせいではないんだぞ!? 本当だぞ!？」

顔を赤らめながらその様な弁解をしても信憑性に欠ける。男なら、紳士なら彼女の言葉を汲んでやるのが礼儀な物である。彼等が珍しげな目で辺りを見回すと今まで気づかなかった人影が一つ、作業机に突っ伏しているのを発見した。

「こら妹紅、毎日毎日授業終了の半鐘を鳴らしてくれるのは有り難いがなあ… 辺り構わず散らかすのだけは止めてくれないか? ? しかもまた魚籠ヒケが増えている… それにお前は人里に降りてこられると高年齢の人には怪しまれるぞ? ? あと今回の半鐘はいつもより三分早かったぞ。」

慧音は木槌を持って寝ている彼女と同じ髪色の少女を起こす。先ほどの鐘の音は彼女が鳴らしたのだろうか。

「え? ? だって魚籠を背負って天井から来ると高確率で作業機のプリントの上に降りちゃうんだもの。それに誰よ、その三人は? ? そ

この妖怪は見覚えあるわね。慧音に何の用なの??」

「ああ、この人たちはな、一人がこの寺子屋の臨時教師らしくてもう一人がその人の連れ、その二人がこの怪我した人食い妖怪を治療して欲しいと車でやってきたのよ。」

ルーミアを溜息混じりにベッドへ移動させながら慧音が彼女に説明する。

「ジャックさん、それにその連れさん。この人は貴方達の仲間を従えた竹林の哨戒隊を統括する「藤原妹紅」その人だ。命運寺にいればちょっとした面識もあつていいと思うんだけど…ご存知??」

面識などない、基い慧音先生とも初対面な筈なのに面識などあるはずがない。

「いや…ご存知ないです…それに我々は昨日から此处に来ている訳で…何が起きてるんです?」

空気を読めなかつたジェフリーが口を挟む

「昨日からこの地に?じゃあ臨時教師つてのは嘘?本当に?」

目を細めて疑いの表情をしながら慧音が言及する。

「なあんだ、人食いを連れた物好きな外来人じゃないか。もっとも今のうちは元の世界にも返れないだろうけどね。」

妹紅が肩をすくめながら呆れている。

「で、でも臨時教師の件は嘘じゃないですよ!? やってやるうじやありませんか!!!!!!」

ジャックは意気込みの表現にシャドウボクシングをやってみせる。ハイスクールでは二人ともKENDOクラブだったくせに、と小声で囁きながらジェフリーがその場面から目をそらす。

「そうかそうか。教師はやってくれるんだな。腹でも空いたろうから昼食でも作ってあげるよ。確か漂着物の鰹節があつたはずだから出汁を採って…そうだ、連れの方は玄関で待っているドライバーも呼んできておくれな、多分腹を空かしてるしな。妹紅はその娘の怪我を診てやってくれ、服の御札でも貼れば治るんじゃないか?」

流しの蛇口を開け、出てきた水を鍋に溜めながら暇を持て余していそうな人々に指示を出す。

「はいはい、私の山袴の札は人体や妖怪の体には効きません。いやでもしかしどうも妖怪の看病つても気乗りしないわねえ……ちよつと見せてみんしゃい。」

三角巾を外したルーミアの右腕は関節では無い所で下に垂れていた。その腕を触診しながら妹紅はぶつぶつ小声で何やら呟いていた。

「慧音、こりゃ骨ごといつてるよ。医療箱の中のイナバ軟膏って切らしてる？」

「どうやらルーミアの腕は骨ごと損傷しているらしい。」

「あゝごめん。それ切らしてるなあ……他にイナバ印の湿布薬でもあつただろう？それでも良いんじゃないか？」

医療箱の中身は綺麗に整理されており、銘柄も統一化されていた。それ以前にイナバ製薬と言うメーカーはジャックも知らない物だった日本の製薬会社ならメジャーなのだろうか、大体の薬品のジャンルを揃える会社からしてかなり稼いでいるのだろう。湿布薬を取り出しながら閉じられる兎の焼印が入った医療箱を見ていたジャックの所に玄関先で待機しているアリベルト伍長（アは発音しなくても良いらしい）に部屋へ来るよう言いに行っていたジェフリーが戻ってくる、その後ろには黒コートの人間の姿はない。

「伍長は食べないってさ、明日の紅魔館って場所でやる屋内パーティーの為に二日前から断食しているそうだね。俺も断食を薦められたが遠慮しておいたけど、俺たちもそのパーティーには出席するらしいぞ？」

「紅魔館ねえ……あそこの主人も少しぐらいは大人しくなったのかねえ。メイド長も良く里へ来るけど毎回毎回兵隊さんの車に「スクーター」って言うカラクリ自転車をぶつけてるし……相変わらずなんだろうなあ。」

「……まあ言ってる事は良く分かりませんが……鍋が吹き零れてます

よ？それに断食は体に良くない、下手をすれば拒食症になっちまう。俺も御免だな。」

川魚の下準備をしながら物思いに耽っていたせいで鍋の吹き零れに気づかなかつた慧音が慌てて火を弱める。鍋と魚と言うことはやはり煮魚でも作るのだろうか。

「川魚は寄生虫がいる場合があるけ加熱調理さえしちやえば食べれる物だな。外の世界の宮廷で食べた海魚が恋しいな。」

「えー私は川魚ばかり食べてたけど小さい頃は給仕の侍女が食あたり起こさないように香草とか使ってくれたのを食べてたけどな。つていつもいつも魚を持つてくる時には香草も一緒に置いてないの？私はいつも置いてるけど？」

思い出話に花を咲かす慧音と妹紅の姿は髪の色も相まって友人と言うより姉妹にも見える。

「え？最初の方は香草も有ったけど途中から無くなつてたからつきり香草を摘むのを止めたのかと思つたけど？」

長期保存の為に水煮をしておいた筈を切る慧音が声をまくし立てる。

「と言うことは……アイツか…ハア…」

妹紅は物憂げに空を仰ぐ、と言つても彼女の目には鉄筋コンクリートの無骨な天井しか見えていない。それでも彼女なりに天井越しの空を想像しているのだろう。

「あの白黒泥棒が人里に来るだなんて？その頻度は低いと思うから妹紅が途中で盗まれてるのではないか？」

「それだ！！！！道理で途中から魚籠の中が軽いつつと思つたんだ！！あの野朗（？）、今度あつたら問い詰めてやる！！」

妹紅は顔を真っ赤にしてルーミアの腕に湿布を貼り続ける、その白黒泥棒とやらは俗称なのだろうか。それにしても魚には手をつけず香草のみを奪い取る泥棒とは利益目的ではない、ただの嫌がらせにも見える。

「あいつに問い詰めても「いや？アレは私が死ぬまで借りただけな

んだぜ??」としか言わないわよ。今度からは香草の束を腰に括り付けたりでもしたら?」

慧音が声真似をしながら妹紅をたしなめる。

「きやはは、慧音の声真似すごいよ〜本物みたい〜」

腹を押さえて笑い転げる妹紅。これまで表情のレパートリーが少なかった彼女の貴重な笑顔である。その間にも会話に入れていない外来人の二人は部屋に置かれていた古い置き型パソコンのスイッチを押し、起動も終了させていた。そのパソコンのOS型番には現代人の二人にとつて感嘆の声が上がった。その声にも動じずルーミアはベッドで眠り始めている。夜行性の妖怪だからだろうか、やけに昼寝が多い。

「おいジャックすげえぞ!これWind ws95だ!今じゃ骨董品クラスだぞ!」

ジェフリーが目を輝かせながら粗い作りのマウスポインタを飾り気のない深緑のデスクトップの中でぐるんぐるん回している。彼等の時代から言えば既に十年以上が経つパソコンであるのだが、幻想郷では使いこなしさえすれば誰でも簡単に式神を使役することが出来ると言われている程の最新鋭機器である。

「これは凄いな…こんなのが現役な国つてアフリカぐらいだとは思っていたが、この世界でもか…」

自分が実家で使っていたパソコンがWind ws98だった過去を埋め立て、作業機の右下に置かれた本体を弄り回す。着脱パネルこそ無くなっていったものの、埃一つ付いていない基盤を見て手入れだけは怠らずやっているのに関心していた。その後には彼は基盤下部のメモリスロットに目をやる。ここでジャックはもう一度驚く事になる。

「おいジャックすげえぞ!!このパソコンのメモリー、五メガだ!やべえぞ!」

彼が見たメモリスロットはスロット自体の増設が行われておりその数は全部で六つ、その全てに一メガの増加メモリーが取り付けら



れている。パソコンメモリ全体で六メガだがCPUやグラフィックボードに使うメモリを考えても五・五メモリ以上は残る計算だ。所謂「モンスターマシン」である。

「こっちのパネルでも確認できる、こいつあ凄いぞ、俺のパソコンより性能高えんだな。OS以外は。」

後ろから聞こえる興奮まがいの声に気づいた妹紅が二人に近づくとパソコンを使える人間に興味を示したようだった。二人の間に割って入る彼女はデスクトップに浮かぶ一つのフォルダを指差す。

「あ、それぞれ。その箱に入ってる文を開いてみて、その文を印刷して欲しいんだけど……どうも私じゃ出来ないみたいなんだなあ……なんでだろうね。」

そのフォルダに入っていたのは明後日に配る予定である「春告精を観察する会」の旨を説明してあるプリントデータだった。プリントの内容はともかく「対象を印刷」をクリックしても印刷プレビューすら出ない。

「いや……妹紅さん……プリンターが無いで御座います……パソコンに繋がっているのはスキャナーでござえます……スキャナーってのは紙を吐き出す物では有りません、紙をパソコン内に取り込む物なのですけど……」

いつの間にか読めていた日本語のポップアップには「プリンタはオフラインです」の文字。印刷できないのは当然であり、その代わりに刺さっていたのは所持することが絵描き師のステータス「スキャナー」であった。全く正反対の機械に全く正反対な注文をしても全く正反対な答えしか返ってこないのも事実以外の何物でもない。

「ふっ……そうだったのか……「あの店」にしてやられたのね……はは……」

大変な勘違いをしでかしていた事から思考を逃避させるようにパソコンの画面から目を逸らし始める妹紅。

「やっぱり妹紅が買ってきたのは印の式神じゃないのか。まあプリントはまだ手書きで何とかなるしな……さあ出来たぞ、妹紅は皿を

持ってきてくれ。」

あいよ、と言った妹紅は流しの上にある棚から数枚の皿を取り出す。少し空に雲が現れた春分間近の暖かい外の空気に漏れ出す煮魚の匂いが近所に告げる、里の人間より遅れた妖怪と人間達の昼食が始まろうとしていた。

## 第二十七話「ハロー、マイアンフェアレディ」(後書き)

話を濃厚に書くと先にちつとも進まないことを知りました。  
感想等はお気軽にどうぞ。

題名の元ネタ。

マイ・フェア・レディ

一九五六年三月に公開された6年にも及んだ

ロングランミュージカル。映画には

オードリー・ヘプバーンが主演を務めた

日産フェアレディZの元ネタでもある。

アンフェアⅡ 妹紅は不死の人間。普通の人間である  
ジャックたちと比べると寿命の面では妹紅が傾き不平等。  
しかし消え行くものを見届ける、死ねない悲しみを  
考えるとジャック達が気楽かもしれない。  
どっちにする妹紅は普通の人間より何処かしらかが  
「不平等な少女」であるのだ。

第二十八話「到着」(前書き)

三月一九日

午後十三時四十八分

人間の里・寺子屋職員室内部

## 第二十八話「到着」

「……んゝ慧音さん？…こりゃ嘘を付いてる味ですぜ？」

持ち前の器用さで箸を操るジャックが「筍と川魚の鰹出汁煮」を食べた感想をオブラートにも包まず言つてのける。

「そう？やっぱり失敗か…匂いだけは美味しいんだけどな…」

今まで黙々と食べ続けていた調理者の慧音ですら酷評を出してしまふほどの出来だったようである。確かに筍と鰹節までの段階で止めておけば美味しい煮物が作れそうだが「川魚」と言う第三勢力が全てを破壊してしまったのだらう。正方形の机には一方に慧音と妹紅が並び、向かいにジャックと箸を上手く扱えず躍起になるジェフリーと箸のいろはも分ならず「刺し箸一刀流」を会得し妥協を始めたルーミアが座っていた。

「それで貴方達はこういう風に「こつち」へやってきたの？聞いてみたいな。」

妹紅の皿に魚を無理矢理渡しながら慧音が二人の外来人に尋ねる。やはり妖怪の森から現れ、そして人食い妖怪をも屈服させる人間はさぞかし特殊な能力を持っているのだらうと踏んでいるらしい。

「あ、まだ話してませんでしたね。私達は昨朝に「アメリカ」と言う国の南東部に位置する空域で磁気嵐に巻き込まれたんですよ。嵐を抜けた時はマザー1（スペクター）もいたのですが、でかい山の付近ではぐれてしまつたんです。その後は飛行機を降ろして此処まで歩いて来る時に偶然倒れていたこの子を看病してあげたんです。」

ルーミアと戦闘した事を隠蔽したがルーミア自身は彼等と戦闘した記憶も無さそうだった。正確に言えば話を聞いてなかったのかも  
しれない。

未だに著と格闘しているジェフリーを見かねた慧音が木彫りのス  
プーンを渡そうとしたがジャックに制止される。

「これは彼の為になりません」と目で合図する。

「亜米利加国ぐらい分かるわよ。でも南東部空域……命蓮にそこか  
ら来たって言ってた外来人がいたわね。でも飛行機なんて最初の十  
四人は乗ってなかったし……次に来た十三人も妙ちきりんな船みたい  
なのに乗っていたな。」

「バミューダ……十四人……十三人……そして船みたいな飛行機……これ  
って、「フライト19事件」の行方不明人数と重なるぞ……!!」

「んあ!? ジャックは黙ってる、でけえ声出すな!! こっちは箸  
が使えなくて忙しいんだ!!」

フライト19事件。それは一九四五年十二月五日、フロリダのフ  
ォートダーデル海軍基地から訓練飛行に飛び立ったグラマンTB  
F5機ヤに操縦手、後部機銃手、無線手の三人（この時は一名欠員に  
より一機のみ二名運用）が乗り込み飛行訓練を兼ねたパトロール中  
にテイラー中尉が乗る隊長機の計器故障による遭難無線数回を残し  
全機が消息を絶った事件である。後日に彼らフライト19の搜索を  
していたマーチン・PBMマリン飛行艇も数回の定時無線を残し  
五機のアベンジャーと共にバミューダ海域へと消えている。

スペクター、F-14共に練習生だらけの訓練と教官クラスの本  
テランが一名のみと言う点が重なっている事に気づいたジャックは

背中に悪寒が走ってた。

「でもここ数年、なんでいつもの外来人とは違う人種が「神隠し」に遭ってるの？慧音は分かる？」

ようやく慧音から押し付けられた魚を全て食べきり、流しにいる彼女に妹紅が尋ねる。

「そうだな妹紅。何故か数年前から明らかに亜細亜圏外の人間達が幻想郷へやってきている。それに服装や武器の類も元もとの里自警団より錬度も統制力もかなりかけ離れているし…分かるのはそれだけよ？でもあの血気盛んな野朗たちを飼いならしている白蓮ヒヤクレンさんなら何か知っていそうだな…」

「白蓮？その御方が玄関先の独逸兵のような人達を従えている？と？」

とつくに煮魚を食べ終えたジャックがジェフリーに箸の使い方を教えながら白蓮と呼ぶ方の事を聞く。

「ああ、その御方が最近里に建立させた命蓮寺（Myouren Temple）と言う寺に軍人を見つけては引き込み引き込んだ人達に他の軍人を探させて見つけた軍人を引き込む動作を繰り返させたんだ。その結果が寺の裏にある飛行機置き場と周りの国別宿舎と車庫だ。多分だが白蓮さんは寺の僧兵にでもさせようとしてるのかな？」

慧音が言う僧兵とは院内に保管されている数々の宝物や豊かな経済力によるその他勢力からの攻撃に備えた武装宗教集団では無い、第一に宝物や寺院を破壊する輩が現れた場合は彼女直属の妖怪達が

迎撃にでる筈だ。

だから警備レベルが低い少数精鋭では流石にはぐれ妖怪達に舐められると感じた白蓮が付近に巨大な兵舎や飛行場を建設させる事により表面上の武力誇示を目的にした「ハリボテ」としての兵隊か、それ以前に白蓮がスペルカードルールでは解決できない何かを感じて独自の武装勢力を創設、それを私兵団としているかのどちらかだ、どちらにしても目は多いほうが良い、と言った話をした。

全員が昼食を終え、また明日に顔を出しますよと慧音に約束した二人はルーミアを寺子屋に残し、再度リベルト伍長のキューベルワーゲンへと乗り込む。彼は外で待っている間に灰色の馬鹿でかい飛行機と目の前の通りをジープと戦車牽引車に引かれた日本軍戦車を見たことを得意げに話していた。

ジャックがどこまで行くのかと尋ねると伍長はこれから命蓮寺に建てられた独逸館に戻り、早めに夕飯を終えた後に最近白蓮様が始めた幻想郷縁起を使用した妖怪講座を受けると言った。丁度良い事この上ないので二人は命蓮寺まで便乗することにした。

里の中心へ行く最中に古臭い自動車が二台ほど通り過ぎる。その二台ともティン・リジー（T型フォード）に酷似しており二気筒特有の弱弱い排気音を鳴らしながらワーゲンの隣を抜けていった。

所々に洋風建築の建物もちらほら見えてきた時、彼らの目の前に巨大な寺院が現れた。古き良き日本建築と言ったところか、瓦葺の真新しい寺院は周りの洋館により若干浮いていたが白壁の塀を使った庭園いである程度の均衡を保っていた。洋風な建物以外にも寺院が浮く原因の一つに向かっていくワーゲンの窓には荘厳な寺門の下に紅白の遮断機と詰所を作り、煙草を啜えた兵士の姿があった。

彼は深いグリーンのコートにニット帽のようなジープキャップをまばらに被り、銀製のジッポーの蓋をカチカチ鳴らしながらワーゲ



ンに近づくと。小銃は持たず、拳銃と何故か古いサーベルを腰に下げている。

「よおりベルトお。紅魔館から無電で伝えた帰還時刻より何時間オーバーしてると思ってた？お陰で検問当番の俺はライフル一挺すら持たない時間が続いて怖かったんだからな。だからはやくカラビナーを寄越せ。」

兵士が啜っていた煙草を一気に吸い上げ地面に捨てる。仕事をなくした左手は小銃を寄越せと伸ばす。

「悪い悪い。丁度里の入り口で新入りを捕まえたんだ。未来の米兵みたいだぞ？カラビナーは持ってけ泥棒。」

浅緑の野戦服にベルトポーチには「U S A R M Y」の刻印、古い型式のコルト拳銃。第二次大戦時のアメリカ兵だ、それも前の座席に座る独逸兵と陽気に会話を交わしている。

リベルトが前部座席と後部座席の間にあるライフル立てから一挺の古い小銃を取り出す。それは旧ドイツ軍が正式採用した現代でも一部国家で使用されている傑作銃「カラビナー1898 Kr<sup>クルツ</sup>uz」だった。

ボルトアクションライフルである本銃は銃身長六百ミリ重量約四キロ、装弾数五発で有効射程は五百メートルと第二次大戦中の各国小銃の中でもそれなりに性能を誇っていたが、アメリカ軍が採用していた半自動小銃に連射性能や生産性の面で押されてしまっており「時代遅れ」の感も否めなかったのは事実である。

「そこの君達は先ほど着陸した滅茶苦茶恐ろしい飛行機の知り合いかな？だったら今あの人達が飛行場で佐官達と話しているから向か

「つてみるといい。」

そのカラビナーを受け取った米兵は後部座席の窓に顔を突っ込み二人に意気揚々と話しかける。

「あ、そうなんですか？おいジェフリー、あのスペクターは此処に居るってよ！！直ぐに向かおうぜ！？？つてまた寝てるぞこのくそつたれめ！！」

不完全なサスペションのせいでガタつく座席に首をハワイ人形のように揺らしながら眠るジェフリーとはぐれた理由を考えるジャック、境内を徐行しながら今晚の夕飯のメニューを想像するリベルト達三人はそろそろ燃料が切れそうなキューベルワーゲンを駆りながら裏手に有るといわれている飛行場へとタイヤを走らせた。

第二十八話「到着」(後書き)

ところどころ言葉足らずな箇所があつてすみません ><

## 第二十九話「発掘？ 発見？」

空軍エンジニアターのジェフリーとジャックの二名がようやくスペクター乗員達との合流を完了させた頃。烏天狗の射命丸文は報道部へ試験転属される白狼天狗の犬走椛を連れ、烏天狗の大屋敷から少し離れた報道第四支部の別棟に到着していた。

文が繁々と伸びる木々に隠れるような場所で近代建築風に建てられた報道本部棟に居座る烏天狗に異動完了の旨を報告し、門の前で待つ椛の元へ向かっていた時である。

「んん？ なんだありゃ？ 第二支部の連中が何やってんだらう……？」

幻想郷でも珍しい四階建て建物の一〜二階を結ぶ階段を降りていと踊り場に取り付けられた丸ガラスから数人の烏天狗が奇妙な像に縄を掛けて運んでいる光景が写っていた。

文はその中に顔見知りの天狗が居たことで第二支部と分かったがその中には第一支部や第三支部の天狗たちの姿もある。実は鼻高天狗達に最近取り決められた本部と支部の区別化を尊重する者は少ない。この方策を喜ぶのは優遇される報道本部勤めとなった高慢な天狗の中でも「あいつぁ高慢ちきだな」と感じる位の天狗達くらいである。

支部分けされた天狗達は今まで通りの新聞書きや昼間酒といったぐうたらな生活を続けており、お遊びの為の部署間移動もお咎めなし。縦社会がきつい天狗の中でも横つながりはなりふり構わずだ。

本部棟の門から出た文が見た像は階上から見た時の大きさを裕に上回っていた。ざっと三メートルはある。

「ねえ御船<sup>ミフネ</sup>。これって何を象った像なの？　なんか不気味なんだけど……」

その木像は飾り気のない土人形か木偶<sup>デウ</sup>のような様相を呈し、台座もなく、頭部は異常に平べったい形状をしている。他には右手にシャベル状の鉄板のようなものが取り付けられている。傍から見ればその苔むす長身な像はとても不気味極まりないと誰もが思うほどだった。

千年以上前に烏から変化した文は幻想郷生活でこの像を始めて見るので綱を引く一人の烏天狗に像の概要を尋ねる。この時ばかりは個人的主観よりは第一発見者の意見を尊重した。

「ああ文先輩ですか。これは先刻到着した先輩の第四支部に配属される墓目<sup>ヒキメ</sup>二等記士が移動中に発見した物なんですよ。かなり昔から在ったみたいで所々損傷していますが新聞のネタとしてならこりゃあ最高ですね。」

彼女の目の前にいる烏天狗は頭巾すら被っておらず、耳には羽根筆を挟んでいる。彼女の言う事にはこれから椀の同僚となる白狼天狗がこの像を見つけたらしい。

「あ、いたいた、貴女様が射命丸文様<sup>シャメイマルアヤ</sup>ですね？　某が今日から烏天狗報道第四支部に三等記士として配属される墓目<sup>ヒキメシユウボウ</sup>重坊です。以後宜しくお願いいたし候」

かなり古めかしい言葉遣いで文と椀に話しかけた天狗は意気揚々と二人に握手を求める。文は簡単に握手を返したが椀のほうは対応に困りおどおどしていたものの、握手返しはなんとかこなした。

第五支部の奥に位置する土蔵の前で像に掛けられた綱を解く。

体力鍛錬兼人助けを終えた烏天狗に数回のお礼を叫んだ後、彼は像の全身を触り始めた。

「こんな物が何千年も前から妖怪の山にあっただなんて想像もつきませんよね。自分の見解では…この幻想郷が生まれる前…それも地上の技術で作られた物では無い…なんて考えてるのですがね。」

彼が言いたいの「月の生産品」である事らしい。なるほど昔から高い技術力を持っている月の住人達ならこの様な像を作るのも容易な筈であるが、これが見つかった理由としては成り立たない。

「じゃあ暮目さんはこの像が第一次月間戦争時の物だと言いたいのですか？確かに天狗の歴史の中では天狗達の仲から幾人かで組織された特殊作戦部隊が赴いたそうですが…一割も帰ってこなかったって言われてますよ？その中で戦利品を持ち帰る余裕なんて無い筈ですよ。」

二人の間に桜が言葉を挟む。彼女の言う第一次月間大戦と言うのは八雲紫が増長した妖怪達を集め、結界隠れしている月の都市を攻撃した事件だ。しかしこの戦闘は月の圧倒的な兵器と統制が取れた玉兎達の攻撃に遭い返り討ちとなっている。その際に若かりし日の天魔と紫が話し合い、出発前に「天狗達から定数の増兵」を取り決めた。

組織された天狗達は一番槍を任せられ真っ先に突撃したものの高度な技術を駆使した兵器の前に苦戦。最強格の妖怪が押されている光景に後続の妖怪達が怖気づいてしまったも重なり言葉通りの壊滅を迎えた。

それでも数人の天狗は他の妖怪達と数回の戦闘を繰り返したが全

て退き戦であり、その間にも数十人の妖怪が玉兎達に捕縛された。初戦闘で生き残った天狗の大体が他の妖怪達と共に結界まで逃げ帰る事が出来たが結界を通る寸前に追討隊の攻撃に遭っている。

帰還を果たした天狗は現在も存命しているのだが、誰が行ったか等と言う事は天魔しか知らない。仮に見つけたとて多くを語るうとしないだろう。それほどまでに凄惨な光景だったのだろう。

と古新聞で読んでいた椛は敗走中に巨大な木像を持ち帰る事は不可能だと踏んだのだ。

「では椛さん。何百年も前に作られた筈の木製像が殆ど朽ちる事無く、それも我々の山の中で見つかっているのか…何故だと思いません?」

暮目は木像を軽く叩く。コンコンと響きの良い音がするので劣化具合も悪くない。椛は其中で右腕の関節部に刻印された妙な記号が目についた。

「…ん?」「?」  
「μ」「?」  
「何でしょう…英語ですか?」  
だとしたら月の生産品のロットが古くても此処へ飛ばされてきたのはつい最近…飛行機に乗ってきた欧国の人達の先祖が観賞用に置いていたかもですね。」

「馬鹿ねえ椛。これは英語じゃなくて希臘語よ。もう面倒くさくなってきたわ。部屋に案内するからその木像を邪魔にならない場所に置いておきなさい。二人にカメラも渡さなくちゃいけないしね。」

大きな欠伸をする文が平屋建ての第四支部に足を向ける。それに続いて新米の二人も続く。

「（…………アカデイメイア…………ギリシャ語で「快樂」か…………何か異変でも起こりそうな予感……）」

空に上る天道が傾き始めた頃。 幻想郷の外れに古い小型浮遊船が停留していた。 その艦橋に大柄な妖怪が三人、 遠眼鏡を構える華奢な妖怪一名が滞在していた。

「艇長。 我艦被投棄木人形兵器端狗入手。 省事」

「艇長。 我々が放棄した破損偽装している機体が天狗達の手に渡ったようです。 手間が省けましたな。」

「フン、 自ら破滅の道を選ぶなど愚の骨頂だな…アレを見られたからには証拠の隠滅も止むを得まい…………両舷後進！ 今日深夜にでも奇襲攻撃を仕掛ける！ 目標は天狗達の武器庫に収蔵されている武器弾薬の奪取。 いいか、 最早あそこにいる天狗は天狗ではない！！ 我々を見捨てた卑怯者どもだ！！」

異変は、異変は密かに、 確実に始まろうとしていた…………。



第三十話「再会」(前書き)

三月一九日

午後十五時二分

命蓮寺・急造飛行場内

## 第三十話「再会」

幻想郷の夕刻と言うものは欧州では見られないほどの絶景であり、アジア特有の湿り気がある空気も外国人達にとつて心地の良い物らしい。橙色に染まる船のような形をした二つの建物の裏にエンジンスペクターを落ち着かせプロペラが風車同然となったAC-130Hを既に滑走路に降りてトラクターによる牽引を受けているアレックス少佐のB-25の隣に着陸させ、踏み締められた赤土の飛行場らしきものに降りた機長のマツキンリー大尉と副機長のパメル少尉、添乗していた師団付き（大隊、中隊付属ではない）小隊の隊長を務めるヤコブ中尉は未だに機外から降りようとしないクルーや小隊中の分隊員よりもいち早くその眼前に広がる異様な光景に啞然としていた。

「おい…俺達は降りる予定の場所を間違えたのか？ どう見ても博物館だろこれ……」

「いや…進路上は間違いありませんよ。機長だつて滑走路から出ていた発炎筒が無ければ今頃は奥のドイツ戦車にぶつかつてましたよ…しかしあの戦車はどう見てもパンターGですし…搭乗員が掃除していてもエンジンまで掛かつてますよ。その隣だつてT-34-85（ミキーマス砲塔）の1942製ですよ。自分が持つてる本で見た限りなので見るのは初めてです…今朝の日本軍戦車と違い、もう訳が分かりませんです…」

「おお！！ あそこのハンガーの中にあるヤツはファントムじゃねえか！ なつつかしいなあ！！ 二機もいやがるぜ！！」

自分が過失を冒したのかと心配になる大尉が一名、冷静に兵器

観察までしてしまっている少尉が一名、それより格納庫に留められたジェット戦闘機に目が行ってしまふ鼻にガーゼを何重に巻いた中尉一名がいた。そんな彼らの後ろからぞろぞろとスペクターを降りるクルーや隊員達も稼働状態の古い兵器に興奮し、圏外状態の携帯電話のカメラやiP Dのカメラを使い観光気分写真撮っている。

便乗して写真を取り出した少尉に呆れていた大尉の前に息も絶え絶えに一人の少女が走ってきた。髪色と御揃いの灰色色ネグミに染められた極短套を肩に掛け、濃いオリーブ色をしたワンピースを着た少女である。しかしその頭には大きな丸い二つの耳。そしてワンピースの腰部からはチヨロチヨロした尻尾が飛び出していた。

「き…君達は…ぜえ…ア…アメリカ館の…人々かい？ ちよつと匿わせて…くれ…ないか？…昼酒だけは…ひい…したく…無い…んだ……」

その少女は長い間に渡って走っていたらしく声も満足に出せない喉でそう言った。大尉が了承する前にいそいそと無人となったスペクター内に逃げ込む。逃げ込んだ数秒後にメガホン片手に猛烈ダッシュする一団が現れる。

「どこだああ！！ ウオツカの席を逃げ出すなんて貴様はロシア人ではないのかああ！！ 何とか言ってみるよおおおお！！ 同志ナズーリン！！」

「怒らないから出て来い！！ 同志ナズーリン！ 一杯で良いから飲まないで死んじまうぞ！？」

濃いカーキ色の戦闘服に身を包んだむさ苦しい人々はソヴィエト兵だ。その中に戦車兵帽を被る者もいたので恐らく奥に頓挫して

いるT-34の搭乗員とタンクデサント兵（戦車近衛兵）だろう。

一団は真つ赤になつた鼻から出す息も乱れる事も無く目の前に止まる異形の飛行機にも目も暮れずそのままT-34に乗り込む操縦士と車体後部に座り込むデサント兵。暫くすると彼らの戦車にもエンジンが掛かる。

「ほらほら！ もっと速く動かせ！！ 早くしないと日が暮れるぞ！！」

「でもそんな速度を出したら……まだ整備中じゃ無かつたのですか？」

「うるさい黙ってるフェリックス。ごちゃごちゃ言いやがつて、ピロシキがお前は！！！！」

「おいラデック。ピロシキの単語は紅魔館社交会まで禁句だった筈だぞ！？ 罰として今夜のウオトカは俺が頂く。有り難く思えよ？」

三十トン近い怪物に跨る褐色服を纏つた声が大きい騎士達が口々に戦車の速度に文句を言い続けていたが操縦士にはその声が届いて無いらしく。里の大道に出るまで時速十キロにも満たない位の徐行を続けていた。

「T-34」それはソ連が開発したMBT（Main Battle Tank）であり、第二次世界大戦下に於いて世界中に多大な影響を齎した戦車の内の一台である。T-34が開発されるそれまではT-26歩兵直協戦車（対歩兵戦車であり支援目的は味方の歩兵であり対戦車目的ではない非力な戦車）やBT戦車ペデーと呼ばれる防御力と攻撃力を削つた機動戦車がソ連赤軍せきぐんの主力を務めていた。

後述の独逸軍が駆る？（5）号パンターG型中戦車や？（6）号タイガー重戦車と比べればT-34の戦闘能力は低いのだがそれまでの独逸軍戦車（？号？）（4）号戦車）とは対等以上の性能を發揮した。

諸装備を米国から貸し与えられた赤軍は主力兵器だけ生産すれば事が足りる状態であり、月に千台生産可能のとてつもないペースでT-34を戦場に送り出していた。

それに対応するように独逸軍が作り出した戦車がパンターGやタイガー重戦車である。現在タイガー戦車は大尉達が見る限り命蓮寺に停留していないのでパンター<sup>パンター</sup>戦車の説明のみ行う。

一九四二年に生を受けたこの戦車は全長八・七メートル、重量四十トン超の重戦車クラスであるがリーズナブルな生産価格に似合わない程の高い性能を持ち、誕生以前まで活躍していた先代の戦車製造ラインを全て本車に切り替えさせた程の期待を背負っていたのだが被撃墜数と生産数の釣り合いが取れず（勿論被撃墜数が上回る）、独逸は最後の最後まで大戦中期の型遅れな戦車に装備換装等を行いつつ生産を続けていた。

エンジンの調子が悪いのか、はたまたマフラーを掃除していいのか、大道に出た地点でどす黒い黒煙を上げ始めたT-34ともろに煙を浴びた若いソ連兵二人が転げ落ちる。笑ってよいのかいけないのか判断に難しい状況に大尉達は只々苦笑するしか無かった。

「ええい！ ちょっとぐらい喰わしてくれても良いじゃないか！」

「やめろ！！ 頼むから糧食<sup>レーション</sup>の袋を噛まないでくれ！！ やめて！！」

スペクターの中から二つの声が響いてくる。一つは先程のネズミ少女の声だ。もう一つは多分レーガンの声だろう。アイツは目下の奴にも敬語を使う癖がある。それより未だに機を降りていなかったのか。

少しして機内からそのネズミ少女が悠々と降りてくる。その類は初対面時よりも幾分か膨れ上がったのは視認する事が出来たが、彼女が尻尾に絡めているバスケットの中にも濃緑色の小包が幾らか入っていたのは確認出来なかった。

「お陰で助かった。礼を言うよ新入り君達。それにしても随分珍しいお宝を積んできてくれたねえ。久しぶりに食指が動いたよ、御返しにこの寺院の地図でもあげようかと思うのだが……生憎持ち合わせてなくてな。まあいつかお礼はするよ、ここの寺男達の間じゃ僕の名前を知らない筈はないんだけどね。僕の名前は「ナズーリン」さ。ではまたな。」

スーパーマン気取りなのか、大尉の前であらぬ方向を見続けながら礼の言葉を言ったナズーリンと言う泥棒ネズミ少女は早足で寺の中へと消えていった。

運転免許を持つクルーが貸与された三台の牽引トラクターを使い、スペクターを滑走路の端に寄せる作業をしていた時。大尉達の前には寺の方角からやってきた一台のキューベルワーゲンが止まる。

ドアを開けたワーゲンの客席からは服装が似た二人の米空軍兵と運転席から一人の独逸兵が降りる。二人の現行空軍兵は綺麗な崩れた敬礼をしながら揃って声を上げる。

「アメリカ空軍特殊作戦学校生、一等兵のジェフリー・フィブスターです！」

「同じく特殊作戦学校生、一等兵のジャック・ハフマン。只今合流致しました!!!」

少々やつつけ気味な口調で報告する二人に対し、大尉は綺麗な敬礼を返す。それを見た二人は狼狽した後、自分達も綺麗な敬礼に修正した。

「同じ時代の人間に会えて嬉しいぞ。自分は第一特殊作戦航空団所属、ロイ・マツキンリー大尉だ。未来の特殊作戦員に会えるとは嬉しいな。俺も特殊作戦学校から此処へ異動したんだぜ? ええ〜っと? ジャックにジェフリーか……ん? 教官はどうしたんだ?」

「いえ…それが未だに消息不明なんです…それに此処が何処なのかすら……」

「大尉殿。遅れますよ! その白蓮と言う人に事情を聞くのですよね?」

やっとのことで見つけた一番信用できる人間の前でようやく弱気に成れた時。寺へ向かうクルー達から大尉へ自分達から遅れないようにと注意を受ける。

言葉にならない応答をした後で、空軍兵の三人は目の前を歩くクルー達の元へ走って行った。

第三十話「再会」(後書き)

後半辺りで自分へ睡魔が襲ってきています>><



第三十一話「HALO」(前書き)

三月十九日

午後十六時零分

命蓮寺連絡用廊下

## 第三十一話「HALLO」

この字にひん曲がっている人里のど真中に建立された命蓮寺の内装の多くは味気ない外見に合わせるように漆塗りが施された木目板を張り巡らせた質素を極める壁が続いており、襖ふすまや部屋に続いておりそうな木戸の姿が幾つもあった。

それに院内はまるで船の中のように入り組んでいる。時折、過去の軍人達が通路を通るので内部はさながら古い軍艦のようだ。その入り組み様は半端ではなく、道案内も無しに初めて入ろうものならクリティカルに迷うのは避けられなさそうである。

「何で前を歩いていた大集団を見失うなんて芸当が出来るんだよ。ジャック…それに此処は何処だ??」

「俺だつてわざと見失いたくは無かったさ。目の前に変なオッドアイガールが変な色の傘を持って俺の目の前に飛び降りてきたんだぜ? 着地ギリギリで傘を開いて減速するなんて…思わず驚いちゃまったよ。」

「えっ」と。貴方達は確か昨日の演習時にF-14に乗っていた方々ですよ。自分はレーガ…」

「ちょ、ちょっと待ってって」

髪と同じ色の青い上着とスカート、両目にそれぞれ蒼と紅の瞳を持つ付喪神の「多々良子傘（タタラコガサ）」は手に持つ茄子色の不気味な傘を器用に回転させながらすっかり自分を話しかけ置いて行っている眼前の三人に注目を促す。

「どうしたんだい？　そこのお嬢さん。俺の連れを驚かしちゃって？　お腹でも空いてるのか？」

室内で傘を差すとはとんでもない「凶」マニアなのだろうか。ジェフリーはそう思いながら彼女に言葉を投げる。

「一人ぐらいが驚いてもお腹は膨れないよ。なんでアンタ達二人はアタシが出てても驚かないのさ？　妖怪が目の前にいるんだよ？　いるんだよ？　怖くないの？　もう一回、うらめしや〜」

妖怪、これまで何回も見た、一回だけ戦った、微妙に勝利した、看病した、話した、負ぶった、毛布でぐるぐる巻きにした、半妖怪が出した食べ物喰らった。

ジェフリーの脳内では既に恐るるに足らない物に降格していた種族だ。これから自分より強い妖怪ゴブリンとかが現れない限りは金輪際、梃チ子でも考えを変える事は無いだろう。

「俺は怖くないね。第一君は驚かそうとしてる顔じゃ無いじゃないか？　笑顔で「うらめしや〜」なんて言われたらこっちは鼻の下が伸びちまうね。」

「自分もです。何て言うか…貴女には覇気が無いのですよ。後にもう少し道具を使うべきです。」

レーガンも妖怪や異形の者には慣れっこになっていた。何せ昨日の時点で見ているのは左脚が二本生えている少女や犬耳を生やした空飛ぶ忍者少女、拳句の果てには二つの尻尾を持つ猫耳少女に自分の右太腿を思い切り蹴られているのだから。それに比べれば子傘なんて全くもって普通の女の子である。

「ふえ…驚いて…くれない…ひつ…そんな…ふえええ…妖怪失格だああ…」

子傘にとって命蓮寺に初めて入って来た者は満腹感を得る絶好のカモだったのだが、そのカモが突然弾幕を放ってきたような物である。此処で待ち伏せていれば驚いてくれない人間なんていなかった、効果は抜群だった。とてつもないショックを受けた子傘は遂に泣き出してしまったのだ。

わんわんと泣く声が辺りに響くので通りすぎる兵士達から白い目で見られる

「わ…わ…怖いな…助けてええ…」

（女の子を泣かせるなんて何て野郎だ…）と奥の辻に隠れながら目力を効かせる第二次大戦時の砂漠戦闘服を着たイタリア兵と煤だらけのコートを纏ったソヴェイト兵二人の姿を見つけたレーガンが棒読みながら形だけ驚いてみせる。

「怖いぜえ…怖くて死ぬぜえ…」

目力に気づいたジェフリーも猫なで声で驚いてみせる。例えるなら子供同士の喧嘩だ。

「およ？ 怖いのか？ やった！！ 嬉しい！！！！」

嘘すら見抜けない単純な少女（妖怪）だ。ある人は逆にそれを美しいと言っただろう。それはこの場面に感銘を受けた三人の軍人達も同じだった。奥の辻から身を乗り出し、ジェフリーたちの許に近づく。

「Io sono terribile! (すげえや!) 見上げたプライドだな!!」

布地が疲れきっている軍服の上から継ぎ接ぎだらけの夜間用コートを肩にかけた金髪のイタリア兵が拍手をしながら近づいてくる。これといって敵意を吐き出している訳でもないのに拒絶するわけにも行かない。

「うるせえ毒ガス王子様。こいつらプライド下げたんだから見上げるも何も見下す事しか出来ないぜ?」

「しかしラデック伍長? 最終的にこの方達は彼女を喜ばせたんです。その為の犠牲であれば何も失ったわけでは無いかと思います。…違いますか??」

後ろのソヴィエト兵二名は先程のT-34に乗っているながら煙攻めを受け、落車した人達だ。そうでもなければ顔面にセルフカモフラージュなどしない筈だ。まだ幼い顔つきのソ連兵はビー玉のようなブルーの瞳を光らせながら初めて見る異国の、未来の兵に敬礼をする。それに習うようにイタリア兵も敬礼に続く。

「自分はフェリックス・ローゼンフェルド一等兵です。そして後ろのはリノ・アザロー等兵です。自分は今年で満二十歳、アザロさんは今年で三十二歳、ですよね?」

ソ連兵の片割れは自分達と同年、SSのリベルト伍長よりも一つ上の計算だ。奥のイタリア兵は三十二歳らしいが筋骨隆々で若々しく、未だに二十代前半な雰囲気を感じ取りに振りまいていた。

「いやあ…アフリカ戦線崩壊寸前時に此処へやって来てな、理由は知らんが他の残党さん達と共同で英軍キャンプに奇襲を仕掛ける前に逃げ出したのが原因みたい。もうこの世界には十年近く住ませて貰ってるよ。最近じゃ近くの畑で小麦が仰山獲れたもんで久しぶりにパスタが食べれるんだよ。」

十年前から此処に滞在しているとすれば飛ばされた時期は自分達と大して変わらない。それに聞く限りでは付近に畑を拓いて作物を収穫すると言う自給自足の生活を送っているそうだ。パスタが久しぶりとなれば自給自足体勢が整ったのはつい最近と言う事になる。

「んで。俺はラデック・ガンスカヤ伍長だ。フェリックス達と此処へ来たのが丁度半年前だな。」

相手方の自己紹介が済んだらしいので次はジェフリーたちの番だ。一心上官に当たるのが一名いるので敬語で言わなければならぬだろう。

「自分はジェフリー・フィブスター。階級は一等兵、年は十九、今年で二十です。」

「ジャック・ハフマンです。年は同じく、アメリカ空軍特殊作戦学校在籍中の一等兵です」

「レーガン・グレイソン一等兵です、年は二十。」

「なんだ。一等兵だらけじゃないですか。」

フェリックスが手を叩いて笑ってみせる。

「じゃあ敬語は無しだな。俺達はいつも通り、君達は今からだ。」

リノー等兵がくだけて言う。

「俺も伍長なんて肩書きはいらねえよ。敬語なんて糞くらえだ、言葉遣いに気を使う連中なんざ昇進志望のヒーローちゃん達なんだぜ?」

ラデック伍長も賛成のようだ。

「では。これから長い付き合いになるね。宜しく、三人さん!」

偶然な出会いを果たした六人はそれぞれ握手を交わす。その顔は時代を、国を越えても変わらない「笑顔」そのものだった。この出会いが後に大きな絆を生み出すとは未だ誰も知らない。

「これから俺達は白蓮殿の妖怪講座を受けに行くんだ。来るか? お前等の連れも多分いるぞ?」

どうやら三人は大尉達が目指している人物に会いに行くらしい。上手くいけばまた合流できるかもしれない。

「あ、なら俺達も行きます。連れてって下さい。」

ラデックが手の平で顔を仰ぐ動作をする。どうやら「連れて来い」の合図らしい。ジェフリーたちは無言で歩き出す三人に連れて行く事にした。

「へへえ〜アタシの名前は多々良・子傘だよ〜 年は〜〜…  
アレ？ 待ってよぉ〜」

子傘も六人に遅れまいと小走りで追いかける。 ひよつとすると  
此処で出会った六人はもう一人（？）の神様を連れてきてしまった  
のかもしれない。



### 第三十一話「HALO」（後書き）

HALO＝高高度降下低高度開傘

（コウコウドコウカテイコウドカイサン）

高高度を飛行する航空機から着陸点寸前でパラシュートを展開し  
着陸する技法。 読み方はヘイロー！。

I o s o n o t e r r i b i l e＝イタリア語

テストがあつたので更新をすっぱかしてしまいました。  
なのでまた文章力が落ちていると思えますがどうかこれからも  
生ぬるい目で見えてやってください。

第三十二話「White Lotus」(前書き)

三月十九日

午後十六時四分

命蓮寺内・住職居住室兼応接間

### 第三十二話「White Lotus」

「これ、本当に持って行って良いのか？ 此処の寺男達の大事な酒だとは思うが…」

寺の一番奥部に作られた部屋には二人の女性が座っていた。一人は床の間に右肩を向けている、左右非対称の髪質且つ頭頂から順に紫から茶へと色が違う髪を伸ばし、白い服に前が対角線状の縞が切り込まれてある黒色の密着型上着を着ている。もう一人は床の間に左肩を向け、目の前の女性と相對する形で座っていたが、目の前の正座した女性とは違い、胡坐アケラをかいている。彼女はくすみの無い艶やかな紫の癖っ毛を頭に巻いたしめ縄である程度留めており、しめ縄にも紅葉の髪留めが着いている。その髪色と同調するように近似色の赤を基調とした服装をしている。そして彼女の隣には二つの小型樽が置かれている。樽の下部にはこれまた小さな穴が開けてあり、それを木の杭で塞いでいるのであった。

「良いのよ良いのよ、それは外の御酒じゃなくてこの寺であの子達が勝手に寺の一角を改造して醸造して去年の秋に完成した御酒なの。どこからか大量の「葡萄ブドウ」って言う果物を仕入れてきてそれを搾った汁を発酵させたりして御酒にしたみたいよ。出来上がった十数本の内数本を貰ったんだけど私は何だかこの血みたいな色かなんだかいけなくて。貴女に実験台になってもらおうと思って…」

「つまり私はモルモットだな？ 第一尼さんが大酒飲みだったら問題だしな。」

紫髪の女性が溜息混じりに言う。

「モルモット？　なんですかそれ？　守矢の神社には神奈子アナタ以外に  
そのような神もお住まいに？」

もう一人の女性が質問する。

「いやいや。可愛くてでかいネズミだよ。　去年末に白蓮アンタが守矢  
に寄越した「白蓮ビヤクレン・神奈子カナコ親衛隊」の人達が連れてきたのよ。　外  
の世界じゃ科学の実験台だったり食卓に並んだり、愛玩用だつた  
りするんだつてさ。　到着初日に丸焼きにして食べようとしてたか  
ら早苗と諏訪子も連れて見物に行つただけだな。　いざ丸焼きに  
しようとしたら家の早苗ウチが「こんな可愛い動物を食べるなんて絶対  
に許しませんよ！！　代わりに私が飼います！！」なんて言ったも  
んだから…今は十二匹のモルモットが神社の中を我が物顔で闊歩し  
てるつてわけよ。」

「あらあら、あの子も生命を憐れむ心を持っているのね。　妖怪  
に対しては無差別攻撃を仕掛ける程の暴走つ子なのにねえ。　そ  
れにネズミを飼う面じゃ私達も大きなネズミを受け入れてますわよ  
？」

「その件はもう説教済みよ。　これから助け合う仲の寺と神社が仲  
悪だつたらいけないじゃないか。」

「ちゃんと言い聞かせないと困りますよ、　山に棲まう妖怪達が怖  
がってますし……、　参拝に来る人間を妖怪と誤認して攻撃なんて  
しちゃつたらもう人格を疑うわ？」

「それはない」

神奈子と言う女性が重い声で言う。

「あらそうっ？」

白蓮がおどけてみせる。

その時、部屋と襖で仕切った廊下から数人の足音が近付いて来る。足音が部屋の前で止まった時、襖の間から尼僧シスターが顔を出す。

「姐さん。先日ココに幻想郷へ来た方々が白蓮様に面会したいと言っておられるのですが、如何いたします？」

この寺の住職である聖・白蓮シズクレンは「待つてました」と言うように右手の指で肩まで降りている癖、毛を弄り始める。

「一輪、どうせ目の前にその方達がいるのでしよう？ 通せない訳も無いから通してやりなさい。それと今日から始まる妖怪講座には間に合わなさそうだから代わりに教えてあげてくれない？ 明日から出現始める春告精リリーホワイトの危険性は教えておかないと色々大変な事になるしね。」

「あ…わ、分かりました。この方達の「入りきる分」を部屋に通し次第、直ぐに講義に向かいます。あと姐さん…雲山の使用は認められますか??」

白蓮に「一輪」と呼ばれた尼僧は少し頬を赤らめながら白蓮に提案する。前に傾いた身体も何だかうねうね動いている。

「今までの幻想郷紹介講義が好評だったのは姐さんが教壇に立っていたからですよ。今日も姐さんの姿が見れる回数が増えると意気揚々にやって来た方達に対して…私なんかが出たら、皆が怒るかなあ…って思うのですよ…」

どうやら一輪は幻想郷縁起（台本）があれど自ら教壇に立つ事に自身が無いらしい。そう感じた白蓮は手元の茶を一口啜り、深呼吸をする。

「いい？ 一輪。貴女はもう少し自分に自信を持ちなさい。大丈夫よ、一輪が私に及ばないのはスペルカードの腕前だけ。第一、一輪はこの寺の警備隊の総長じゃない？ もしも兵隊さん方が貴女に反旗を翻そうものなら寅丸や今は河童谷へ行ってるけど村沙とかに言いつけても構わないのよ？ 一人胸中で解決しようと思わないでね」

一輪が退室際に放った自信溢れる返事に安心した白蓮の元に今度は三人の兵士が上がり込む。三人は今まで一輪が座っていた畳の上に覚えたばかりの正座をする。

「米空軍特殊作戦郡、第一特殊作戦航空団所属、ロイ・マツキンリー大尉 只今到着いたしました。」

「同じく、パメル・アドレー少尉です」

「同じく、サイモン・ウェイナー一等兵であります」

三人は正座しながら敬礼してみせる。インカムやその他機材が装着されているフライトヘルメットを被ってないがお辞儀よりは敬礼の方がしっくり来るようで、略帽無しで敬礼していた。

「おおお、これまた威勢良さそうな奴等がやって来たみたいだな。どうだ白蓮、一つこの者達は守矢の警備隊に回したり出来ないか?? アンタの所じゃ勿体無いぐらいだな。」

神奈子が目を輝かせながら白蓮に言い寄る。

「それは駄目よ。ただでさえ寺の人手が足りないのにこれ以上増えなかつたら……あ、忘れてました! 貴方がロイ・マツキンリー大尉ですね? お会いできて嬉しいです。此処へ来て一日目ですかね?」

「はい…此方こそですが…どうして自分達が最近辿りついたってのを知ってるんです?」

大尉は首だけで振り返り、後ろの少尉と一等兵に同意を求めたが既に二人の姿は無かった。どうやら神奈子が自分の元へ連れて来てしまったようである。大尉の目の前で無理矢理に清酒を飲まされている少尉に呆れていた時。白蓮が手元の湯飲みを持ちながら話し始めた。

「八雲: 八雲紫よ。今日の未明にいきなり私の枕元に現れて「私の家までの地図を置いておくから数人の兵隊さんを送っておいた方が良いわよ」。誰かが死ぬかもしれないからねえ」なんて言われたから、あのアメリカ人さん: キーナンさんと近辺をパトロール中の日本人さんを八雲の家へ向かわせた次第よ。まあそんな所でね…」

持たない間を繋ぐようにぬるい茶を再度啜る白蓮。先程まで綺麗で清楚な顔がいきなり暗くなり、その後、

数秒の間隔を開け、物凄い低い声で喋りだした。

「…ロイさんや…他の方達に家族や…親類つていますか…?」

「はい…自分にも妻と子供が一人。裏のホイト軍曹にも妻が、ヤコブ中尉にも妻と二人の子供だっけな?」

「確か中尉殿の子供の二人目はまだ腹の中と聞きましたが…?」

何だその程度か。そう思った大尉と一等兵は嘘偽り無く全てを曝け出したのだが、神奈子の表情が口に小鳥をほおばった様に仰天のそれを見せている。

「ちょ…それ嘘でもないって言わなかったら…」

神奈子が慌てて発言を訂正するよう促すも時既に遅し。白蓮の眼には溢れんばかりの泪が滲み出している。

「や…やっぱり…可愛いそうに…がわいぞうに…ああがびぞおにおにいいい（ああ可哀想にいいい）…」

さつきまでの物腰柔らかな状態から打って変わって、今度は大泣き女に変貌している。その泣き声に裏で待機していたクルー達もざわめき始める。

「遅かったかああ…こうなったら丸々一時間はこんな状態だぞ…慈悲深いのか、ただ単に涙もろいのか…それだけが意味不明だよこの人…いい人なんだけどなあ…」

完全に呆れ返った神奈子の隣では清酒の味に虜にされたパメル少



尉が杯を進め。目の前では大ベそをかいている白蓮にしがみつかれ身動きが取れない大尉が泣き出しそうであり。後ろではこの状況下でどう動いて良いか拳動不審に陥った一等兵。そのもつと後ろでは襖越しが非常事態だと誤認し、あまつさえドアブリーチの準備さえ始めていたのだと言つから驚きである。

### 第三十二話「White Lotus」(後書き)

ドアブリーチ：突破。特にCQBで建物や部屋へ突入するために、  
ドアや窓などを突き破る行為を指す。

久しぶりに投下です。最近は忙しくて思うように指が動かないで  
す><

第三十三話「Finder Out」(前書き)

三月一九日

午後十六時十八分

場所詳細不明

### 第三十三話「Finder Out」

白蓮の大泣きが呼んだ壮絶な突撃劇が寺院内の番兵により沈黙させられた頃。 幻想郷の外れ（ここでは人里を幻想郷の中心とする場合、北東に位置する妖怪の山と正反対の北西地点より遙か北の月が地平線に消える地点を指す）

に存在する小型浮遊船はホバリングを中止し、森林に身を隠すように停泊していた。

浮遊船の艦橋内では巨大な無線機に酷似した鉄の箱からビーブ音と共に黒点と線が刻み込まれた紙片が幾つも飛び出す。飛び出す紙片が繋がっていけば鉄箱もモールス受信機に近い物の様だ。

「艇長。 地底空間から蜂起予定の「御獲り（ミトリ）の爪」代表、河城みとりからレーザー通信が来ました。」

紙片の黒点は指向性レーザー通信機の原理を利用した物なのだが、一般的な通信機とは違い、この通信を送信・傍受するには前者側の発射線上に後者側が存在していないと通信が成立せず、運が悪いと他者の同系通信機に盗聴される可能性が有る。しかし、伝達速度と簡便性では無線のそれを卓越し、旧世代化してはいるが月の都の惑星間連絡船や警備艇の通信装備としては未だに現役の通信方法であるのだ。

先程の丸眼鏡を掛けた妖怪とは別の妖怪がレーザー通信機から飛び出す紙片を集めながら報告する。前に説明したレーザー通信法もたった一つだが弱点がある。それは解読者の心労だ。受信機からは単語毎に切断された紙片がばら撒かれる。それをまた一繋がりには纏め、暗号化された文章を解読する羽目になるのだ。解読する順番を間違えれば会話の意味がちぐはぐになり、連絡に支障を来す事がある。とある月の学者は紙片を一繋がり長の紙にす

ればこの問題が解決するかもしれないと月の賢者議会上に申した事例が幾つも有ったが、全てが棄却されている。この点では地球のモールス信号機が一枚上手のようだ。

「地底に追われた異形の者達が、早く読め。」

艇長と呼ばれた大柄な妖怪が小さな声で呟く。

「はいっ！」「貴官らの報復、地上の腑抜け達への良き目覚まし時計に成る事を期待する。だが地上に降りてきたからと戦闘を急ぐ訳にはいかない。里の妖怪達が人間を集めて私兵団体を造っている。明々後日、そいつらが河童谷で技術協力した鴨カモと葱ネギが土竜の穴から顔を出すらしい。それまではその森の中で身を隠すのが懸命だ。我々も地底に残された古い光船を鬼の目を欺いた所で盗む計画を作った、そして之を奪取次第、合流させてもらうとする。」……電文は以上です。」

電文を読み上げた妖怪は再度通信機に向かい、返信の準備を行う。

「赤河童め、天狗の里は我々のみで攻撃させる気だな？あくまでこの幻想郷を裏切るのは直前まで…何ともずるい連中だな。気に入ったぞ、彼女ほどの将さえいれば我々達が月で捕まるなんて事は無かったものだな！そうだろうお前達！我々を見捨ててまで保身に走った八雲の紫が作った難民地を掻き回す事に協力してくれた地底の同胞達がいるのだぞ！！」

艇長の問いに艦橋の妖怪がけらけらと笑う。その笑いも心から物ではなく、半ば病的なまでの笑い声さえ混じる程の笑いだった。

「しかし。まさか火星監獄を抜け出すのはともかく。火星駐屯の玉兎まで皆殺しにする事は有りませんでしたよな？ 艇長。此方へ来る予定の同形艦がまだ何隻も有るとは言え、今にも月では討伐隊が編成されている事でしょうけど？ その所はどうなのですか？」

そう言ったのは新しく艦橋へ入ってきた若い妖怪達だった。他の妖怪達とは違い、服装もダイビングに使いそうなウェットスーツを着ている。

「何も知らない癖に黙っている監獄ベイビー。俺達の世代があのウサギ達にどれだけ殺されたか知らないだろうな。まあ良い、お陰でこの船も、少数ながらお前達が使え<sup>パワーダスト</sup>る武器が入った。それだけで我々にとってはこの上ない大収穫なんだぞ。」

「俺達が使え<sup>バックス</sup>るって？ あんな屑鉄に即席の武器を付けただけの機体でアンタと同じ天狗とタメ張れ<sup>バカ</sup>て言うのかよ！？ 冗談じゃねえやー！」

監獄ベイビーの一人が恐怖にも憤慨にも似た弱音を吐き出す。

「私の息子が隊長を務める。貴様等は彼の背中を追っていれば良いんだ。既に廃品偽装を行ったアカデミアに乗り込んでいる。お前等も早いうちに山へ放り出してやるとするかな。まあ安心しろ、今の天狗達は戦のいろはも訓練でしか習っていないヒヨコ共だ。とつくに月でウサギの精鋭を殺してきてるお前等なら造作も無く攻撃活動を終了することが出来る。」

「うっ……」

反論した妖怪はぐうの音しか出ない、確かに監獄での脱獄劇は簡単且つ、結界で抑え込まれていた自分達の力が物凄い物だと実感することが出来た。しかし自分達の力は艇長の「息子」が持っていた妖力の半分にも満たない結果だったことも確かだ、何はともあれ今はおとなしくするしかない。

「わかりました。わかりましたよ艇長、そこまで安全と言うなら俺達が奪う予定の武器弾薬の二割は俺達で運用させてもらう。それまで俺達はあの古びたポンコツで我慢してあげますとしましようかね？」

そう言い残すと若い妖怪達は一斉に艦橋の通用口からぞろぞろと自分達の持ち場へと帰っていった。

「艇長、良いのですか？ あの隠れ里に置いてある武器類なんて数が知れてますよ？ それに、みとりとか言う赤河童の能力とやらが我々の最大の切り札になると言っていました……」

艇長の隣に立つ大柄な妖怪が彼に問いかける。

「なに、所詮はあいつらが生きて帰って来ればの話だ。どんなに腐っても元は俺と同じ天狗の末裔、戦闘能力もそこまで低下は起きていない筈だしな。褒美さえ約束していれば士気の向上にもつながる。良い事づくめじゃないのか？ そんなところだ……。操舵手！ 艦を完全に森の中へ隠すぞ、明日に現れる「鴨と葱」が気になる所だが此処だとあの隠れ里からも艦の居場所が見え見えだ。」

「如意！！」　　操舵手が艇長の目の前で艦の行動端末と思える小さ

な機械を弄繰り回す。

浮遊船が空中に出していた舳先を完全に森の中に隠した頃、その動きは天狗の里の外れでも見ることは出来たが如何せん距離が離れすぎています。普通の天狗では船も米粒大の大きさでしか見えな  
いのだが、 たった一人だけ、船影を捉えた天狗がいた。

「ちょっと椀！ 余所見しない！！ 折角あなたにカメラを渡そうにもそんな明後日の方向を見られちゃ渡す気が失せるわよ！！ ぶんぶん！」

烏天狗の射命丸・文は朽ちかけた木箱の中から油紙に包まれた二つの塊を目の前の白狼天狗に渡そうとしたが、二人の内の一人在窓の外に写る大樹海を睨んだまま動かないでいるのだ。

千里先を見通す程度の能力を持つ椀には事務所の窓の外に遠く写った物体が船に見えた。それもそれなりに大きい奴だ。飛行機だとすれば昨日の人間達が乗ってきたそれと比べると明らかに形状が違いすぎるし、第一に翼が無い。最近に幻想郷の空を大きな宝船が飛びまわっていたと聞いた事があるが、その船も人里でお寺になつていらしい。そう言えば、あの人達は無事に人里まで行ったのかなあ…。

「……………なんだろう？……………船？……………あ！？ すすすすいません！！！！  
カメラ……………カメラですよね！？」

「千里先を見通す能力つてのは見たくない物まで見えてしまいそうですね、 自分もそんな力が欲しいものですなあ。 椀さん」

隣に立つ曇目がからかう。 彼には椀や文のように特別な能力が



備わっている訳でもない。もつと言えば能力が備わっている天狗は隠れ里の中でも明確なのは三人（文に椛に一人は引き籠もって中々出てこない）だ。実を言えば、能力者の方がこの里にとって「異常者」なのかもしれない。

二人はそれぞれ油紙包みの塊を手に取り、おもむろに紙を破く。中から顔を出したのは黒革と銀の縁を持つ美しいカメラだ。しかし、射命丸のスマートなカメラとは違い、やけにゴツゴツしている。椛は横目で暮目のカメラを見たが、彼も困惑していた。暮目が貰ったカメラには何故かレンズが二つある、傍から見れば何だかお得なカメラだがこれも異常に大きい。そして古臭い。

「うっわ、暮目さんのカメラ二つ目だ、しかも縦についてるとかダサイですね」

「うるせえ！ 椛のだってよく見ればシャッターの部分に変な輪が付いてるじゃねえか！」

「はあ、このカメラが如何に凄いカメラか知らないのね？ いいわ、教えてあげますよ。」

二人の喧嘩をよそに文は椛のカメラをむずと横取り、説明を始めた。

「このカメラはね。外の世界の「独逸」って国で作られた「ライカMP2」ってカメラなの。本当はこの中にフィルム巻き上げ用のモーターが入ってる筈なんだけど中は空っぽ。手で巻き上げる事になるけど連写コマ数は一秒に二枚、手動巻上げと考えたら一枚程度ね。フィルム式だから靈子を集めて撮る私の写真機よりも何ばかマシなはずよ。それに外の世界じゃそれと同じ写真機は十数台しか無いわ。まあそれはこの世界に一つしかない私の写真

機なんかより劣っていると思うけどね。あと幕目のカメラは同じ  
独逸だけど製造元の違う「フランケ&ハイデッケ・ローライフレッ  
クス」って言う二眼レフの写真機よ。上のレンズで物体を捉えて  
下のレンズで目標を撮影する方式、少し視差が気になるけど、  
本体は軽いしちよつとやさつとじや壊れない。もし壊してもこの  
部屋にはストックがあるわよ。でも壊さないことね。」

機械類に疎い椀にとっては説明の「つ」の字までしか理解出来な  
かったし、幕目に到っては未だに自分に支給されたカメラがどん  
なものであるかの理解が追いついていなかった。二人にとって分  
かった事と言えば、割り当てられると言われていた個室が現像用  
の部屋になる事ぐらいだった。

第三十三話「Finder Out」(後書き)

ご意見、感想等。お待ちしております

第三十四話「The danger of shoes and the Li

三月一九日

午後十六時二十九分

妖怪の山・天狗隠れ里

「じゃあ明後日までに一面だけの一部組みで良いから各自は独自の新聞原版を製作することね。各々のフィルムは予算と余剰品の都合で二十枚まで、写真と記事の割合は三対一。まさか写真の割合が記事文章より多いようなちな新聞を作るとは思わないけどね。それじゃあね、頑張ってきてね。私もちよっくら取材に行ってくるよ。」

どちらかと言うと早口でそう話すと烏天狗の射命丸。文は馴染みのカメラと手帳を手に、窓から飛び出した。お供の烏である「文々。(ブンブンマル)」の影と共に彼女の姿は僅か数秒で米粒並みの大きさとなった。

真つ黒の翼を思い切り羽ばたかせて飛んだ為に射命丸の部屋には以前彼女がタイプライターで打ち込んだボツ新聞の山が辺り一面に散らばっている。当然彼女は自身が帰って来た時にこのどうしようもない無間地獄を自分で片づけるような事は無い。片づけをするのは射命丸が帰宅した時、真つ先に出会った人物となる。それも今に始まったことでは無いので彼女の部屋に取り残された白狼天狗の犬走。椀と同じく白狼天狗の暮目。重坊は嫌々ながらもボツ新聞の山を片づけ始める。

「流石はこの幻想郷最速の御方ですな。いやはや、その様な御方の下で働けるとは俺達も鼻が高い。」

「否、幻想郷最速は人里に留まってる「ひこつき」ですよ。アレには中々敵わないと思いますよ?」

「そうだな。鼻に風車付けたヤツはまだ俺も追い付けるが、鼻が尖ってるヤツは駄目だ。尋常じゃない速さで空気を裂きながら飛ぶからな。」

昨日、椀達が出会った飛行機は三種類いたがその全てが鼻に風車を付けず翼に二つの風車を積んだ飛行機が一つ。四つの風車を積んだ飛行機が一つ、直ぐに逃げられた二つの飛行機は鼻が尖っていた。暮目の言うとおり、風車の二機は僅かだが風を利用して飛んでいたのが、しかし鼻が尖った二つは空気を裂く轟音と共に消えていった。

「うーん、私の新聞は「幻想郷真の最速現る！」で行こうかな。里に降りればアテがあるし……」

二寸（およそ六センチメートル）の高さまで纏めた新聞を部屋の引き出しに入れながら（捨てるのと烈火の如く怒られるので）椀が咳く。

「なに！？ 椀さんは里の人間達に知り合いがいるとな！？ 是非ともそれで行きましょう！！ 明日の昼にでもそのお知り合いに取材を申し込めば何とかかなると思う。」

「へへへ、それじゃ決まりですね。」

椀が微笑する。

「決まりだ。」

暮目が笑みを浮かべる。

「「まずは片づけようか」」

その声を重ねると二人は部屋の片付けへと戻った。

所変わって、命蓮寺の大講堂。

「アザロー等、隣は宜しいです…おおお！ さっきの空軍さんではないですか！！」

「その声はもしやリベルト伍長！ 貴方も妖怪講座とやらが目的で！？？」

道中で出会った一等兵達で構成された「何だか妙ちきりんに気が合ってしまった集団」は命蓮字の中枢に位置する大講堂に到着、着席していた。

大講堂の大きさは上白沢 慧音の寺子屋に一つしかない教室の四倍はあり、大学のような微妙に湾曲した長机もある。これは繋ぎ合わせの木材ではなく、一本の木から削り出した物らしい。椅子は長机の余りから作った物で。机の豪華さとは反比例し、かなり作りが粗い。壁には幾百の小さな穴や水しぶきのような染み。他にも蛙の引っ付いた跡に似たものや錨の模様が凹刻されている箇所もある。フェリックス一等兵に聞けば此処は未だ寺が空の宝船をやっていた時期、宝物目当ての巫女や怖いもの見たさの魔法使い、妖怪退治訓練中の幼い神様が乗り込んで来た際にその船の船長を務めていた一人の妖怪が応戦した場所の一部だと言っていた。

その机にはちらほらと他の兵士達の姿が見え、それぞれが講義開始までの暇つぶしを愉しんでいたようであった。

「今日は出席が少ないようですね。」

ラデック伍長が呟くがその言葉を聞いていたのはリベルトのみであった。他の五名、ジャック、ハフマン一等兵・ジェフリー、フィブスター一等兵・レーガン、グレイン一等兵・フェリックス、ローゼンフェルド一等兵・リノ、アザロー一等兵は既に自分達の椅子に嫌気が差し、座っても四つの脚がぐらつく事無く、落ち着けるような椅子を求めて各方面に散らばっていた。

「そうですね、明日に行く紅魔館で開催する屋内パーティ（食事会）の準備でかなりの人数が雇われてますし。此処（命蓮寺）に残っているのは警備当直の番兵と新編成された春告精観測隊の方達に……あとは極端に料理が出来ない奴。ですかね……」

リベルトとラデックは少々の時間を雑談で済ませ、散らばっていた者達がようやく帰って来た時、講義開始のサイレンが鳴り響く。そのサイレンを聞いた途端、兵士達はまるで天敵に出くわした小鳥の様にビクついている。

ジャックがリベルトに聞いたところ、サイレンは森に不時着した独逸の急降下爆撃機Ju87スツーカーの部品を使っているらしい。なるほど、ジェリコのラッパなら大戦中の兵士は一発で目を覚ますだろう。

サイレンの鳴る中、講堂前の扉から大きな書物を抱え、雲の様な煙を辺りに纏った一人のシスターに似た女性が教壇に立つ。その姿は本番直前に一人のみを残して全員欠席した聖歌隊のようで、彼女もどこか忙しなさそうにもじもじしている。

「なあ〜んでえ〜い。白蓮様じゃないのか〜い。」

割と彼女に近い英軍飛行士達のリーダーが落胆する。同じよう



な声が彼方此方から聞こえる。

「ええ〜っと…今日は姐さん…あ、聖白蓮さんは突然の来客の為に講義が出来ないとの事で…今日はこの私、雲居 一輪と雲山が明日に現れる「春告精」についての説明を…おお行うよよてていですっ！」

(…ああ〜いかん…噛んだああ…もう駄目だ…)

最後の最後で気を抜いた一輪は取り返しのつかない噛み方をしてしまった事から既に出上がっていた。彼女にプライドの欠片も無ければ只のドジ娘で済まされたのだがそうは問屋がおろさない。

(待て待て待て待て…まだ慌てるような時間じゃない…今のは出鼻を挫かれたただだって…港口で難船さえしなければ万事上手くいくって雲山も顔で言ってる、よし！！頑張れ一輪！負けるな一輪！ファイトだ一輪！！)

「では、幻想郷縁起の第……だいいい〜…あ、あれえ〜おつかしいなあ〜。明日から発生するのは焼き豆腐とか飛竜頭じゃなくテリリーホワイトなんだけどなあ…」

彼女が開いた和綴じ本に記されていたのは妖精や妖怪の詳細ではなく、豆腐の料理方法等が高級度毎に六段階で区分けされている、作り方の解説が事細かに説明されている。

そう、彼女が持っていた和綴じ本は江戸時代初期に著された醒狂道人何必醇こと曾谷学川そだにがくせんが綴った「豆腐百珍」だったのだ。以前に一輪が状態が良いこの本を人里の道具屋で見つけ、半ば衝動買いた物なのだが、いざ手順通りに豆腐料理(もちろん肉類は使わない)をしてみたところ之が白蓮に好評だった。それが一輪

の心の何処かに火を付けたらしく、毎夜に渡って独自の豆腐料理製作の研究を行っている程である。今回はその研究熱心の火があらぬ方向に飛び火したようである、所謂「ドジッこ」だった。

「これちがう…あ、こつちだこつち。では気を取り直して幻想郷縁起の第三頁を開いて下さい。今回の講義は只の妖精では無い「リリーホワイト」についてです。この妖精は春分の日頃である三月二十日から二十一日にかけてこの幻想郷の何処から発生する出所不明の妖精です。彼女達は気紛れながらも役割を持ってます、その仕事内容は各地に春を知らせる事なのですが別に大した仕事もせず空中をぶらぶら飛び回っているだけなのです。それがこの妖精の仕事内容なのですよ！これが！！」

熱が入った一輪は後ろの壁に貼られているリリーホワイトの発見座標地図を何度も叩く。地図は人里の命蓮寺を中心に端から正方形の格子状に座標線が引かれている。ロコミで調査した去年の発見情報を分布させた赤丸は里に集中しているがそれでも東に位置する巨大な湖の方がかなりの丸の数がある。

「しかし彼女達は自分や仲間達を攻撃されると極端に攻撃的になるのです。明日の早朝にこの寺から調査団が出発する予定だそうです…くれぐれも自らの射撃の腕を試そうなんて思わないでくださいよ？」

「自分達のサンダーランドも米兵達のカタリナも非武装仕様だ。そもそも同軍の重複した軽火器の一挺は河童達に預けたんだろう？もしも攻撃されたら湖に着水して紅魔館へ避難する予定だが？」

英軍飛行士のリーダーが言う。

「そう？　なら良かった。あんなデカイ船みたいな飛行機が着水したところで怖いもの知らずの氷の妖精に全員が凍死するかもしれないから気をつけてね。ではこのへんで私からの講義は終了します。後時に姐さんから調査団に対しては直々に観測路等が聞かされると思いますので、それまで解散！！」

一輪の心内は充実しきっていた。姐さんが後々に本格的な説明をするとは言え、前座はまずまずの出来だったと思っっているし、

大衆向けには「攻撃だけは絶対にするな」とだけ教えれば御終いの所を春告精リリーホワイトの詳細まで教えてあげたのだから。となりの雲山も笑みを浮かべている。

姐さんが言っていた「自分に自信を持って」の言葉が良く分かった気がした一輪であったがその嬉しさが仇になり、彼女の後頭部へと目掛け飛翔する黒い影の存在については理解しようともまず不可能であった。

第三十五話「Luna del cacciatore」(前書き)

日時不明

月面戦争第一戦線

八番クレーター

### 第三十五話「Luna del cacciatore」

「……い……おい……しつかりしろ！！　おい！！　立て！！　まだ完全に撤退が終わった訳じゃねえんだ！！　寝させねえぞ！！」

私気が付けば辺りは真つ暗闇だった。その視界の中から響くような怒声と爆発音が聞こえる。暗闇は段々と光を取り戻すが怒声と爆発音だけは未だに耳を休ませてはくれない。

埃だらけの眼が見た景色はこの世の物とは思えないほどの殺風景を極めるものだった。ゴツゴツした灰色の岩と幾人も妖怪が身を隠している窪地以外には何も無い。強いて言うなら地面の所々に付着している赤い液体ぐらいだ。空も自分自身が吸い込まれそうな程に黒く、夜と勘違いしてしまいそうになるのだが、砂の地面には陽が照っており見上げると太陽の光が見え、昼のように明るい。しかし太陽の光は何か巨大な物体によって阻まれている。目を凝らすとその物体には雲があり、海があり、地上があるのだ。

「馬鹿野郎！！　ずっと上見上げてたつてどうにもならねえんだよ！！　武器を取れ！　武器！！　ほら来るぞ！！」

私が視線を地面に戻すと目の前には一人の妖怪が立っていた。

彼は必死に砂だらけになった鉄と木で出来た短棒の先端に尖った金属片を巻きつけている、そして彼はこの小径に二人がいる事を気が付かずに近づいてくる銀髪を生やした頭に兎耳をつけ、緑色の服を着た身長が私達の腰辺りまでしかない少女の顔面目掛け思い切り短棒を突き刺した。その少女は突然の激痛に叫びを上げながら左手で鼻腔から後頭部に突き出した棒の在り処を探る。右手はその手の平に持つ棒から金属塊を明後日の方向に撃ち出していた。

「仕留め損ねたか！！ お前の分の手銃を借りるぞ」

白い水干をどす黒い赤に染めた妖怪が私の視界外に落ちている、少女に刺さっている短棒と同系の短棒を手に取り、持ち手から伸びる三日月状の取っ手を思い切り引いた。短棒からは物凄い速さで金属片が撃ち出され、彼の目の前で両膝をつき号泣していた少女のこめかみに命中した。

金属片は少女の後頭部をもぎ取り、辺りにはピンク色をした脳漿や大脳の破片、吹き飛んだ下顎に生えていた歯さえも吹き飛ばした。それを傍観していた自分自身の目にも脳漿が飛んだらしく、自分のものと思われる腕が目を拭っていた。

私がようやく目から全ての血液を拭い取った時、視界の奥にある窪地から傷だらけになった数人の妖怪が勢い良く飛び出した。彼らが飛び出した方向は絶命した兎の少女が来た方面と真逆であり、そして彼らを追い越す光が何条も彼ら目掛けて飛来している。

「此処が陥落すれば残りは結界合流地点だけになる、いよいよ敗走って訳か…行くぞ戊こ…うおお！！」

自分の手銃を使い少女を殺めた目の前の妖怪は発言の途中で背中から鮮血を噴出しながら窪地の斜面に倒れこむ。意識は残っていたので致命傷では無かったがあまりの痛さに呻き続けている。

「阿虞湾！！ しっかりしろ！！ 弾は抜けてるぞ！！！！」

自分の物と思われる手が目の前の妖怪に開いた銃剣を押さええている。そして妖怪の名は阿虞湾と言うらしい、それでも自分自身は誰なのか、どうして此処にいるのかは未だに分からない。

「そこまでだ天狗！ 大人しく投降しろ！！ 投降すれば命の保証だけはしてやる！」

顔を上げると目の前には二人の少女の姿があった、二人は先ほどの少女とは違い頭部には鍋のような兜を被っている、それにもっている手銃も肩当てが取り外されてあたりと好き好きに改造が施されていた。

「答えが無いね、 とつくに本隊の連中はあの固まりを狩って楽しんでるのに私たちときたらこんな【木っ端】天狗を相手にしちゃうんだなんてね 早く撃っちゃいませよ」

「そうね、 私がやる。 これで私の確認殺害戦果は十九……」

阿虞湾を撃った少女は持っている手銃から出ている青白い煙りを払った後、照準を呻く阿虞湾の隣りにいた自分に合わせる。

「不幸な物よねえ。 一人の我が儘に従って遠路はるばるこんな所まで来たのに命運尽きちゃうなんて…せいぜい木っ端天狗らしく死んでください……」

少女は彼女自身の行いを悔いた。 目の前の妖怪に言葉なんて掛けずにさっさと殺しておくべきだったのだと。 しかし少女は自分の過ちを自身の頭脳では理解出来ないまま絶命した。 人形のように端麗な顔と光り輝く銀色の髪の毛は眼前から伸びた太い腕と手の平で握り潰されていたのだった。 西洋人形に似た真っ白な肌は只の血の肉塊に成り下がり、 銀の髪も血に染り真っ黒な空中へと消えて行った。

「ひ…ひい、ひひいつ、この化け物おお！！！！ よくも、よくもフリージアを……！！！！」

もう一人の少女は目の前で戦友が造作も無く死んだ事を直ぐに飲み込もうとはしなかった。もし飲み込んでいるのであればその場で天狗に長い連射をかまさず、手銃を捨てて逃げ出していたらう。

一定期間の訓練を受けた兵士でも先頭時に不安定な精神状態だとたとえ銃の引き金を引けても狙いが定まらないのはお約束であり、彼女もまた然りである。手銃から放たれた銃弾は視界のすぐ横や真上を抜けるばかりで一向に命中しない。それとも自分の物と思える体には痛覚が無いのかもしれない。その体は自分の意思に従わずに目の前の少女を掴みあげ、このような事を言い始めた。

「俺の事を木っ端天狗って言ったな……」

「な！ 何の事よ！？ 私はそんな事を言っていないってば！！！」

少女はこの期に及んでまで嘘を付いてしまった。兎とは何とも狡賢な生き物だ。世渡り上手とも言えるのだが今回ばかりは上手く行きそつに無い。最も正直に言えば開放されるとも思えないのだが。

「俺達が出陣前デルに一人の妖怪が激励に来てくれたんだ。その妖怪は地球、東の大陸に居を構えている方だな。そんな彼「女」が言ってくれた言葉がある。【鳥の将に死なんとする、その鳴くや哀し。人の将に死なんとする、その言や善し。】彼女はその地で生まれる筈の偉大な学者に仕える弟子達にも教えるんだって言っていた。意味だと？ 教える必要は無い。兎が将に死なんとする場面では最後まで嘘を付くんだって知れたからな。ハハハ……」

私がその少女の背骨を折ろうとした時、視界は惨劇から木製の



天井へと変わっていた。少女の姿も見当たらず、視界の端から覗き込んでいた顔はとも見慣れた者の顔だった。

「所長！ 魔ワキされてましたよ！？ お薬を切らしていたんで部下が永遠亭まですつ飛んで買って来て貰ってますから心配いりません。

しかし何だったのですか？ あの変な寝言は……」

そう、「私」と言うのは誰でもない九天の滝警備詰所長を務める戊國だった。つまり今までの夢は戊國自身が見ていた夢になる。戊國が魔ワキされているのに気づいた同じく白狼天狗の狛崎 董は所長が持つている常備薬が切れているのを確認するや非番の部下達に同種の薬を迷いの竹林に建つ永遠亭まで取ってくるよう命令していた所で戊國が目覚めたのだった。

「寝言？ なあ狛崎、どんな寝言だったのか教えてくれないか？」

「そうですねえ……【くの…に…なんとするや…その…】とか何とか…前にも山の近くでこんな言葉を呟いてた妖怪がいたようないなかつたような…確かその妖怪は人里で暮らしてるとか何とか…」

「そうか。」

戊國はそう言っただけでもう一度眠りに付いた。

所を変えて此処は命連寺の別堂大廊下。

「ねえねえ…その所を頼むよお。私の靴を探してくれないかなあ、ナズくうくん…床が冷たいんだよお」

「そんな事を言われても困りますよ星様。彼らは食べ物以外に反応するのは稀なんですから…」

命連寺の廊下でそんな会話をする泥棒ネズミと面識の無い寅柄女の傍らをづかづかと歩く数十人の米空軍兵の一団。彼らの先頭を歩く空軍大尉のロイ・マツキンリーは白蓮に渡された簡素な地図を頼りに一つの部屋へと足を進めていた。

その部屋には命連寺建立前に幻想郷ユクに流れ着いた米兵を纏め上げていた人物がいてと白蓮が言っていたし、B-25の機長であるアレックス少佐も其処へ通されているとも言っていたのでこれといった緊張は無かった。

「さすが米兵達の統括をしていた方々の区画ですね。そこら中に色々な時代の佐官がウジャウジャ沸いてますよ」

マツキンリー大尉の右後ろを歩くパメル・アドレー空軍少尉の言う通り、寺院内の廊下には丁度良く糊が効いた剃刀のような袖を持つ汚れ一つ無い制服に身を包む欧州各国軍高級士官の姿が入り口のそれよりは多い。その彼らがまるで小汚い空軍兵を見るような目で見つめているのだ、上がり症の大尉は妖怪山で感じた緊張とは一味違う緊張を起こしていた。

「こ…この部屋だ…あああ開けるぞおお…」

彼らが相対しているドアは味がある飴色の艶ニスと金箔を使用した象嵌が満遍なく配されており、表札には『L・G』の焼印が刻されている豪華絢爛を極める物だった。

ドアを開ける前には数回のノック、これは常識の範囲内だ。

相手から入室を促す声が聞こえてくれば三人ほどの丁度良い随行人と共にドアを静かに開ける、開けたら次に待つのが官姓名番号を口上すればマナーはクリアー。大尉の頭脳内では既にイメージトレニングを終了している。後は手順どおりに行動すれば大丈夫だ。

そして彼は二回のノックと在室中の人からの声を聞く動作を実行した。金メッキをふんだんに使用したドアノブを回しながら押し戸をゆっくりと開く。

「失礼します！ 米空軍特殊作戦郡所属第一航空団大尉、ロイ・マッキンリーであります！！！」

「俺に挨拶されても困るのだがな…大尉。丁度貴官の右隣にいるのがこれから俺達を指揮してくれる御方だそうだ。何でもかなり昔から此処にいらっしやるそうで…そうですね？ 中将殿？」

「あ、アレックス少佐。右…ですか…！！！！！」

大尉の右隣に立っていた人物は黒のジャージパンツに「中将」と漢字が印刷されているTシャツ。手には湯飲みに注がれたコーヒーを持っているし、第一にその顔に驚愕を隠せなかったのだった。

第三十五話「La luna del cacciatore」(後書き)

La luna del cacciatore

「伊語で「狩人の月」

鳥の將に…

「孔子の弟子達が作った諺、鳥が死ぬときに鳴く一声がとても哀しいのと同じように、人が死ぬときの言葉は嘘偽りが無いと言つ事。」

第三十六話「Good Conduct Medal」(前書き)

三月一九日

午後十六時五十八分

命蓮寺・別堂

### 第三十六話「Good Conduct Medal」

「あ……ああ……も、もしや貴方は！　ダルグレン中将！？　ままままさかそんな筈は！？」

「そこまで驚く必要は無いじゃないかね？　ロイ君、まあそこに座りたまえ。　君の分のコーヒーも淹れるよ。」

大尉の許に現れたのは彼の所属する米空軍特殊作戦郡第一特殊作戦航空団広報部局長であるマイク・ダルグレン空軍中将その人だったのだ。　部屋のドアにある刻印は米空軍中将を意味する「Lieutenant General」の頭文字を抜き取っている物らしい。

ダルグレン中将にソファに座るよう促された大尉はイメージトレーニング通りにゆっくりと芯材の固いソファに腰を下ろした。　緊張している大尉を見て微笑した中将は下腹部にある皮下脂肪で純白のＴシャツをうねらせながら流しに置かれている湯飲みを使い回しているペーパードリップ方式でコーヒーを淹れ始めた。

「君とこうして間近で合うのは叙勲式以来だね。　覚えてるよ、私が立ち会った叙勲式で立ち居眠りをした尉官は君が最初で最後だったからね。　もう何年前かな？」

少しずつ滴るコーヒーの中で最後の一滴を見極めたダルグレン中将は流し台からマッキンリー大尉の手前に設置されている小さなブリキ製のテーブルにそのコーヒーが入っている湯飲みをそっと置く。

「いえ…あの時は航空章と海外派兵従軍章がいつぺんに戴けると言われてから叙勲式までの休日は延々と酒を飲んでいましたからでして…確か整列中には既に頭がふらついて、そして中尉だった自分が呼ばれた時に慌てて飛び出したものですからずっこけたのですよね。しかもそれは去年ですよ？ お覚えでないのではありませんか？」

「おいおいマジかよ、いま機長は誰だと言ってた…」

「ああ聞いてた…あの北ベトナムを灰にした確認面積が全B-52中で一番大きかった「マッドモスキート」機の機長を務めていた人だろ…おっかねえなあ…」

廊下でざわめく兵士達をよそにマツキンリー大尉は湯飲みを掴んでゆつくりと鼻の高さまで上げて軽く一呼吸、コーヒーの独特な香りの中には砂糖の甘い香りは含まれていない。彼はまさかとは思っても流しを見ても砂糖の容器と思える物体は見当たらない。となればこのコーヒーは無糖であり、しかもミルクさえ入っていないのだ。こんな魔法じみた土地なら薪拾いに出た森の中でお菓子の家を見つける事も休暇中、故郷の西海岸でロブスター料理店を血眼で捜したぐらいの根性で捜せば可能なものだとは思うがこればかりはそう簡単にいかないようである。それに最終的にはロブスター料理店も見付ける事は出来なかったのだが…

「中将殿？ あの…自分、ブラックは苦手なのですが…」

「そいつはすんなり飲めるぞ？ まあ飲んでみる大尉。俺だつて…まあフィブスター家は代々ブラックは苦手なのだがな。」

大尉の右向かいに腰掛けるB-25の機長、アレキサンドリア・

フィブスター空軍少佐はそう言い終ると湯飲みに残っていた残りのコーヒーを一気に飲み干す。ブラックを嫌う人が無糖のコーヒーを飲んでいるのを見て決心がついた大尉はええいままよと磁器製の真っ白な湯飲みに溜まる薄い茶色をした液体を少しだけ口に含む。温い液体を口の中で弄んだ後、ごくりと飲み込む。その味は今までのコーヒーとは違う、まるで違うものだった。

「あ…甘い、何でコーヒーが…中将殿？ この豆は！？」

「ん？ ああ、確かサルバドルコーヒーだよ。グアテマラ、ニカラグア、ホンジュラスに囲まれた小国のコーヒーでね、此処からちよつと行った所で荷台に大量の豆を残して頓挫していたトラックを見つけたのだよ。」

「なるほど、エルサルバドル救世主の国からの贈り物って訳ですね？ でもどうして南米のコーヒーが大東亜圏で手に入るので？」

「少佐、此処はもう大東亜なんて名前では無いとさっきも説明しただろう…。あと大尉、実は私はこの時を首を長くして待っていたのだよ。」

ダルグレン中將は大尉の向かい正面のソファに腰掛け、急転深刻な顔へと変貌した。

「もうキーナン上等兵から見せられたとは思いますが、君達は既に外界の住人ではない。実際は私のように生きてはいるが帰るべき軍も国も無い。家だって無くなっている筈だ、君達が磁気嵐に飲み込まれた後にクリステイと近辺でパトロール中だったイージス艦で残骸の捜索に当たったのが見つかったのはウィルバー大尉のF-16に搭載されていたパラシュートのみ。後日捜索を続行し



よつと最寄の軍港へ寄港したのだが二度目の搜索は政府からの命令で許されなくてな、「米海軍は空軍の同志すら見捨てる」と雑誌に書かれる始末だった。そんな時に私はフロリダのハルバード基地で君達全員分の善行章を持ちながら記者団に会見を開いていたんだ。その時に直下型の大地震が起きたんだよ、これは後で知つたが基地周辺を震源にしていたらしい。私が目を覚ました頃には会見室ごとこの世界に流されていた、あれは確か明後日の三月二十一日のする寒い日だったよ。記者団は四十人近かった全体の半分近くが既に事切れていたし、パニックになった記者達から順に妖怪達の餌食になっていったのさ。私とその警護をしていた二人の兵士は拳銃を持っていて襲われなかったがな：目の前で喰われて行く無力な記者を見て思ったよ。「この蒼い星に生きる世界の本当の主人公は人間なんかじゃない、人間の中にある「想像」そのものなんだ」ってね。それから数ヶ月、一人また一人と消えていく人間達は互いに励ましあいながらやつとの事で一つの民家にたどり着いたんだ。もうその時には記者が六人になっていたし、警護の拳銃は既に弾切れ、私のリボルバー拳銃も一発だけ実包が入っていたぐらいだ。私達は民家のドアを必死に叩いた、これで人間に会える、やつと仲間に見えるんだ、って皆が思っていた。それでもドアを開けて出てきたのは魔女だった。今でも覚えてるよ、白黒を基調としたいかにもって感じの古めかしい服に箒を持つて三角帽子を被つてた年端もいかない少女だったんだ。記者たちは絶望してしまつてね。記者の人達、よせばいいのに手持ちの棒で殴りかかっちゃつてさ、皆殺された。次は自分達の番だと覚悟決めてたのだが、その魔法使いは「私には年寄りを躊躇無く殺すほどのサディストじゃないんだぜ」と言つたきり無口になつて私たち三人をこの里まで、この寺へ連れて来てくれたんだ。そして白蓮様とこの幻想郷についての説明を聞いた後に話し合い「漂流者の保護及び居住スペースの確保」を約束してもらつたわりに「有事の際の軍事警備」を約束させて貰つた。それからと

言うもの、兵器と兵士収集はとても簡単だった。この幻想郷のそこら中に兵士の戦死届けが落つちていたんだ。過去の分の戦死届けに書かれている年はそれぞれ違うが、日と時間だけはピツタリに此処へ漂流してくる。あとはその時間に自作の簡易飛行機や里の妖怪に探してもらったんだ。それが「四年」続いて、今日が来たんだ。待っていたよ？」

長話を終えた中将はゆっくりと立ち上がり、大尉が入室したこの部屋で一つしかないドアに向けて話し始めた。

「ロイ・マツキンリー以下：パメル・アドレー少尉、ミゲル・ノイマン伍長、ハロルド・レザーバック上等兵、サイモン・ウエイナー等兵、ヘンメ・H・マーカス軍曹、デイド・ハンマー等兵、レーガン・グレイナー等兵、ヤコブ・マーレイ陸軍中尉以下、ラリー・ホイト軍曹、フォード・L・ロメリー二等兵、アドニス・マンズフィールド兵長、パディ・リッケンバッカー等兵、アシュレイ・G・ハーキュリーズ兵長。ウィルバー・トンプソン、ジャック・ハフマン、ジェフリー・フィブスター：前へ！！君達の善行章はこの四年間大事に取っておいたんだ！！」

「中将殿！！ウィルバー大尉以下二名とレーガン一等兵は現在欠席です！！」

「へ！！いまフィブスターって言ったか！？なに！！？」

会話から疎外されていたアレキサンドリア・フィブスター少佐は自分と同じ珍しい苗字に驚く間もなくドアからマツキンリー大尉の部下とヤコブ中尉と彼の部下がぞろぞろと入室する。そのまま少佐は人波に飲まれ、廊下に飛び出してしまった。

「どうしたどうした？ 中将の部屋がやけに五月蠅いぞ？？」

「どうしてあんなに人で埋まってるんだ？」

周囲の部屋から続々と現れる高級士官達は口を揃えて同じ質問を互いに繰り返す。

「あ、まさかあいつ等が中将の言っていた「救世主」って軍団か！？」

「確か中将は春告精と共に現れるとおっしゃっていたな。そうである確率が高い」

士官達は各々で自由な結論を見つけた後でそろそろと自分の個室へ戻り、寛ぎの時間を再開した。

「ほらほら一列に並べ〜。叙勲式がはっじまってるよ〜！！」

どうやら中将は広い所で叙勲式をするという思考は抜けていたらしく、狭苦しい個室内で叙勲式を始めてしまったようである。

その行動が後でとてつもなく面倒になることを誰も知ることは出来なかった。

第三十六話「Good Conduct Medal」（後書き）

これからテスト期間に入ります（実は三日後から…）、更新が難しくなりますので益々更新速度が落ち込むと思います

第三十七話「対空腹絶頂最終防衛線」(前書き)

三月一九日

午後十八時三十分

命蓮寺・別堂

### 第三十七話「対空腹絶頂最終防衛線」

暖房も満足に動作していない中将の個室は室内に揃った米空軍兵の面々へ中将自ら一人一人へ善行章（献身的活動を行ない著しい自発性を見せた者、つまり志願兵や三年間の規律違反をせずに勤務した軍人に与えられる。また戦死（殉死）した軍人には無条件追贈される）を渡していたので、AC-130Hのクルー全員が貰い受けた時には彼らの興奮交じりの熱気で部屋内の温度・湿度は共に快適を通り越し所謂「ムンムン」状態に陥っていた。

「中将殿。紅魔館に滞在中のボクスベルグ少将より無線です。と言うよりこの部屋暑っ！！暑いじゃなくて蒸し暑っ！！今は冬ですよ！？」

「セルフ暖房機だ、私の部下達って言う名のな。で、あのチエスの王者が何だっかって言ってたんだ？」

「ええ…まあその…」

中将の部屋に現れた壮年の米空軍兵は年季が入っている銃声防音用耳当てに似た大きなヘッドセットを付けている。この寺院の中にもそれ相応の通信施設があると言う事らしい、マッキンリー大尉はレーガン一等兵の無線訓練の場に最適と思っていたが通信施設の暖房調節は滅茶苦茶らしくその米兵ですら大戦中の軍支給品であるウールセーターを着、その上からこれまたよれよれのトレンチコートを羽織っている。寺院の外にいた軍人ですら既に薄着が多いというのに何故この通信係は今から業務用冷蔵庫に突撃でも敢行しそうな服装をしているのかを考えている暇までは無かった。

「無線が入って来た時には既に興奮しておりまして「ヤパーニツシユ（１）！！ ヤパーニツシユ！！」と引つ切り無しに受話器へ向かってシャウトしていましたり…無線機片手にチェスもやっていたらしく「ちよ、ちよと待て！！ 白と黒が入れ替わってる！？ それに私の持ち駒がキングとポーンだけにすり替えられてるって鬼畜すぎじゃ…さては貴様、また不利になったからって時間を弄ったな！！ 許さん！！」のような私語が混じっていたので多くは聞き取れませんが…大体の内容を推測すると少将は中将殿と早く話したい一心で無線を掛けただけだと思います。周波数も将官専用回線に設定してある無線機を積載したセダン・キューベル（２）ではなく一般回線の無線機を積載しているシュヴィムワーゲン（３）で送信して来たって事なので…」

「また防衛線の設営監督をおサボリして湖を走り回っていた訳か…まさかシュヴィムの武装は付いていたままか？」

中将の腰から生える二本の足はそろそろ彼自身の体重を支える事に嫌気が差したようでも中将はその細い足を休めるように傍の椅子から伸びる背もたれに手を置く。

「はい、あのシュヴィムワーゲンは独逸国防軍工兵隊に配備されていた同車の中で武装親衛隊に徴用された物の一つです。たしか助手席にマシーネンゲヴェーア34（MG34）が備え付けられていました…」

「そうか、まあ紅魔館防衛線には車載機銃とかの寺院に残留する使用可能な装備類をかき集めているから趣味のシカ撃ちをする余裕も無いだろうが…取り敢えず私はここにいる彼らと里にいる手伝い志願の妖怪方を連れて明日の午前中に紅魔館へ向かうからついでに事の真相を確かめにも行くかな。もう今日の受信当番はしな

くて良いぞ、 独逸兵達と違って夕飯はしっかり採っておいてくれ。あと君達もだ、 腹が減っては戦「も」できぬ。 白蓮様の口癖だ。 食事を探るのはこの寺のモットーに近い。 それに…はぐれた三人は見つけ次第私の部屋へ来るように言っておいてくれ。 今日は本当に「有り難う」、 あと君らの中で尉官以上の階級所持者は食事終了後、 一階の食堂から階段を使い地下居住区の七六三号室から始まる個室を空けてあるから好きに使ってくれ。 下士官と兵階級は同居住区の八九〇号室からの雑居スペースで寝泊りしてもらう。 質問は各所の監督官へ、 以上。」

「はい、 失礼致しました」

「了解しました中将殿」

「了解ですダルグレン空軍中将殿」

「了解です、 ダルグレン中将。 あと佐官は何処で寝れば良いのです？」

壮年の米兵とマツキンリー大尉、 ヤコブ中尉、 アレックス少佐は姿勢を正し一斉に敬礼した。 それに合わせ彼等の後ろでこつた返す部下十数人は姿勢を正し整列する、 一般的な隊敬礼の方法だ。 敬礼を確認した中将は彼らを見据えてから軽く答礼する。 数秒間に渡りその状態が続き、 まず中将が元の姿勢に復しその後、 に敬礼を続けていた四人が姿勢を崩す、 その後に彼等の部下が姿勢を崩した。

明日の朝に滑走路の掃除をすることを約束した大尉達はB・25のクルーと別れ壮年の米兵に連れられ食堂に向かっていた。 すっかり暗くなってしまった幻想郷の空を映した擦りガラスがはめ殺し



状態で収められている丸窓に視線が行っていた大尉が暇そうだと思つた米兵が徐に口を開く。

「あのお…大尉？ 申し遅れました。私の名前はエルキン・イサク曹長と言います。遭難はマーケットガーデン作戦従軍時、ここでは自己紹介に遭難場所も教えるんですよ？」

「エルキン…フィンランド系だな？ 私はロイ・マツキンリー大尉…は良いか。遭難場所はフロリダ近海の上空だな。海外派遣帰りの演習時に迷い込んだんだ。」

「おお、フロリダですか。私は母方からフィンランドの血を、父からイギリスの血を受け継ぎました。生まれはやつとこさ開拓を終えた西海岸、ロサンゼルス郊外でして…」

「ロサンゼルス…えっ？ まさか私と一緒になのですか？」

「えっ？ 下士官に敬語ですか！？ …ああ生まれた地が一緒なのですか、それは奇遇ですな…まだ色々と話したいのですが…じつはこのドアを開けると食堂へ到着します、もう目の前が食堂なんです。食堂と将官居住スペースの距離は限界まで切り詰められておりまして将官の歩行に負担が掛からないようになっていのです。結局を言えばただのワガママなんですけどね…私も皆と同じく断食推進派なので失礼します。初見さんならまずその日の食事は無料で食べれますので、それでは。」

エルキン曹長は直ぐにでも賑やかな声が聞こえてくる地下居住区へ戻りたいのだろう。両開きの扉に並列するように作られた地下へ続くかび臭い階段を猛スピードで降りていく。曹長が段を踏み外し階段の踊り場でダイナミックに転がる姿を見たパメル少尉が糸

の切れた操り人形だと笑っていたのを無視するかのように大尉達は  
今まで勲章を受領した興奮に抑制されていた食欲と空腹感に駆られ  
扉を開け、食堂のテーブルへ歩を進めていたのだが、彼らが見  
た景色と言うのは。

「違う違う！ それはボルシチじゃなくて、あくまでビーフスト  
ロガノフなんだよ！！ あと人の料理を勝手に食うな！！」

「うるさいよ！ こちら喰えればもう何でも良いんだ！ もつと  
寄越せ！ もつと！！ あと先に俺の領地を侵犯したのはラデック  
さんの方だ！！」

「アザロさん落ち着いて… パスタは明日死ぬほど食べれるじゃない  
ですか…」

「落ち着け?? これが落ち着いてられるかってんだ！！ ラデッ  
ク伍長が俺が注文した「なんか美味しい惣菜が入っている揚げパイ  
」を喰いやがったんだぞ！！ 君達がやってる賭けの禁止ワードな  
ヤツだ！！」

「だから後で甘いピロシキを買ってやるって言ってんだろっが！  
フェリックスも口出しするな！ ピロシキかお前は！！ あとそこ  
の三人は主食も買わないでどうしてパンプーシユカ（4）ばかり喰  
ってんだよ！！ ピロシキ喰え！ ピロシキ！！」

「伍長殿…今ので四回の禁止ワードが…これは多分自分の勝ちです  
ね！」

「!?!? 嘘だろ!! ああクソ!!……」

大尉達が見た景色は誰もいない食堂で大声を張るソヴィエト兵二人とやけ食いを起こしているイタリア兵とおろおろしながら彼を止めようとする弱気なソヴィエト兵が一人ずつ。その隣でハムスタのように小さなパンを頼張る三人の米兵と独逸兵の姿だった。その米兵には大尉にとって見覚えがある。

「美味しいな、パンプーシユカ？ だっ たっ け、名前」

「ベルリーナーに良く似てるんだ。故郷の謝肉祭を思い出すんだ……」

「このパンの作り方を覚えれば慧音先生と……へへへ……」

「………帰るぞ………今日は断食の日にしよっ……」

その異様な姿に食欲も空腹感も吹っ飛んだ十数人は背中から出る詰らなさそうな匂いをパンプーシユカの甘い香りに織り交ぜながら地下へと続く階段を下りていったのであった。

## 1、ヤパーニツシユ

独逸語で「日本語の意味」

## 2、セダン・キューベル

独逸軍に徴用されたキューベルワーゲンの内、ヴィートルボデ

イのままで使用していたタイプ

3、シュヴィム・ワーゲン

キューベルワーゲンの水陸両用型。 珍しいバスタブ型の車体を持つ

4、パンプーシュカ

ウクライナの伝統料理、丸いふかふかの小さな揚げパン。 美味しい

### 第三十七話「対空腹絶頂最終防衛線」(後書き)

語句の説明を本文へ移動させました。

カレーパンはピロシキの日本版アレンジなんだそうです。

仏教施設の中で肉入りの食べ物に有り付けるのにも理由がありそうです…

(作者は自分だろうか)

第三十八話「Search・Lily」(前書き)

三月二十日

午前四時二十一分

目無し川・中流部

### 第三十八話「Seach-Lily」

弓を張った様に鋭く尖った月は遠く西の空へと姿を消し、代わり  
に昇る淡い紅色の太陽が森の木々を紫に染め始める時。里から二  
里ほど北上した場所に流れる目無川に停留していた一機の飛行艇が  
静寂そのものである幻想郷の空へと飛び立った。

サンダーランド。イギリスのショートブラザーズが手掛けた  
大型の単葉飛行艇だ。

本来、飛行艇の主な仕事は小型水上機では不可能な長距離の  
海洋偵察や哨戒だが、本機はその巨大な体躯に見合うキャパシテ  
ィを活かした物資輸送から着水能力を利用した遭難艦の乗員救助、  
中には翼下へ爆装を施し、爆撃活動に従事した型番機さえも存  
在する。

イギリス軍初の単葉飛行艇でありながら数多の作業に適応出来る  
程の高性能を保持しているのは本機の製造元であるショートブラザ  
ーズが航空機創成期から飛行艇を専門とした会社でもあったからだ  
ろう。現にイギリス航空省は依頼先であるショート社が提出した  
設計図を軽く審査したのみで正式な生産発注を行っていたほどであ  
る。

先ほど飛び立った飛行艇はサンダーランド第三番モデルである。  
かつての二番モデル機から備え付けられた旋回機銃座に加え対潜  
水艦レーダーを装備しており、対潜能力さえも持ち合わせた機体  
となっている。しかし当のサンダーランド飛行艇には対潜レーダ  
ー用の機器を取り外しており、固定銃座や旋回機銃座からも全て  
の七・七ミリ機銃と十二・七ミリ機銃の全てが取り外されている、  
簡単に言えば非武装機だ。取り外された武装の代わりには銃架  
に溶接された高視野の単眼鏡が装着されているので機内から周囲の  
景色を見る行為には申し分無い設備となっている。

非武装のサンダーランド飛行艇「リリー・マルレーン」が一機のみで朝霧の立ち込める幻想の空へ身を横たえるように飛行しているのは只の空中散歩ではない。機長であるノア・ホプキンス英空軍大尉は昨夜の命蓮寺で行っていた春告精リリーホワイト搜索地点の確認ブリーフィング後、養い主の尼僧「聖白蓮」に直接呼び出された。ブリーフィングでは視界の有力性をより確実なものとするために搜索隊が使用する異種揃いの飛行艇六機で行う密集陣形の確認も行っていたのだがそれを実行する必要さえ無くなる旨を告げられた。

その内容は「集団行動から離脱し、濃霧の立ち込める湖畔付近より南西に位置する比較的霧の薄い魔法の森上空を搜索しろ」と言ったものだった。これまで春告精発見情報地点の大半は湖畔に集中しており、このような行動依頼はまるで宝くじの一等と前後賞に当選しておきながらそのまま番号券をゴミ箱に突っ込むようなものであり、大尉含む十名の搭乗員は早起きから来る眠気と闘いながら自分達の不運をひたすら呪い続けた。気乗りせずともやるなら一番、それが彼等の信条でもあるからだ。

ノア大尉の座る操縦席にある古臭いアナログ計器盤と日本語学習の教本、離陸前に配布された幻想郷縁起写本や里で購入した湯たんぼ等が淡い朝日に照らされている。その中で大尉が一番大事にしているのは風防へ貼り付けられている半ば逆光気味になっている彼と前線慰問に訪れた歌手、マレーネ・ディートリッヒと二人きりで撮られた写真だ。

イギリス軍大尉である彼は所属していた基地へやって来たUSSO（前線兵士慰問機関）の接待役を受け持ち、そしてその肩書きを利用して数々の女優や歌手と写真を撮影していた。勿論写真を撮影するだけで基本ノータッチであり肩を組むなんて持っていない。風防に貼り付けられた写真がマレーネであるという事は、一緒に被写体となってくれた女性達の中で彼女が一番のお気に入



りなのだろう。

ドイツの歌謡曲リリー・マルレーンはアフリカ戦線で枢軸軍、連合軍の両方に聴かれていた曲であり始めてリリースしたのはドイツ人歌手ララ・アンデルセンであり、マレーネは大戦中のアメリカで英語訳をした歌詞でカバーした物を慰問で歌っているのだ。

敵味方両方に聴かれたこの曲は信じて良い物が何も無かった幻想郷漂流直後の彼等を励ましていた。小競り合いを続けていく中、次第に敵対心が薄れた時に起きた妖怪による鎮圧活動に屈したときも枢軸軍の面々と良く歌いあつた曲でもある。

そう、幻想郷にとつてリリー・マルレーンは国境や人種と言う柵を打ち壊す金槌となつたのだ。今回搜索する妖精が「リリー・ホワイトと聞いたノア大尉は喜び勇んで搜索隊へ部下達と共に志願した。

外の世界では成し得なかつた完全平和という結末を齎した歌姫の曲と良く名前が似た妖精達に会いたい、もう二度とマレーネには会えないのだから妖精たちに感謝の気持ちを伝えたいのだ。

「あなたの足音も足取りも街灯は全て聞いている。でも毎夜光を照らしても僕の事は記憶の彼方へ。悲しみに暮れる僕の心。街灯の傍であなたと一緒にいたのは誰なのだろうか。リリー・マルレーン。」

四つもあるエンジンの轟音に紛れながら大尉の耳にリリー・マルレーンの四番歌詞が流れる。大方近くの搭乗員が口ずさんでいるものだろうと気に留めなかつたが、実際に歌っていたのは搭乗員ではなく、森の中で朝日を逃れた夜雀が歌っていたのだと気づく事は出来なかつた。

「インセクトケージ（虫かご）聞こえるか、こちらバタフライ

ネット（捕虫網）より連絡。未だリリーホワイトを確認できず。湖の上空はかなりの霧にお覆われていて搜索活動が難しい状況にあり、密集陣形も崩れ始め…おいあの二式…馬鹿こっち寄るな！」

歌が聞こえてから三分ぐらい経過したとき、操縦席の無線に通信が入る。機名「バタフライネット」は米軍のPB＼カタリナ飛行艇の事だ。通信をしていた彼女の機長を務めているのは米軍の熟練パイロットであるワイアット中佐だ。彼が搜索難航と言っているのだからきつと湖畔周辺は物凄い濃霧なのだろう。濃霧の中の密集陣形は危険であるし、呑んだ暮れ機長の異名を持つ佐治中尉も隊列に加わっている。さっきの通信でも彼が酔っ払い操縦を行っている事がわかる。

各々の飛行艇が陣形の修正の為にわめき散らす無線をオフにした大尉へ監視係りの搭乗員が左側面に白い物体を見たと伝えてきた。大尉は操縦桿を曲げて機体を反時計回りに旋回させながら高度を徐々に下げていく。白い物体を十時方向に捉える地点で速度を落とし、併走を始める。

搭乗員が単眼鏡で物体の何たるかを凝視し、大尉へ向けて親指を空に上げてみせる。それを見た大尉は命連寺直通の発見用無線に周波数を合わせる。一回の深呼吸をした後、冷たい受話器に向けて話し始めた。

「リリー・マルレーンよりインセクトケージへ。春告精を発見、座標はH6の南より。燃料節約も考えて写真を撮影した後、帰還する…以上<sup>オバ</sup>」

「こちらインセクトケージ、よくやってくれた。白蓮様も表門前で帰りを待っている…以上<sup>オバ</sup>」

大尉は操縦桿から手を離すために操縦を自動操縦に切り替え、キヤンバス地の鞆から一つのフィルム式カメラを取り出す。手早くゼンマイを巻きファインダーを覗く、リリーホワイトを枠内に収めてからシャッターを切る。

パチ　とやる気の無い音と共に被写体の像はフィルムに納められる。よし　と一言だけ呟いた大尉は操縦桿を自動から手動に切り替え、濃霧の中をうろつき続けているどの飛行艇よりも早く着水用の河川へと戻って行くのだった。

その頃、命連寺の寺門では聖白蓮自らが悶え棒を外し門扉を開けていた。本来これは居候する兵士達の数少ない仕事の一つなのだが今日の当番兵へ直接頼み込みに行き、門の警備も並行して行っていた。

夜間に一際繁盛する酒屋でさえも店を閉じている風景に添えるのは朝日に染まる幾ばくの霧、こんな景色を見るのは数週間に一回で良いぐらいでいいわね。毎日も里が赤い霧に覆われてると紅魔の館が疑われちゃうわね。あの人達が帰ってくるまで此処にいるつもりだけど…そろそろ完璧に陽が照りそう…ああ、今日もまた幻想郷に光が満ちる、また人間達と妖怪達との他愛も無い一日が始まるの。同じような毎日を過ごしても昨日は絶対に戻ってこない、どんなに急かして生きても明日が来るときは皆一緒。

だからこそ、人は毎日の中で生きる希望を潤すために特殊を望み、妖怪達は怠惰な毎日を繰り返すことに嫌気がさすから自分達の存在以上の特殊を実現させるの。この幻想の地で暮らす者全てが望む希望そのものが光となって世界を照らす、なぐんて酔狂なものね。幻想郷に光を満たせ、光を生み出し、そして輝け。それが普遍を打ち壊す最大の鍵となるのだから

第三十八話「Search・Lily」(後書き)

感想・意見どうぞ自由に^^

第三十九話「J・F・K」(前書き)

三月二十日

午前九時〇〇分

命連寺・別堂兼兵営宿舎内

### 第三十九話「J・F・K」

紫色のクレヨンで塗りつぶしたような空は次第に橙色へと色を変えて行く。雲ひとつ無い空が橙色と青色の絶妙なグラデーションに染まる時、命蓮寺に併設する兵舎では続々と兵士達が起床していた。

普通の軍隊生活なら起床ラッパか教育役の兵士がバケツを叩くかそれなりの手段を持ってして起床を促すものでは有るが、命蓮寺にはそのようなシステムは存在しない。何故なら、彼らにとつては毎日のように決まった時間に起きる必要が無いのだ。

中には今朝の飛行艇乗りのような特例もあるが、寺門の衛兵当番や給仕当番さえ回って来なければ一日中眠っていても罰則は無い。

これに対して白蓮やその他妖怪達は里への騒音対策及び兵士達の自由を尊重したと頑なに言うが、実際のところ彼女達の睡眠を邪魔されたく無いが為に起床号令を廃止した結果である（命蓮寺の妖怪達は出来るだけ人間に近い生活を送るために睡眠や食事入浴等の行為を行っている）。それでも兵士達は自分達なりに就寝時間と起床時間を決め、ちゃんとした生活を送っているのだが…

「凄いな、起床放送も無しに舎内の全員が飛び起きたぞ…規則ただしい生活ってこの事なのかもな。」

「お前も急げ！今何時だと思っっているんだよ！？もう九時なんだぞ！！慧音先生に何て言い訳すれば良いんだよ俺は…はぁ…」

まだ少し改良の余地が有りそうである。

一昨日である三月一八日から幻想郷へやってきたジェフリー・フイブスターとジャック・ハフマンの内、先に職にありつけたのはジャックのほうだ。彼は昨日の時点で早速にも里に建つ寺子屋の教師をすることに漕ぎ付けており、今日である三月二十日の午前八時に寺子屋の各説明を聴く予定を塾長である上白沢慧音と約束を取り付けたのだがその約束の時間を一時間もオーバーしている。

二人は焦燥に駆られた。物凄いスピードで飛行服に着替え（兵舎のベッドには備え付けの作務衣があるが誰も使おうとしない、基に着かたが分からない）てから大急ぎで兵舎入り口にある車両の借用受付所へ走る。受付では当番をしていた兵士が古いコミック本を読み漁っており、挨拶にも呂律が回っていない。

ジャックは昨日の夜にソビエト軍のフェリックスたちから聞いていた階級ごとの車両割り当てシステムを利用した書類の抜け穴方法を試してみる。車両を借りる場合、兵士の階級によって配当される車両のレベルが違うという。

例えば昨日のリベルト伍長の脆いキューベルワーゲンのように下士官クラスならそれ相応の車両が一日単位で貸し出される。AC-130Hと特三号戦車の説得へやってきたキーン元海兵隊少尉のフォードジープや旧日本軍の装甲工作セリ車と言ったような遭難者への説得用に車両と搭乗者の年代を合わせる特別なケースもある。なかでも上級士官には高性能な現代物の自動車割り当てられるという事もあるのだ。

しかし兵階級所持者は全うな車両を貸与されることが無く、生真面目な当番に兵階級だとバレたイタリア軍のリノー一等兵は幻想郷

の外れにある博麗神社と言う神社まで川魚の塩漬けや梅干といった日持ちが良い食べ物を分届ける作業をリヤカー付きの自転車で行った逸話を哀愁たっぷりに話していた。その話は「折角届けた食べ物に発生した流れ弾のせいでリヤカーが自転車ごと爆発したので帰りは寺まで徒歩だった」と言う部分まで話し終えた所で彼が泣き出してしまったのでそれ以降の詳しい話は覚えていない。因みに幻想郷に現代物の自動車が存在する理由については後ほど説明する。

そんな所で書類の抜け道説明に戻るわけだが、目の前の借用表明書に印刷されている内容には階級の表記を強制する枠が無い。枠が無いから階級の確認は当番兵の独断と偏見によるものへと成り代わる。大体は容姿で決定するのだが現在目の前の兵士はコミック本の巻頭カラー部分までしか読んでいない。となれば次の確認手段は声色となる。

「借用書類の必須事項は書いたよ、今日も朝からお疲れ様だね。」

「そんな事はありませんよ…えつと高性能なのは…これだ、この鍵を駐車場番号D-7の車にお使い下さい…やっぱり日本語って便利ですね…それでも英文の文字は今までどおりに読めるって来たものだし…」

これが絶好のチャンスなのだ。ジャックは作り物のしわがれた低い声で書類審査を頼み、渡されたキーを貰う。キーには「K-7」と刻印されていてこれが駐車場の番号とリンクしているのだらう。



二人は指示通りにアーチ型の屋根を持つ今となつては不要な大型飛行機の格納庫を流用した乗用車の駐車スペースへと向かう。駐車場は一列に八台もの乗用車を収容していても中央部の搬出路ががら空きになる並の大きさであり、横列がAからFまでの六列、縦列が一から八までの八列、合計で四十六台の各種小型自動車を収容している。

硬いゴムで舗装された床に塗装されているアルファベットを頼りに車を探すと、お目当てであるD-7の駐車スペースは簡単に見つかった。そして肝心の車種だが、ジャックの声帯模写が功を奏したらしく二人に割り当てられた車は1961年製のリンカーン・コンチネンタルだ。アメリカの自動車メーカーであるリンカーン社が作る高級車の類であるが五十年代後半から人気が低迷、それまで続いていたマークシリーズは完全に生産ラインを止めてしまっていたのだがコンチネンタルの名を車長ダウンさせた本車へ引き継がせている。それから言うもの「米国自動車市場にリンカーンの姿が消える日が無い」と言わんばかりにオイルショック直前まで日夜鎬を削りあう市場に居座り続けたのである。

「1961年製のコンチネンタルってケネディ大統領がダラスで乗ってた奴だよな？　うえ気味悪い。…ブツブツ」

「よくもまあこんな小回り利かなさそうなのを回したな…どうせなら日本車回せって…ブツブツ」

下手をすれば自転車を割り当てられいたかもしれない立場の彼等が愚痴を言える筈は無いのだが、今のところ格納庫には二人の姿が無いようで兵士達に愚痴を聞かれることは無かった。

ハンドル横の鍵穴に歪な形の鍵を差し込むとコンチネンタルのエンジンは抵抗する事無く、あっさり点火された。寺門から颯爽と飛び出したコンチネンタルを運転をしているのは十歳頃から私有

農地で四輪駆動車を乗り回していたジャックであり、免許の取得訓練中に州の教習車を水没させた経験を持つジャックは後部座席で縮こまっていた。そんな後部座席の彼が高級車の乗り心地に興奮しシートから身を乗り出し大統領ごっこを始めると、ジャックが「歓迎する人もいないしカルカノ小銃で狙撃される心配も無いから前は只の馬鹿だぞ止めてくれ」と言い彼をなだめる。二つ三つある辻を危なげなドリフトで曲がり寺子屋がある通りまで走ると慧音は路上に腕組みをし、仁王立ちの状態で彼らを待っていた。その顔を見れば割とにこやかな笑みを浮かべているのだがその笑顔も今では恐ろしい。

「遅すぎる…いくらなんでも遅すぎる…まあ子供達は十一時からやってくるから別に良いわけなんだが本当のところは遅刻した子供達に頭突きをするように頭突きをしようとおもってるのだが…きよ…今日の所は新人と言う面で特別に許してやるぞ…まあ入ってくれ。」

「なんか何も出来ない俺もついて来ちゃってすみませんね慧音さん。一応ジャックの保護者役みたいな者ですね、それではお邪魔しま…」

先に車を降りたジェフリーが悠々と寺子屋に入ろうとした時、二本の白く細い腕が彼の両肩を掴む。実際ならその様な静止を振り切ることも自体簡単な事だが彼は身動きの一つも取れなかったのである。

「誰が貴方を許すって言ったか？ 私が許すのはハフマンさんだけだ。貴方にはハフマンさんが遅刻した分の罰も受けてもらいます。覚悟…！」

そう言うと慧音は彼の肩を掴んでいる両腕のうち、右腕に目一杯の力を込め左肩を押す。彼に回れ左をさせ彼の身体が百八十度回転したところで一旦離していた両腕で再度肩を掴む。軽く深呼吸をした後で慧音はその場で膝を屈める。実は頭突きをする時に行う拳動としては自身の頭部を後ろに傾けてからの反動を使うよりその場でジャンプする要領で頭突きをしたほうが遥かに威力が上がるのだ。

ジェフリーの顔面は彼に目掛けて飛んでくる薄青と銀色の髪に覆われた物体に対する理解は追いついておらずいとも簡単に自分の額へ受け入れてしまったのだった。

それが色々な意味で幻想郷のどの妖怪より一番頭が堅い彼女だとは知らずに……

### 第三十九話「J・F・K」(後書き)

評価感想などはお気軽にどうぞお願いします。

これからの参考にもしたいと思っておりますので…

第四十話「Firearms」(前書き)

三月二十日

午前九時四十三分

命蓮寺別堂・一階食堂

---

Firearms「コルト・ファイアアームズ社の事

## 第四十話「Firearms」

「何で私の飛行機を好きに飛ばすことが出来ないんだ！　いつから私達はあんた達の指揮下に入ったって言うんだ！　早く飛ばせない理由を説明しろ！！！！」

「だからさつきも言ったとおり少佐殿のB-25は昨日の格納庫へ搬入した際に寺の航空機名簿へ追加されているのです！！　なので離陸申請は当日の三日前にせねばいけないのですよ！！！！　この規則は私もどうすることもできません！！　これ以上は大統領プレジデントに言うてください！！　大統領プレジデントに！！　ワシントンにでもルーズベルトにでもどうぞお構いなく！！！！」

「H A H A H A H A H A」

「それが出来たらとつくにやっとなるわボケがあ！！　責任者だせえ！！　責任者を！！」

「そんな口の利き方で責任者を出せると思っているのですか！！　まあ責任者は私なんですけど！！」

「Oh」

少し春を思わせるように暖かくなった三月中旬の午前中。　命連寺の裏手に舗装された広大な滑走路の真ん中で喚いている士官の大声と彼の対応に困る当番兵の震えながらも威勢の良い返答を珍しいもの見たさのギャラリー達の間で繰り返す中。　マッキンリー大尉以下七名のAC-130H搭乗員達は一夜を過ごした地下営舎の真

上階にある無人の食堂で粗末な食事を摂っていた所でその口げんかを背景曲に聞きながら悠々と「朝」の食事をしていた。

「必死ですなあの人。　そこまでして自分の飛行機を飛ばしたいのですかね。」

この寺の蔵で造っていると聞いた大根の塩漬けをおかずに御椀に盛られた冷米を手馴れた箸使いで食べているレーガン一等兵が呟く。食堂に駐在している筈の料理人は現在、紅魔館と呼ばれる洋館にパーティー用の食事を調理しに向かっているので食堂に残された食べ物と言うのは保存食主体のかなり質素なものである。

「大方だが最近になってこつちに来た人なんだろうな。　それにしてもあの声は何だか聞き覚えがある……」

砂糖大根の塩漬けが放つ香りが割とピクルスに似ていたのでパンに挟めば美味しいだろうと踏んだマッキンリー大尉が厚切りにされた二枚組みの食パンの間へ乾いたソーセージと共に大根の塩漬けを挟みながら言う。

「しかしあれだけ喚いていても少佐たあ……それなりに年を召している筈だがかなり若そうっすね。　しかしこの声……昨日のB-25に乗っていた機長の声にそっくりですねえ。」

その声を聞いたクルーが一齐に黙り込む。　喋った当人のヘンメ軍曹だけが事態を分からずに一人で分け前の食パンを頬張っていた。

「恥ずかしい」

「恥ずかしいな」

「ああ恥ずかしい」

「早く止めに行かないと」

「俺達の名前が出る前に何とかしないと」

「あの方ならやりかねない……」

彼らは口々に呟き、食事を終えたクルーの数人は外に飛び出す用意を整える。中でもとりわけ用意が早かったマツキンリー大尉とパメル少尉は必死の形相で別堂の表口へ走る。その後を追うようにミゲル伍長とデイドー一等兵が、次にパンを口に啜えたレーガン一等兵や彼らに混じり食事を摂っていたアドニス米陸軍兵長のような着衣乱れが多い者が飛び出して行く。結局、食堂を飛び出したのは八人だった。他のクルーや陸軍兵は何事も無かったように朝食を再開している。

それから数十秒ほど後の事だろう。食堂の外から今までの二つの声色とは違う何人かの怒声が聞こえる、どうやら大尉達が到着する前に憲兵当番の兵士に見つかってしまったようだ。憲兵達が滑走路へ到着する前に当事者やギャラリーを含む三十人近い人の塊がアリの子を散らすように散り散りに逃げていく。その足音と地面を揺さぶる振動は食堂のテーブルに置かれたヤコブ中尉の持つコーヒーカップに幾つもの波紋を映し出すほどだった。

憲兵達が持ち場へ戻ると共に滑走路へはまた何人かの人が集まってくる。その中には既にこの問題に無関係な野次馬は消え失せ、滑走路には当事者の二人と仲裁へ入った大尉達の合わせて十人の兵士がいる事になった。

「少佐、ちょっと落ち着いて下さいって。何も朝っぱらにB-25を飛ばさなくても……目的は何なんですか？」

仲裁に入った八人の内、最初に言葉を発したのはAC-130 Hクルーのミゲル・ノイマン伍長だ。彼は二日前の三月一八日、



立ち寄った民家の傍にある森林でアレキサンドリア・フィブスター少佐以下二名が半人半霊の魂魄妖夢に襲われていた所を目撃し、これを助けている。面識も無い他のクルーよりも遙かに少佐に関係が深く、少佐にとっては命の恩人ですらあるのだ。

そんな彼の声を聞いた少佐ははっと我に返り伍長のほうへ振り返る。伍長が見た少佐の目は少し涙ぐんでおり、思いなしか泣いているようにも見える。

「これは私の問題だ…ほつといてくれないか！！！！」

「貴官の問題だと言う事は良く解ります！せめて離陸する理由だけでもお聞かせ…」

「アレックス少佐ー！！何処へ行こうと言うのですかー！！！！」

ミゲルが全てを言い切らないうちに別堂の入り口から何かを叫びながらまた一つの人影がやってくる。焦げ茶色の革で繕われた少佐と御揃いのボマージャケットを羽織り、袖には少尉の階級章が縫い付けられていることから少佐が機長を務めるB-25の副機長を担当していたブレン・ノートマン空軍少尉だと分かる。

少尉は人塊に割り込み少佐の目の前まで息も切れ切れに歩み寄り、少佐の前に一つのホルスターを突きつけた。

「あれだけ大事にしたたガバメントを置いて行くなんて、少佐は可笑しくなつたのですか？」

赤茶革のホルスターを見た瞬間、少佐は目を丸くした。少佐は差し出されたホルスターを受け取り、ホルスターの留め具を外す。中から見え隠れする象牙に宝石を散りばめたガバメントのグリッ

ブを掴み、弾層を抜いた。二、三回遊底を思い切り引き薬室に入っていた弾丸を輩出する。撃鉄が起こされているのを確認した少佐は笑いながら自分のこめかみに銃口を向けて引き金を引く。カチンと響きの良い音が辺りにこの無礼を謝罪しているようにも見える。

少佐自身は笑っていたが他の九人は（この人頭大丈夫なんだろうか、と思っている）深刻な顔を揃って少佐に向けていた。その顔を見た少佐はその後数秒は笑い続けたが遂に折れたのか、彼もまた他の九人に負けないぐらいの深刻な顔になってしまった。

「片時も離さなかったコイツを置き忘れるなんて、私もどうかしていたみたいだったな……」

彼の所持する装飾が施されたガバメントは発砲機能の他に少佐のみに効く鎮静剤のような機能でも持ち合わせているのか疑うぐらいの落ち着きようである。官給品ではない私物持込のガバメントがどれだけ少佐にとって大事だったのか如実に物語っている。

「やっと落ち着いてくれましたか。これでようやく書類にサインしてもらえる…ではこの離陸願いにサインを……」

「いや、サインはしないね。離陸は止めだ軍曹、怒鳴って悪かったな。」

「は……はあ……」

少佐と意見のぶつけ合いをしていた独逸国防軍シャツを着た兵卒の肩を軽く叩き、彼なりの謝罪をする。国防軍の軍曹は手にした離陸願い書類を綴じたバインダーを落としてしまう程に呆気に取

られていたが直ぐに気を取り戻した。地面に落下したバインダーと鉛筆を手に取り、とぼとぼと小型戦闘機格納庫へと歩いていった。

当事者同士で問題を解決したのでこの事についての詮索は取止めにした大尉は自分の腰に下げていたナイロン地のホルスターから自分のガバメントをゆっくりと引き抜く。本来は空軍の規定で拳銃はベレッタのみの筈のだが、これは大尉がこっそり持ち込んだ私物品である。何度か中尉の頃に上官から摘発されていたが「どうせ使わないのだからお洒落感覚に持たせてくれ」と言いながら数ドルの紙幣をチョコバーの包装紙に仕込み手渡すことで難を逃れてきたのである。

「コレ、自分が十五の時に州で開催された射撃競技のブルズアイ部門で自分が優勝した時に贈呈された物なんです。競技用に作られていますから現代米軍規格の9mm弾が使用できる代物なんですよ。」

「おや、君も高級そうなガバメントを持っているじゃないか、少し見せてくれないか」

誰もいない滑走路で米兵達が腰に下げた拳銃の自慢をずらずらと始めだした。

「君達の拳銃が9mm口径って事はガバメントはもう引退したのかな、一昨日のミゲル君が撃っていた拳銃もよくは見えなかったが銃声もガバメントみたいに湿っていなかったし。」

「ミゲル伍長は現在拳銃を持っていないようなのでこの私、陸軍のアドニス兵長がカスタムした「Beretta-M92F・Ad

n i s - C u s t o m」をお見せしましょう。このアドニスカスタムはそれこそどうしてコレを全軍で採用しないのか疑うほどの命中率を弾き出す超高性能な……」

「私の拳銃も見るかい？ この私の腰には丁度純金製のガバメントがぶら下がっているんだぞ？」

筋骨隆々なアドニスが上半身に変な汗を掻きながらM9のファイールドストリップを始めるも、それを見ているのはブレイン少尉の人だけである。他の七人はジャージを着崩した上にピストルベルトを巻いたダルグレン中将の持つ純金製のガバメントに魅入られていた。

「これは妖怪の山つて場所の坑道で発掘された物だな。その周辺に存在する樹海に領地を持つ流し雛軍団と言う集団の団長に友好の証として貰った物なんだ。もしかしたらそこら中にこんな高級銃が落ちているかもしれんな。ハハハハ、ちよっつについて来い。コレクションを見せよう。」

中将はそう言つと滑走路とは正反対に位置する別堂の入り口へと歩き始める、自室へ戻るようだ。すっかり黄金銃の虜にされた七人は金魚の糞のように中将の後をついて行く。

「ぬあー！！ 誰か俺のベレッタのトリガーを蹴飛ばしたか！！ 何処にも無いぞおー！！！！」

「実際に発砲するところを見るまで壊れちゃ困ります！ 私も探しますよー！！」

金魚の糞が滑走路から消えた後には広大な滑走路で探し物をする

二つの人影が残った。その二人の間には両生類の糞をかき集めた  
価値も無い拳銃が横たわっていたのだった。

第四十話「Firearms」(後書き)

長らくの間、休んでいましたが遂に再開です。これからも応援よろしくお願いいたします

第四十一話「Ahead Wind」(前書き)

三月二十一日

午前十時三十分

命蓮寺・二番滑走路

## 第四十一話「Ahead Wind」

幻想郷に吹く南風が人里を駆け抜けて行く中で勢いを増し、命連寺に強風が吹き付けられる。砂塵の舞う滑走路の隅でベレッタM9拳銃のトリガーパーツをようやく見つけたアドニス兵長とブレイン少尉。二人が別堂の脇にあるポンプ汲み取りの井戸で砂まみれのパーツを洗う中。滑走路では快晴の空へ一機のオートジャイロが飛び立とうとしていた。そのオートジャイロは機首にプロペラを装着した古い型で、アドニス達から見れば骨董品並みの機体だが、ブレイン少尉や昨日に遭遇した特三号戦車搭乗員から見れば新鋭のネームこそ付かないが割りとは現役を維持している型式である。

「オートジャイロか。こんな真昼間の風が強い時間帯に離陸する気なのか？」

洗浄されたベレッタの独特な形状を持つスライドをしげしげと眺めていたブレイン少尉が心配そうにオートジャイロの方角を眺める。

命連寺が所有する滑走路には申し訳程度に数本の吹流しが設置してある。吹流しは一本ずつ高さを変えており低い場所で五メートル、一番高い所で二十メートルの高さに設置されている。ブレイン少尉はその中で十五メートルの高度に設置された吹流しがそれぞれ名前通りに吹き流されてしまいそうになっているのを気にしているようだ。

「あ、あのジャイロ。機体胴体に日の丸が描かれていて…その上から「maier」と書かれて…まさか郵便機か！？ やっぱリアルは旧日本軍機のジャイロなのか？」

「古い雑誌で見たことがありますよ。あれは間違いなく旧日本軍



のオートジャイロ「カ号観測機」です。少尉殿には分からないのも無理が有りますね。」

「心外だな」と呟くブレン少尉の横でヘラヘラと笑うアドニス兵長の推測通り、目の前で離陸準備を進めるオートジャイロは太平洋戦争中で旧日本軍が弾着観測機として使用していた「カ号観測機」そのものだった。カ号観測機は滑走路奥のエプロンにあるヘリポートもどきの平地に運ばれた後、南向きに離陸できるように機体方向を南の方角へ向けていた。

そこへ一人の旧日本陸軍飛行士が大きな麻袋を持ってカ号観測機に乗り込む。それを確認した整備兵達は胴体上部に取り付けられたローターのエンジンを掛けローターを始動させた。メインローターの回転数が毎分百九十回以上になれば離陸可能なのだがカ号観測機は離陸には一応の滑走が必要なため、追い風となる北向きの通常滑走路とは違う、予備の滑走路まで低速回転を維持した機首のプロペラを使いタキシングを始める。

「向かい風で離陸する気か。オートジャイロには向かい風の離陸は難しいって聞いたぞ？」

「いえ、向かい風の方がオートジャイロにとっては好条件です。後は飛行士の腕次第なんですけどね、優秀さで有名な日本軍パイロットを生で見れるなんて夢みたいですよ。」

カ号観測機は予備の滑走路に到着するや機首にあるプロペラの回転数を徐々に増やして行く。メインローターが生み出す下向きの空気の流れは機体の最終確認をしようとする整備員を必然的に追い払う。飛行士が周囲の安全を確認した後、カ号観測機は急激な加速を始める。所々に雑草が生えた滑走路の十分の一も使わなかっただろう、カ号観測機はたった数メートル進んだだけでフワリ

と浮いたのだ。ランディングギアを完全に地面から離し高度を上げていく。予備の滑走路へ到着してから三分後、力号観測機の影は人里の建物で見えなくなってしまうた。

「あの飛行士、いい腕してますね。見習いたいぐらいです。」

未だに人里の向こうへ広がる空にジャイロの影を探すアドニス兵長が咳く。

「見習いたい？ 兵長はあんまりんざい飛行機を持っているのか？」

「ええ少尉。我が家の農場では珍しくオートジャイロで農薬散布をしてるんですよ。何回か自分も農薬を撒いたのですがね、着陸がとてつもなく怖いんですよ…アレ。」

「確かに、ありや着陸は難しそうな設計だな。 そうだ！ 兵長、君達の暮らしている未来の話をしてくれよ！！ いいだろ??？」

「（こりゃ面倒だな）はい、良いですよ。 どれから話しましょうか……」

少尉が「戦争の行く末だ」と言ったので「一応、アメリカは日本との戦争に勝ったが。半世紀後には完膚なきまでに潰した日本は経済的にアメリカと肩を並べる結果になる」と言っただけで兵長がベレッタの洗浄を全て終えた時。人里の寺子屋では在籍する子供達が集まり、授業を始めていた。

「掛け算つてのはな、バツテンの左にある数字を右にある数字の  
数だけ足せばいいんだ。わかるね？ だから3×2は3を二回  
足せば良いんだよ」

「はい」

「驚いたな。もう授業を始めて二十分も経っているのに誰も退屈  
そうな顔をしてないな。 たった二分の自己紹介をただけでこ  
れ程まで子供達の心内に溶け込むなんて。 並の命蓮軍人でさえ出  
来なかった芸当だぞ？」

「あれがジャックの人徳つてヤツですよ。 誰とでも人当たりが良  
いんで上官達にとやかく言われる心配も無いんですよ。」

「お前はさつさと床掃除に戻れ！！ ぶん殴るぞ！！」

アメリカ空軍のジャック・ハフマン一等兵が行う授業を廊下で見  
物し、その授業に感心しているのは人里で寺子屋教師をしている  
地歴学者の妖怪、上白沢慧音だ。そして彼女が教室に聞こえな  
いよう怒鳴りながら蹴りをかまされたもう一人のアメリカ人はジャ  
ックの同僚であるジェフリー・フィブスター一等兵だ。

「殴るか蹴るかのどっちかにして下さいよ、授業妨害です！」

「私だから良いんだぞ！ 私だからだ！！」

慧音がジェフリーの屁理屈に激高し、空のバケツを投げつけよ  
うと振りかぶった時。 寺子屋の上空をけたたましい轟音で何かが  
通り過ぎて行く。 慧音はバケツを投げる手を止め、ジェフリー  
はとっさに取った防御姿勢を解除し廊下の羽目殺し窓を見やる。

その姿は廊下の窓から簡単に確認することが出来た。

「おほお〜旧式のヘリコプターもどきが飛んでるな。今時珍しいですからね…ってあれ?? 慧音さん!?! 服に火が、服に火がついてる!?!」

「教室の窓は開いていた…教室の窓は開いていた…マズい、何とかしなきゃ…何とか…」

珍しい形状をしたオートジャイロを見物していたジェフリーは隣で何やらブツブツ言葉を発する慧音の周りを青白い焰が取り巻いているのを見て驚愕した。この方は一昨日の「妖怪」と言うおとぎ話の人種なのか、それとも日本人は全員使用できる技で普段は隠して生活しているだけなのか。そう変な思考を廻らしている内に、慧音を取り巻いていた焰は消えていた。それも寺子屋の上空を低速で飛行していたオートジャイロの羽音とほぼ同時の時間に……

第四十一話 [Ahead Wind] (後書き)

はる、さあさあ、...

「意見・感想お待ちしております」

第四十二話「Colonialism」(前書き)

三月二十一日

午前十一時五十八分

人間の里・寺子屋「白沢塾」

## 第四十二話「Colonialism」

寺子屋の上空を飛行していたオートジャイロの羽音が途切れた事に異変を感じたジェフリーが窓から外を見回すも、既にジャイロの姿は見えなくなっていた。

「お？ ジャイロの音が消えた？ それにジャイロの姿もありませんよ？ 慧音さん。」

ジャイロの行方が心配なジェフリーは開くことのない嵌め殺しの窓から必死に寺子屋の真上を見ようとす。しかし屋根に垂直に取り付けられた窓の視界範囲には限界があるので完璧に見ることは出来ない。

「ん〜ちよつとな。あの変な飛行機を「無かった事にした」だけだ。」

「無かった事に!？ それってどういう事ですか?？」

「無かった事は無かったんだ!! ほら! そろそろ授業が終わるぞ! 半鐘鳴らして来い!!」

「は、はひい!」

よろよろと職員室へ入っていった「体の良い下僕」を仁王立ちで見つめていた慧音は職員室から発せられる半鐘の金属音を聞いてから教室の引き戸を開ける。そして彼女は二〜三度の拍手を打つ。

「はいはい。今日の授業は終わりだ、ハフマン先生の算術は楽

しかつたか？面白ければ明日も来るように。今日は特別に宿題は出さないでおくぞ〜」

いつも通りならここで子供達は膨大な宿題を課せられる筈なのだが、今日の慧音は上機嫌らしく宿題を出す事は無かった。

「私がお前達に宿題を課さない時はな、病気が・死ぬ時か・カープ（和訳：鯉）をした時だけだ！悔しかったらこの三つの内どれでも私にさせて見せる！！又ハハハハハハ！！」

宿題量に不平を言う子供に彼女はよくこう言う。子供達は「今日の先生は多分病気になったのだろう」と変な心配をしながらゾロゾロと教室を出て行く。慧音に付き添われた小さい影の全てが寺子屋の外へ出ると、教室から数冊の和綴じ本を抱えたジャックが現れた。

「どうだったか？お前の国の学校とは随分違うだろう。しかし凄いなあ！あれだけ子供達を…」

「慧音先生！！そんな褒め言葉、今はいりません！！詳しく聞かせてください！あのへりもどきを何処へ消したんです！！飛行士は！少なくとも一人は乗っていたはずです！！」

聞いていたのか。慧音は自分の声が授業に支障をきたしていたと自覚すると共に、飛行機のエンジン音が教室に聞こえてしまっていたのを只、悔いた。

「ん！…ああ〜その……つい、な？歴史から一時的に疎外したんだよ。すぐに戻るから！な！飛行士も無事だと思っし！約束するぞ！」



「ま、まあ先生の能力つてやつは昨日に聞いてますから納得はいきますが。そんなことも出来るのですか、しかし何であのへりもどきを消したんです?」

慧音の曇った顔を見て、ジャックは少し言葉を柔らかくする。

ジャックは理由のみを聞きたかったのだ。飛行士に降りかかる危険性まで無視してまでそのような行為に及ぶのか、理解が出来なかった。

「数年前な。この里に命蓮寺が建立された直後の頃だ。白蓮と私が里の周りで未だに争いを続ける兵隊達を保護し、里の働き手にしようとしたんだ。彼らの武器持つ手を農工具に変えて里の更なる発展を促そうとな。でも今まで里で働いていた民からは物凄い反発をうけたんだ、これは当然だな。言葉も通じない見ず知らずの奴等に働き口を減らされちゃ黙っておけない。

中には日本語を話せる兵士もいたが、里には外来人を排斥しようとする組織まであってな、交渉も上手く行かなかった。そんな状態が続いて二度目の冬が来たある雪の日だった。外来人を嫌う里の民達が道路舗装工事を行っていた兵士を闇討ちしたんだ。この騒動は報復に重機関銃を持って現れた独逸兵に全員死亡と言う形で鎮圧されたのだが。兵士の報復はこの後も幾度と無く続いたんだ。

昨日言った事も本当だが、彼らは元から僧兵として保護されたわけじゃないんだ。地域復興の良い人材になるはずだと思って保護したんだ。なのに彼らは里の人間が信用できないと言いながら大半が他の土地へ移っていった……今までの歴史だってそう、誰でも最初は怖いのだ……。あの子達の中には彼らとの衝突で親を亡くした子だっている。今はもう心の傷が癒えてるのかもしれない

いけど。　まだ空のエンジン音だけは恐怖を煽るみたい。　だからさつきみたいに半ば強行的にやらせてもらってたってわけ。

まあ安心して欲しい、　その騒動の歴史は私が美味しく頂かせてもらったし、　里の反対派も今までより随分と減ってるし、　貴方達の仲間もその事は忘れてると思う。　さつきも言ったとおり騒動を知る人の大半は各地に散らばって生活してるから。」

「…え」と、　それって要するに……植民地主義みたいな何かがある処でも起きていたって事で…現地民と一悶着あったが最終的には和解決みたいな感じで今日に至るってわけですか？　十年前から住んでるアザロさんに聞けば何か分かるかもな。」

予想より長く話してしまい口が疲れた慧音と予想外な話の長さに両脚と耳が疲れたジャックの間にはいつの間にかジェフリーの姿があった。　彼は寺子屋の隣に駐車しているリンカーン・コンチネンタルのキーリングを中指でくるくると回している。

「まあそんな感じね。　もっと言えば…」

口の疲れが癒えたのか、　それとも無理をしているのか。　慧音が未だ何かを話そうとする、　二人が身構えた所に寺子屋の外から聞こえる安っぽい鈴の音が都合よく邪魔をした。　その鈴の音は寺子屋所有の青銅製半鐘が持つ重い音色とは違い、　錆びた鉄同士が擦れ合うような音色しかしない。　その音色が高低、　強弱ありながら少なくとも三つの違う鈴が存在している。

「そこの中にいるのは分かってるぞ！　俺達もあの車で連れて行ってくれよ！」

そう叫ぶ声はどこかで聞き覚えがある。

「そうですね！　こんなボロ自転車を漕いで紅魔館まで行くほど命知らずじゃ無いですよ！！」

「元はと言えば誰かが借用書に階級まで書きしまったからなんだがなあ！」

「うるせえ、　受付のヤツが怖かったんだよ！　睨んできやがったんだ！」

聞き覚えのある声は次第に数を増していく。　それが昨日出会ったソ連兵と伊兵・独逸下士官の声だとジャックが分かった頃には既に彼らは寺子屋の玄関に上がりこみ、　ジェフリーの持つ車鍵を寄せと言わんばかりに手招きしていた。

その頃、　命連寺の敷地外に建てられた西洋風二階建て家屋の一室では数人の兵士と士官、　佐官が部屋の壁に掛けられた高級銃を眺めていた。　昆虫標本を見た子供のようににはしゃぐ彼等の前に倉庫から一つの大箱を台車を使い持ち出したのは此の部屋へ案内したダルグレン中將だ。　彼は口元を緩ませながら大箱をまだ二スの匂いが残る床へ丁寧置く。

「そこに掛けてある黄金のマスケット銃はいつかの富豪が道楽で鍛冶屋に造らせた物だそうだ。　他にもそこにある純銀の決闘拳銃だつて坑道から人骨と一緒に掘り出された一品だ。　どれもこれも歴史的な品なのだが…それを博物館へ持つていくのもかなわない…だから好きに持つていつて構わんよ、　使い方さえ分かればな。」

中将の言つとおり、壁に掛けてある古式銃の殆どは状態、装飾ともに最高だった。長い年月を地中で過ごしていたとは思えないほどライフル銃の木製ストックは朽ちていないし、艶さえ持っている。

「そして極め付けがこいつなんだ。もう私はこんなじゃじゃ馬を使えそうにもないが、君達なら使えるはずだろうから。これから紅魔館へ行くからな、これを持って皆で私を護衛して欲しい。」

硬い松の木で出来た大箱の蓋を中将が開けると、中には新品同様の弾倉付カラシニコフが二十挺収められていた。そこにいた多数の人間は「凄い」や「まさか此処でも見られるとは」といった声を上げていたが、一人の佐官だけは目の前にある奇異な銃の形状に微妙な感情を持ちはじめていたのだった。

「あのお、中将殿？これって何です？外見は私が休暇中にちよつと復員してきた友人が戦利品に持って帰ってきたMP43にそっくりな気もしますが…、それにしてもMP43に負けず劣らずの歪イビツな形ですね。」

フランス製の良質なマスケット銃に針状の銃剣を抜き差ししながらアレックス少佐がカラシニコフを指差し中将に質問する。それを見たマッキンリー大尉はカラシニコフのボルト滑りを確認するミゲル伍長に目配せし、彼に説明させようとする。伍長は一回溜息をついた後、つまらなさそうにカラシニコフを少佐の目の前に掲げてみせる。

「少佐の予想通りです。これは少佐達の味方であるソヴェイトで

1947年に設計されました。元戦車兵のミハイル・カラシニコフがドイツの突撃銃に影響され、我国の代表するM1ガーランド半自動小銃の発射装置を模倣改良して製作された半・全自動で射撃することが出来る銃を設計したのです。安価で堅牢、性能も威力面では申し分なし、そして我々が生きる現在に至るまで幾つかの改良を重ねながら地球全土に広がっていったのです。」

「地球全土だって!? そんなにソヴィエトは工業力が進化してるのか??」

竹槍のように鋭く斜めに切下されているカラシニコフの銃口を指でなぞる少佐がミゲル伍長の方を向く。

「いいえ、ソヴィエトは傘下の社会主義国へ大量に輸送したので。ライセンス生産を行っていた中国等がベトナムへ大量に送り込んだ事が一昔前の戦争を長期化させましたし、今じゃ中東やアフリカの紛争地帯で見る事は無いといわれてる程ですから。そう、中国や朝鮮ではライセンス生産契約年が終わってるにも関わらず生産を続けてますよ。他にも構造が簡単すぎたのが厄呼びしましてある程度の設備があれば民間でも製作することが可能なのです。当然、密輸も簡単なわけで…あ！これは47じゃない!? AKMだ！道理で銃床が真直ぐで銃口が斜めな訳だ!!」

「もういい、政治は嫌いなんだ。要するにこの銃は従来の戦争変えちまったって訳なんだな。凄いや、もっと興味が湧いてきたな…」

すっかりAKM（M1ラテン語で近代型の意）の虜になっている少佐を尻目にマッキンリー大尉はミゲル伍長を抱き寄せる、嫌がる伍長の耳元に生ぬるい吐息が吹きかけられる。

「その説明はA K講座の講師中佐の言葉まんまだな。さも自分が博識さんみたいな行為だけは止めような。なあ〜」

「止して下さい!？ だっていきなり「やれ」的な雰囲気で見てるから……ぎゃああ」

「どうだね少佐？ これから此処にトラック一台を呼ぶが、もう一台呼んでこの銃たちを持っていこうか？ 試射会でもしようじゃないか。」

そう言った中將が部屋に備え付けられた黒電話で一台はA C - 1 30HとB - 25のクルーを乗せるように指示し、もう一台は空のままに来るように言った。合計二台のオペルトトラックを要請した後、彼らは部屋の一角で始まったプロレスごっこを観戦するなり参加するなりで時間を潰していたのだった。

第四十二話「COLONIALISM」(後書き)

COLONIALISM＝植民地主義

暑いと何も書けません…

第四十三話「マンドリン」バラライカ（前書き）

三月二十一日

午後零時十五分

人里・一の辻



## 第四十三話「マンドリン＝バラライカ」

「あのおゝアザロさん…少し話したいことが…」

「Keeo going slowly（徐行せよ）」の標識に従いゆっくりと人里を走り抜ける黒いリンカーンがようやく里の入り口に差し掛かる辻へついた時、リンカーンを運転するジャック・ハフマンが目の前を横切る古臭いトラック二台が通り過ぎるのを待つ間にそう口を開いた。

「お？ どうしたハフマン？ そんな深刻そうな顔をして。」

リンカーンの後部座席で騒ぐソ連兵二人の頭を両腕に抱え黙らせたイタリア兵のリノ・アザロが驚いた顔でジャックを見つめる。

「数年前に起きた騒動の事ですよ。 此処で兵士が一悶着起こしたって慧音先生が言っていました。 それで騒動に関係した兵士は里から離れた場所で基地を設営しているのだから。 十年前から此処で暮らすアザロさんがどうして命蓮寺で生活しているんだろう。 ってジャックが思っているんですよ。」

トラックが辻を通り抜け、ようやく里の入り口となる舗装道へ走り出したリンカーンの助手席で車載のラジオが動かないかと選局つまみを弄るジェフリーが運転に集中するジャックの質問を代弁する。

「んあ？ その騒動は知っているが…俺はその時紅魔館で二等執事の仕事を承っていて里には降りてないんだよ。 だから詳しい事は分からない。 でも民家を焼いてた炎は夜に映えてたよ。 紅魔館

の主は真性の夜型だからね、館のメイドと執事に抜擢された他の兵士と一緒にその夜は炎を見続けていたっけ。」

「ハフマン、そこで車を止める」

先ほどからずっと何かを凝視しているような目つきをしていたラデックがぶつきらばうに車を止めさせる。ジャックが要求どおりに里の入り口から少し進んだ所にある「妖怪飛び出し注意」と描かれた道路標識の袂に車を止めると、待ってましたと言うように後部座席に座る四人は車を降りてリンカーンのリアトランクを開ける。寺子屋を出発前に彼らが頭陀袋スタを突っ込んでいたのは知っていたが、その中身までは知らなかった。彼らはおもむろにそれぞれの袋から木と鉄で組み立てられた物体を取り出す。

一番大きかった袋に入っていたのは一メートル弱の軍用小銃と弾薬蓋だった。リノが点検しているこの小銃は第二次大戦中にイタリア軍で使用されたM1938カルカノライフルだ。本銃は前任のM1891カルカノライフルがイタリア軍のエチオピア侵攻時に「接近戦では欠陥が多い」と泣く兵士（一番の原因はお前達だ）の要望に合わせ設計された銃である。正式採用と同時に第二次世界大戦に参加してしまい能率の良い補給と装備改変ができず、結果前線には口径の違うM1891とM1938が混在する結果となっていた。隣の兵士から弾も貰えない軍では上手に戦争は不可能だ、それを体現するようにイタリアは1943年に降伏している。

降伏したイタリアから放出された本銃が各国に破格で輸出され、その中でも米国に輸出された本銃の一挺は日本製の照準眼鏡を取り付けられ、ケネディ大統領を狙撃している。彼が撃たれた際に乗っていた車両の同型に狙撃された際に使われた銃が入っている光景はとてもシニールである。

もう一つの袋からは三挺の短機関銃が姿を現した。三挺のうち二挺は同型で、一挺は違っている。二挺を一挺ずつ分け、ドラム式弾倉や箱型弾倉を装着し、ポルトや照星を点検するラデックとフェリックスの二人。彼らは戦車跨乗兵らしくPPSh-41短機関銃を持っていた。

フィンランド軍と行っていた森林戦ではフィンランド製のスコミ短機関銃に大苦戦していたソ連が大急ぎで既存の短機関銃を改良し生産性を高めたのが本銃だ。発射精度はあまり良くないがバラ撒きながら撃つコンセプトなのであまり気にしなくて良いようだ。全体的な性能が高いPPSh-41はその後ベトナム戦争に使用されるなど、活躍は長期間にわたった。

もう一挺はドイツ軍下士官のリベルトが点検している、黒光りするベークライトと鉄で作られたそれは第三帝国を代表する短機関銃であるMP-40だ。従来のベルグマン18短機関銃やMP28を保有していたドイツだったが、それ以上に歩兵の火力を強化できる銃を設計した。それが本銃なのである。この銃も戦後ソビエトが接收し傘下の勢力に払い下げ、朝鮮戦争に借り出されるなど此方も息が長い。

彼らが私物の銃を点検していると言う事はこれから危険になるのだろうか、ジャックとジェフリーは顔を見合わせ、自分達がベッドにM9拳銃を置いて来てしまった事を思い出す。万が一、一昨日のルーミアみたいな妖怪が襲ってきた場合、今度こそ自分達は無力だ。

そう思った矢先、運転席にナイロン製のホルスター二つとピストルベルトが投げ込まれる。

「君達のベッドに掛かってたやつを持って来てみたよ。それにし

「ても見ない拳銃だな…それ」

前方に湾曲した弾倉を装着しているPPSh-41を茶革のスリングで背負ったフェリックスがジェフリー達のM9拳銃に物欲しげな目を向ける。前世代の拳銃とは違いスライド部の形状が全く異なるから無理は無いだらう。

「え？ これですか？ これはアメリカ軍の正式採用銃「M9ベレッタ」ですよ。9mm弾丸を十五発、薬室に装填済みなら十六発撃てる代物です。」

F-14を降りたときから一度も使っていないので弾倉に入っている弾数も当時のままだった。M9拳銃は当分使う必要は無いので薬室から弾丸を引き抜きポケットに一発を入れ、M9をホルスターに戻す。

「拳銃で十五発かあ。そうだ！ 自分のPPShと交換しませんか！！」

「おいフェリックス！！俺達の武器を弱体化させてどうすんだ！予備弾薬すら無さそうな拳銃を持っても意味が無いだらう！」

自分のPPShを犠牲にしてまでM9が欲しいのか、フェリックスはしきりに交換を要求してくる。それを必死(?)に制止するラデックが今では正義に見える。遂にM9拳銃の入手を諦めたフェリックスは物悲しい顔をしながらPPShを抱えリンカーンに乗り込む。調整を終え、ほっと一息するアザロとリベルトもそれぞれ銃を持って乗車する。最後にラデックが乗り込む筈なのだが、彼は何故か森を睨み続けたままで動こうとしない。

刹那、人里を抜けた風がリンカーンを包み込む。旧車にあり

がちの嫌な排気煙を吹き流してくれるのは嬉しかったが、ラデックの顔は一層険しさを増し。

「お前達…構えろ、風は左から流れてきた。」

彼がぼそりと呟く。それを合図に後部座席に乗る者は一斉に銃のボルトを引き、ラデックがいる風下の方向に銃口を向ける。

ラデックも手持ちのドラム型弾倉を装着したPPShを風下に構えた。「人里を一步でも出れば自由射撃区域も同じだ、自分の身は自分で守ること」、寺の放送で言っていた事項の一つだ。もう里から脱している場所なのだから、いつどこでどんな妖怪に出会うかも分からない。妖精かもしれない。強かったら？弱かったら？攻撃方法は？束でかかって来るかも知れない。まるで本物の戦場に突き落とされたような緊張が前部座席の二人を襲う。既にM9拳銃を抜き、妖怪が出てくるかもしれない茂みへ照準を合わせる。

今、引き金を引けば何事も無かったように発車できるのか？鉛弾では妖怪を倒せないまでも妖精は消滅させることができるらしい。では妖精だったら撃っても良いのか？もしかしたら人間かもしれない…。

「…？ どうしたんだ…手が震えてるぞ… ドアに腕を乗っけておいたほうがいいかもな」

そんな事を考えていたらいつの間にか手が震える。誰に指摘されたか分からないが二人は座席に座りながらドアトップに肘を置き、手のブレを抑制する。

「車内から二時半の方向、何か動きました！」

そう耳打ちしたフェリックスが銃口を少し前へずらす。他の者もそれに習う。

「来るな、引き金へ指掛け…まだ撃つなよ……」

リノが小銃の狙いを正確にするために息を止める、射撃準備を促したりベルトは念のためリンカーンの後方を見張る。前部座席の二人もM9拳銃が持つ引き金に指を掛け……

第四十三話「マンドリン」バラライカ」（後書き）

マンドリン＝PPSh-41の日本軍での呼び名  
バラライカ＝の独逸軍での呼び名

第四十四話「風を鎮めて」(前書き)

三月二十一日

午後零時四十三分

人里付近



## 第四十四話「風を鎮めて」

ラデックの予想通り、茂みの中では何かが蠢いていた。物体は笹の茂みの数メートル奥をオロオロしており、中々出てきそうにも無い。第一、鋭い笹の葉が茂る中を歩き回るのは皮膚に良くない。

「ありや多分熊か何かだよ。獣じゃなきゃ笹の茂みなんて通れないと思う」

リンカーン車内で立ち上がるフェリックスが構えたPPSh-41を降ろし、茂みを指差す。先ほどの張り詰めた空気は何処へやら、皆が拍子抜けしている。

「最近じゃ森に食料が無いんじゃないかな？ だから里に来るのかも。ローゼンフェルドの推測に一元賭けた」

ここでリノが賭けを提案する。

「きつと里を襲いにきた妖怪ですよ！ 我々が未然に食い止めれば白蓮様にも褒められますよ！！」

MP40の引き金を今にも引きそうなりベルトがフェリックスの推測に対抗馬を出した。

「英雄志望も悪くない。リベルト伍長に一元賭けました」

M9拳銃を構える両手を解き、茂みを凝視するジャックが賭けに乗る。何故一昨日に幻想入りした彼が円を持っているのか、

実は寺子屋から車を出発させる際に本日の給料として五円を慧音から貰っていたのである。通貨単位は日本の明治時代から動いていないので、五円とは相当な額である（およそ十万円）。

「俺は降りるよ。 お金無いし…」

やる気無さそうに答えるのはジェフリーの方だ。漂流後数日で仕事が見つかる方が珍しいのであり、決して働きたくないのではない。

「お前達…まあ俺はフェリックスに一円賭けた。 それに調整した照準も試したいしな！！ 正体なぞ撃つてから確認すれば良いからな！！」

ラデックは大声で茂みに話しかける。途端に茂みの動きが一瞬止まり、今度は彼等の許へ猛スピードで近づいてくる。これにはその場にいる誰もが驚いた。

「まずいこつち来るぞ！ 撃て撃てえ！！」

「ちよ、ちよっと待って下さいってえ…誰か確認してから撃つて下さいよお」

茂みの中の物体は可愛らしい少女だった。彼女は彼らに通じる言葉で射撃中止を呼びかける。「チッ」と舌打ちをしたラデックがリンカーンへ向き返り、右手の平を地面に向け上下に小さく動かす。どつやら「銃を降ろせ」と言っているようだ。合図を見た五人の中には博打が台無しになったので表情が暗くなっている者もいる。

「全く…神様を殺すなんてどうかしてますよ！！それに話を聞いてたら、私が熊ですか！！それは私だって笹の茂みに隠れてたのは悪かったですよ。でも「車が来たら茂みから飛び出して思い切りぶつかった後に足を押さえて怪我のフリをすれば運転手が降りてくるから『守矢神社に連れて行ってください』と言えば信仰が集まるよ」って諏訪子様が仰ったので仕方が無かつたんです！！」

茂みから現れた「神様」は目の前のラデックを無視、づかづかとリンカーンの前部座席に座る二人に詰め寄った。藍染めに白抜きの紋様が施された綺麗な袴を泥で汚し、袴と同じ染め色で縁取った水干には何本か笹の茎が突き刺さっている。肩まで届く髪はベスブ石のような緑色をしていて左側頭部には蛙を模した髪留めを差し、その真下に当たる髪を紐で纏めているが、その紐は蛇を模している。捕食生物と被捕食生物の髪飾りを日差しに輝かせながら神様はリンカーンのボンネットによじ登り、仁王立ちした。

「見ない顔が二つですね…これは勧誘の前に自己紹介をしたほうが良いのかな…マニユアル、マニユアル…」

「神様」はどこからともなく小さな紙を取り出し、しきりに文字を読んでいる。何やらブツブツ呟いた後に紙を懐に戻す。

「え〜つと、私の名前は東風谷早苗です。あの山のてっぺんにある神社で風祝カゼハフリを務めているのですよ〜」

早苗はそう言って道路の彼方を指差す。道路の向こう端にぼんやりと巨大な山が見える、ジェフリーとジャックにとっては初めて未知との遭遇を果たした場所でもあり。指差した方向を見た二人は少し心拍数があがっていた。

「お二人さん、名前は？」

運転席と助手席の二人を指差し、名前を問う。

「あ…ジェフリー・フィブスターです」

「ジャック・ハフマンと申します…」

ボンネットに仁王立ちしている早苗が威圧的なのか、それとも緊張してしまったのか少し声が震えている。

「生年は？ どうせ一九二〇年代ですよね？」

後部座席から不平の声が上がる。

「そこらへんで良いだろ！ 俺達は先を急いでるんだ！！」

銃の試射が出来ない事に腹を立てたラデックが声を荒げる。 彼の銃の試射が出来ない事に腹を立てたラデックが声を荒げる。 彼はそのまま運転席のドアを開け、足をアクセルに突っ込む。

「ハフマン、ギアをバックに入れてくれ」

そう指示されたジャックは言われるままに右手でギアを変更させる。 ギアはRを指しており、アクセルを踏めばリンカーンは忽ち後進するだろう。

「こら！ 私を差し置いて何をしているのですか！」

ほんの短時間でも視線が向いていないだけで立腹する早苗、彼女が次の言葉を発しようとした時、ラデックが早苗を見つめる。

「早苗さん。貴女がここにいる理由次第ではお話を聞きましょう。さあ、話してごらんなさい」

急にラデックの言葉遣いが柔らかくなる。もう既に爆発寸前なのだろう。

「勿論いいですよ？ 守矢神社の信仰を…」

「やっぱりか！ その言葉は今日で七九回目！！ いつもどおり俺は！ 絶対！ 行かない！！」

ラデックは運転席に寄りかかり、思い切りアクセルを踏みつける。リンカーンのエンジンは唸りを上げ、タイヤは今までの轍の上に沿って新しい轍を築く。急な動きに早苗はボンネットから振り落とされ、ベシヤツと言う音と共に地面へ落っこちた。

「ラデックさん！？ 良いのですか！！？」

前部座席の二人は完璧に動揺している。運転席のジャックはバツク中であるリンカーンのハンドルから手を離している。同時にラデックも後部座席へ転がり込んでいた。

「お前！ ハンドル！ ハンドル！！ ええい貸せ！！」

声を荒立てたりノがジャックを持ち上げ、座席を交換しようとする。リノが運転席に座ろうとした時、リンカーンの車体が大きく揺れた。どうやら近くの木に衝突したらしい。

「痛てて…これだから初心者は…」

ハンドルに額をぶつけたリノが少しだけ悶えてからハンドルを握る。リノの運転能力はジャックの運転能力を初心者呼ばわりしただけはあった。クラッチを踏みギアを二速に戻す、アクセルを思い切り踏み込むと同時にハンドルを右に切る。後輪が左へ横滑りを開始すると共にハンドルを元に戻す。ラリー等のレースで見られる逆ハンドルの応用だ。車体を左に半回転させ道路に戻り、クラッチを踏んでからギアを三速に設定する。

振り回される車内からジェフリーが必死に顔を出し、早苗の安否を確認する。幸い早苗は怪我もせず服に付着した泥を溜息混じりに払っている。ふと二人の視線が合う、早苗は笑いの表情を崩していなかった。それが逆に怖い気もするが。

「自分：生まれは九十年代ですから！！！！」

エンジン音に負けない大声で早苗に叫ぶ。それを聞いた早苗が驚きを隠せない表情を見せた。

「ちよつと！！ まさかアナタ……」

『現代人』と言いたかったのだが、既にリンカーンは十数メートルも離れていた。もう声も聞こえないだろう。

「（行っちゃいましたか。後で紅魔館へ行きましょう、「私と同じ人」に会えるなんて……逃がしませんよ）」

袴の泥を一通り落とした早苗はゆっくりと立ち上がり、口元だけで笑ってみせた。

第四十四話「風を鎮めて」(後書き)

夏は天敵：

風祝<sup>ニ</sup>かつての諏訪大社に置かれていた役職。「祝」の字には不可能な願いを祈るという意味も込められており、北東の方角から諏訪湖へ吹く「おろし(八岐大蛇)」を鎮める役目を負っていました。

第四十五話「Foot Soldier」

Air Force Soldier

三月二十一日

午後一時五分

霧の湖



紅魔館までの一本道はある程度は舗装されていたものの一車線分の幅しか無く、おまけに路肩はびっしりと樹木が生えていた。これでは対向車が来ても避けることが難しいし、エンストを起こしたら他の車に怒られるだろう。

「ガンスカヤさん…良かったのですか？ アレ…」

後部座席に移動したジェフリーはもと来た道を何度も振り返っている。助手席に座るジャックは途中の泥道で顔面から泥水を浴びていたので黙り込んだままだった。

「良いんだよ。 あれは山の頂にある神社の勧誘なんだからな。 おかた里に降りて今晚の夕食材料を買うついでに街角であの里に住む小汚い猿どもに『ありがたい言葉』でも投げかけるのさ。 そうすると奴等はすぐに後援会を乗り換えるんだよ。 今まで命蓮寺に住む俺達がしてやった公共事業なんて何処吹く風さ。 まあ白蓮様とあっちの神社の首領が仲良くやっている分、どちらかが廃れる事は金輪際無いのだから。」

「やはりガンスカヤさんもその騒動を知っているのですか？」

ジャックが自身の沈黙を破り、後部座席に振り返る。

「ああ、俺はベルリン市街戦の時に跨乗していたT-34ごと川に転落してな、その騒動の一年前に他の跨乗兵と共にこっちへ漂流したのさ。 フェリックスは同じ戦車に乗っていたけどこっちへ来たのはほんの二週間前だ、俺達は二週間前にようやく部隊を再編するこ

とができたのさ。」

「やっぱり、自分がご迷惑をかけたようでは？」

フェリックスは車外を見たままつまらなさそうに答える。どうやらこの世界に転移する時間が同時であつても到着には差が発生するようだ。これは自らの目で見ている二人にとって驚く要素ではない。そんな会話をしているうちに一本道は段々と幅を増し、湖畔に到着していた。涼しい風が心地良い湖畔の周辺には大きな木箱を積んだ軍用トラックや水陸両用車、土嚢を積んだ機関銃陣地があつたり水上には幾つも船外機つきのボートが並んでいる。小舟や揚陸舟艇・戦車を利用して向こうの洋館に上陸するんだとフェリックスが目を見守らせて言う。集合地点に集まつた車両は大戦中の物が多かつたが、戦後の装甲車の姿も少なくない。まるで軍事博物館の野外展示場だ。交通整理をしていたベトナム戦争時の米兵がリンカーンをロープと杭で急造した駐車スペースに案内する。右に左に入り組んだ場内を滑るように運転し、指定された番号札が刺さつたスペースに前向きでリンカーンを停車させる。

「隣はクロアチアの装甲車だけど、持ち主がいまいやうだからソ連軍・ロシア軍の居留地である「クレムリン」で保有してるんだってさ。何でもソレは戦後ソヴェイトで造られた装甲車なんだって。こんな格好良い装甲車を作れるソ連は偉大だよ。それで俺達は先にあつちの島へ向かつてるよ。何かあつたら警備係りに聞いてくれ」

意気揚々と車外へ飛び出したフェリックスが指差していたのは一九六三年にソヴェイトで量産が開始された装甲偵察車であるBRDM-2だった。全長およそ六メートル、全幅・全高ともに二・三メートルの割とコンパクトで洗練された車体に八気筒V型ガソリンエンジンを搭載しているが、車体後部にエンジンルームを設ける事に

より戦闘区画を広く設ける事を可能にしている。

基本型の武装は十四・五耗重機関銃が一挺、七・六二耗機関銃一挺が搭載された砲塔であり、他は車内に運転手と車長兼砲手以外に二名の武装した斥候を輸送できる。装甲厚は最大でも十四耗であり榴弾の破片が流れ弾程度しか防御できない上に装輪はゴム丸出しのタイヤなので被弾は禁物である。あくまで偵察車なのだから部隊の先陣を切って戦うなんて真似は出来ないのであった。その役目はソ連製の兵員輸送車であるBTR-60や歩兵戦車であるBMP-1が担当してくれるのだからだ。

拡張性が高くバリエーションも豊富で最終的に二万台を生産、四千台を傘下の諸国に輸出した。ソ連が崩壊した現在でもおよそ七千台が中東や北欧で使用されている。

リンカーンの左隣に駐車してある一台は相当に草臥れており、擦れてぼろぼろになったクローチアの国旗章が悲哀を物語っている。

「お、いたいた…お前達は朝っぱらから何処へ行ってたんだ。一等兵のお二人さん」

一時的にラデック達と別れ、リンカーンの駐車スペースを後にして少し歩いたところでBDRM右隣に駐車してあった古い独逸軍の軍用トラックから聞き覚えのある声が聞こえる。ジェフリーとジヤックが振り返るとトラックの助手席にはAC-130Hの機長であるロイ・マッキンリー大尉の姿があった。彼は二人に近づいため助手席用のドアを勢い良く開けたものの、トラックの隣に止めてあった独逸軍の中型ハーフトラックにぶつける。投光機のような赤外線暗視装置の整備をしていた独逸軍工兵に怒鳴られながら、大尉は確実に階級が低い工兵に謝りながら二人に歩み寄る。

「あの工兵怖いな…そんな事より、今日は朝もはよから何処に行つてたんだ？」

「大尉殿、実はハフマン一等兵があゝの里に建設されている教育スペースで教師の仕事を任せられたのであります！　自分はその付き添いで……」

「だあゝもう分かった分かった。要は仕事を見つけて万々歳って訳だな。今回は仕方ないが、外出する時は俺に一言言ってからにしてくれ。お前達の教官を受け持ってくれたウィルバー先任が発見されるまでは俺が保護管理する事になってるんだから、あと……まあ……その堅苦しい敬語は無しだ。これからは気軽に話してくれよ？」

本来なら紅魔館の庭園なり館内なりで二人を引き止めても良かった筈だが、大尉には今すぐにも二人に聞きたい事があつたのだ。

「実は……そのおゝフィブスター一等兵？お前の家族構成は何だ？」

唐突すぎる質問にジャックは若干の違和感を覚えたが、相手は上官だ、偽り無く話さなければ。

「え、まあ両親と犬が二匹で……祖母が隣家に住んで……祖父は大戦時に行方不明だそうです。B-25の機長をやってたんだって、父が酒に酔うと決まってその話でした。父は湾岸戦争に従軍中、左脚に銃弾を受けて帰国しています。私は空軍学校の入学式当日に『俺の父さんと同じ空軍に入れるなんて名誉なことだ！』なんて会場で喚き散らし、壇上にいた司会進行が悪乗りして父にスピーチをやらせたんですよ。最初は湾岸戦争の体験話を面白おかしく話していましたが、ふと父は被弾した時に摘出していた敵兵の銃弾を鎖繋ぎにしたネックレスを首から外し、空に突き出しながら……」

「『こんな一発の銃弾じゃ歴史は変わらない…変わるとしても此処にいる学生の一人、私の息子が存在しないだけに終わっている。しかし君らは未来のエリート士官だ、私みたいに虫けらのような歩兵じゃない。魔法の杖につけられたボタンを押すだけで何十人もの命を奪える鳥を従える者が生まれるかもしれない、たった一つのボタンを押すだけで何千万もの命を奪える階級につく者が生まれるかもしれない。君達はその世界にもう足を乗っけているんだ。両脚で空へ乗るのも、怖気づいて降りるのも勝手だが。乗りかかった船なら…乗ってしまえ…』…だったかな？ジェフリー・フィブスター一等兵？」

ハーフトラックを挟んだ隣に駐車する同型のトラックから小太りの中年がよいしょと降りる。車内に置いていた勲章だらけの上着を羽織れば冴えない中年から空軍広報中将へ八秒で変身だ。

「（だ…誰？…って聞いてない…）」

ジェフリーは隣で固まっているジャックにアイコンタクトを交わすも応答が無い。しかし父の話を知っているとすれば入学式に来賓で来ていた将官だろう。できるだけ粗相の無い様に…

「こ…これは中将殿！？じじ自分の、父親が言っていたスピーチをおおお覚えでございますのですかかか…」

ジェフリーは顔を真っ赤にしてふかふかの草地に仰向けで倒れこむ。

「ロイ君…変な敬語をさせないように釘をさした筈なんだけどなあ…まあこれじゃ小舟で連れて行くのは無理だ。揚陸戦車を手配してある。」

ダルグレン中将はジェフリーの頬を木の棒で突きながら大尉に運ぶよう命令する。

「いくらエリート校在学中の兵でも、いきなり将官が現れたら緊張で大変ですよ…少しは考えても…」

大尉は二人を両肩に抱え、中将と共に部下が待つ船着場へと歩き始める。

「それで…彼の祖父は確実なんだな？………」

中将は溜息混じりで大尉に聞く。

「はい、祖父はB・25の機長をやっているって事ですし…会わせますか？」

大尉は二人の重さで足取りが遅いものの、中将の歩幅を差し引きすれば絶妙なスピードを保っている。

「いや。少佐は部下を鈴つけた張本人が見つかるまで気が立ってるな。そうじゃなければAKMを欲しがる訳が無い。」

大尉が返事をする間もなく四人は船着場へ到着。荷物を船外機つきの小舟に乗せ、待機していた部下達と共にLVT（軌道式上陸車両）の後部兵員輸送スペースに乗り込む。

会う事が絶対に有り得ないはずの祖父と孫が出会うなんて誰のイタズラなんだろうか？神様だらけな幻想郷では犯人探しは難しいだろう。

大尉は気絶した二人をLVTの床に固定したのを確認すると運転

席のハッチを叩き、LVTのスクリューにスイッチを入れさせた。

LVTは他の小舟や上陸用舟艇と共に紅魔館がある島へと小さな航海を始める。

第四十五話「Foot Soldier」

Air Force Soldier

感想等はお気軽にどうぞ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5707i/>

---

東方機械大鳥

2010年10月13日14時03分発行